
桜兎と愛の歌

緋采

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜兔と愛の歌

【Nコード】

N4254V

【作者名】

緋采

【あらすじ】

神楽ちゃん総受の短編小説になります。タイトル横にカプ表記。

キミが好き - 銀神 - (前書き)

銀神です。

キミが好き - 銀神 -

キミが好き

あなたが好き

その一言でいい。

言えたのならば…

神楽は、一人悩んでいた。

悩みの種は、そう、恋の病。

意中の人。それは…

「なんかそういうの言わなくても、ヤツを見てる顔でわかるヨね…」

そう言っつて、神楽は本日何回目かのため息をついた。

たぶんあの人は知っている。わかっている。この想いを。

だからきつと、怖いのかもしれない。

あの人の答えを知らないから。

この想いに気づいたのは、暗闇で、自分を助けてくれた時から。

「銀ちゃん…」

ため息混じりに、その名を呼んだ。

無論、誰かが反応してくれるわけでもない。

神楽は、布団を思いつきり被る。

誰よりも、好きな人を考えながら、ゆっくりと眠りについた。

押入れの扉を開けて、眠る銀時を叩き起こして、この想い伝えた
い。

もう、心も体も全て銀時のものだってことを、伝えたい。
あなたの腕が、声が、背中が、すぐそばにあって、鈍った私の感情を呼び起こす。

キレイな言葉は見当たらないけれど、ただ単純な言葉しか思いつかないけれど。

どうしようもないくらいに好きな人に。

「銀ちゃん大好きネ…」

君が好き

「想うのは、簡単なんだよな…」

銀時は、一人布団に寝転がりながら呟く。
好きだから怖かった。

何でも知ってるようなふりをして、誰かに想われていることが怖かった。

まっすぐすぎる、神楽の目が、心に焼き付いて離れない。

「言葉にするのも簡単なんだけど…」

今一步、踏み出せないのは、どれだけの愛を言葉に込めるか。
溢れるほどの愛を、情熱を押さえられるのか…
好きすぎるから、悩むんだ。

銀時は、疲れたようにため息をつき、布団に潜り込んだ。
ふと思いついたように、言葉が出た。

「おやすみ」

誰に言っているわけでもない。ただ、すぐ側に彼を感じたから、
紡いだ言の葉。

眠りにつく。その夢の中に、君を。

誰より、その腕に抱いていたい、君を夢に見ていたい。

手を伸ばせば、すぐに触れられる。そして何かが、変わっていく
のだろう。

この、溢れるほどの愛を、君に。

始まった、その恋物語。

初めて出会った、その瞬間から始まった恋。

愛を紡ぐには、まだ少し早くて、けれど互いが愛しすぎて。

止まらない、終わらない恋物語の始まりの言葉は、君が好き。こ
の一言から。

e n d

キミが好き - 銀神 - (後書き)

最初は短めで、ラブラブがいいかなと思い、こんな話が…

やだ…超恥ずかしい！

まあ、色んな意味で銀さんと神楽ちゃんって、ラブラブだよね！ってことだ。

お粗末さまです。

季節外れにご用心・銀神・(前書き)

銀神(神楽総受風味)

ちよつと下品な描写あります。

季節外れにご用心 - 銀神 -

「鼻の中に妖精さんがいて、そこで用足してるだけネ…」

そう言つて、神楽はティッシュを鼻に押し付ける。

その”妖精さんの排泄物”がティッシュにズルズルと、神楽の鼻から出てくる。

もちろん、それはただの鼻水である。

かんでもかんでも出てくる鼻水のせいで、神楽の鼻の下は真っ赤になり、ティッシュも尋常じゃない量を消費している。

「あーハイハイ。締りの悪い妖精のために、オメーの鼻に正丸でも詰めてやろうか？」

更に虚ろな目で、顔全体も赤い。鼻水だけでなくくしゃみや、喉の痛みを訴えている。

病状を聞きながら銀時は、神楽がそこらへんに投げつけるティッシュをゴミ袋に捨てていく。

「もうね、銀さん怒らないから正直に話しなさい？昨日雪が降って公園に遊びに行つて、なんでこんななるまで遊んでたの？」

なんで沖田なんかに担がれて帰つてきたの？二人で何してたんですか？返答によつては、お父さん許しませんよ」

「うわー！銀ちゃんが3人に見えるアル！銀ちゃん影分身の術使えるなんてナ トみたいでスゲくね？マジスゲくね？」

初め諭すような口調だったが、だんだんと語尾を強めていき、少し怒りを込めたのだが、神楽に通用しなかった。

座った目に赤ら顔で、神楽は銀時を見てケラケラ笑っている。
怖い…銀時は、心底からそう思った。

そう、今の神楽に、銀時の言葉なんて上の空。神楽は今、季節外れの風邪に侵されていた。

なぜなら、先日かぶき町で季節外れの雪が降った。

雪の惑星の天人だかなんだかが来て、その影響で江戸、なかでもかぶき町は1mを超える積雪を記録したらしい。

おかげで、雪かきの仕事が舞い込んだのはいいが、神楽が風邪を引いてしまったのだった。

雪かきの仕事が終わった夕方、雪がまだちらついていると言うのに、神楽と定春が公園に走っていった。

遊ぶのはかまわないし、早く帰ってこいと注意した。子供と犬は雪とか雨とか台風とかが大好きなのも知っている。

だから油断していた。

気がつけば日も暮れ、夕食時だというのに戻ってこなかったのだ。銀時達は心配し、探しに出ようとした時、沖田が神楽を背負い、定春を連れて万事屋にやってきたのだった。

その時既に神楽の頬は赤く染まり、意識を朦朧とさせていた。

沖田は短く挨拶だけして、物凄い速さで走っていった。

ドップラー効果のように後ろから土方の叫ぶ声が聞こえたが、聞かなかったことにした。どうせ仕事サボってたんだろ。

そして今日、今の神楽に至る。

「オメー何風邪なんぞに、最終防衛ラインを破られてんだよ？オレなんてイーグル飛んでるよ。空軍だよ。エアフォースよ？」

お前の身体は原始時代の槍が防衛ラインですか？コノヤロー」

「アハハー銀ちゃんにピンクのカバさんで、西のお空に飛んでつてるアルヨ」

「ダメだ…こいつぁ完全に熱で脳みそ茹つてやがる…西のお空に飛んでっつてんのはオメーだ。神楽。ほら、いつまでも起きてんじゃねえ。病人は寝てる」

銀時は溜息交じりに、不気味にケラケラ笑い続けてる神楽を抱きかかえ、居間の布団に寝かせた。

「銀ちゃんの布団ハゲと同じ臭いがするネー」

「ウソつけ。銀さんまだ花の20代よ。気のせいだよ。つたく、風邪引いたときくらい、もつと色気だせつてんだ」

そう呟いて、うわごとのようにケラケラ笑ってる神楽に布団をかけてやる。

そつと手を握れば、確かに熱い。相当熱が出ているようだ。ふと、声が途切れた。どうやら笑いやみ、少し落ち着いたのか、目を閉じたらしい。

「普通に寝てりゃ、かわいいもんなんだけどなあ」

銀時は体温計を手を持ち、計ろうと神楽のパジャマに手をかける。そこで、ハッした。

『いやいやいや、別にやましいこと考えてるわけじゃねえよ？確かに、今ちよつと病弱な神楽ちゃんもなかなか…なんて思ったよ？でも一瞬。ほんの一瞬。F1カーもびつくりな速さで通り過ぎてつたから、そんな考え！』

それにね！脇に体温計挟まないと、正確な体温わかんないよね？口だった神楽ちゃん、下手したらこれ食べちゃうかもしんないしね！だから別に、これは正当な医療行為であつて、服をめくるのは、決

「してやましい…!」

「旦那、心の声がだだ漏れですぜイ」

「!?!?!」

突然真後ろから聞こえた声に、銀時は激しく驚く。

「テメー！なんでここにいるんだ！」

「しっ！チャイナが目を覚ましちまうでさア」

振り向けば、今日はオフなのか、私服の沖田が銀時の真後ろに座っていた。

それに驚いた銀時は、思わず大声を出してしまったが、それを沖田が静止する。

そして何気に布団の横に移動し、体育座りで神楽を見る。

「…いつからここにいた」

「旦那がチャイナを布団に寝かしつけるときからでさア」

「こそ泥か！全然気配感じなかったんだが…!」

「副長を殺るには、これくらい出来ないといけねえんでさア」

「…」

さも当たり前のように、ケロっと殺害発言を吐く沖田に、銀時は少しだけ土方に同情した。

「とにかく、なんでうちの神楽ちゃんがこんなことになったのか、話聞こうじゃねえの。ほれ、こっちにこい」

「いや、もう少しコイツの無防備な姿とかなんかエロい息遣いとか寝顔とかみて…」

あ、離せ、コラ」

首根っこを掴み、ズルズルと布団から沖田を離す。

そして応接室のソファ、それも寝室とは反対側に無理やり座らせた。

「ガード固え…お父さんが…」

「なーんか言ったか？」

大体、人様の娘をあつ雪の中連れて歩いた挙句、風邪引かせるたあどついうつ見だ？コラア。

返答次第によつちや、私刑執行すんぞ、コノヤロー」

完全にチンピラ顔になる銀時とは裏腹に、なんの悪びれもせず、沖田は平然としていた。

ただ、少しだけ唇を尖らせていた。

「ワザとじゃねえんですわ。」

ただ、雪降って、テンション上がって、チャイナとハイパー雪合戦しただけでさア…」

もちろん、こんなことになった責任を取る。そのつもりでここにきたんでさア。

というわけで旦那、神楽さんを俺の嫁に…」

「人ん家の娘風邪引かせといて、どこまで図々しいんだコラー！」

「痛！」

ゴインと、いい音が部屋に響いた。

さすが頭が空っぽだと名高い男。いい音出してる。

「銀ちゃーん…ん…」

銀時が沖田をどついたと同時に、部屋の方から蚊の鳴くような声が聞こえた。

間違いない、神楽が呼んでいる。

二人は光のようなスピードで、神楽の布団の脇に座った。

「なんでサドまでいるアルか…風邪ひいた私を笑いにきたアルか…」

「普段気の強いヤツが弱ってる姿を拝みにきたんでイ」

「治ったら覚えてるヨ、クソガキ…」

つい片意地張ってしまう沖田の売り言葉に、つい神楽も朦朧としながら反応してしまう。

まったく素直じゃねえ奴等だなと、銀時は思う。

ふと、神楽の視線に気がついた。

「どーした？腹でも空いたのか？」

優しく神楽に声をかける銀時。

熱のせいだとわかっていても、火照る顔の神楽はなんとなくエロ

い。

鼻息が荒くなりそうなのを押さえて、銀時は努めて紳士的な態度をとる。

相当必死である。

「…ちよつとだけネ…」

「何がいい？梅がゆか？卵がゆか？」

「卵……と……マミーが作ってくれたプリン……」

そう、うわごとのように呟いて、神楽はハツとした。

ここに、マミーはいないことに気付いたからだ。

「ごめんネ…今のなしで…卵がゆだけでいいアル……」

神楽は申し訳なさそうに、そして、少し寂しそうな顔で、銀時達を見る。

ただでさえ風邪を引いて迷惑をかけてしまっているというのに、無理難題を言ってしまったこと。

そして、自分のマミーはもう……

「なんだ？メインだけでなく、デザートも御所望ときたか。しよーがねえーなあー」

「沖田スペシャルフルコース作ってやらア」

神楽の思いと裏腹に、やる気満々な二人。

その声に安心しているのか嬉しいのか、神楽は少し布団を上げ、口元を隠してしまう。

照れている、その仕草がたまらなく愛しい。

思わず二人は、今にも襲い掛かりそうになりながらも、必死で理性を保つ。

「よーし待ってる神楽ちゃん。銀さんが腕によりをかけて作るからな」

無理に声を上げて、平静を装いながら部屋を後にする。

このままでは大人として、一番いけないパターンに陥ってしまう。それだけは、なんとしても…

「旦那、トイレ借りていいっすか？ 精力つけさせるには、やっぱり…」
「ちよっと待てコラアアアアア！」

沖田がさりげなくコップを持ち、トイレにそそくさと向かうのを、銀時は全力で阻止した。

間違いなくこのコップに（自主規制）を入れ、それをプリンにぶち込む気だ。

ヤツの目は、マジだった。

「テメーふざけんなよー！ 人のかわいい娘に、下品なところからでた牛乳で作ったもん食わせるんじゃないやねぞコラア！」

というか、これ見てる人絶対ドン引きだよ？！ アサリもイキがいの獲れるくらい引いてるよ！ コレ！

こんな下品なもん、多感な少年少女が見ると悪影響しかねえんだよ！ 今すぐブラウザバックしろ！」

「例えがおっさん臭えですぜ…」

つつか、俺ア男だから母親みたいに母乳なんか出ねえんですわ。出る乳っぱいのった…」

ガスツと、またしても沖田の頭に銀時の一撃が入った。
今度はとても鈍い音だったのは、きつと気のせいだろう。
倒れている沖田の頭から、シューという音と共に煙が上がっているのもまた、気のせいなのだ。
銀時は軽く首を鳴らし、台所に立ち考える。

「しかし、おかゆとプリンか…
自分で言っというてなんだが、プリンなんざ食った事はあっても作ったことはねえなあ」

「奇遇ですな、旦那。俺もですぜい。ありゃデケーのをいかに崩さず、ぷっちんするもんでさア」

「…」

いつの間にか復活していた沖田に目もくれず、銀時はため息をついた。

どう足掻いても絶望。

某ゲームのキャッチフレーズが聞こえてきた。
料理に関しては、どう考えても新八しかない。

だが、こういうときに限って買い物に行っていて、今この万事屋にいない。

肝心な時に役に立たないダメガネめ…

恨み節のように、銀時はブツブツ言いながら、とりあえず鍋を手取る。

プリンはおかゆの後だろ。まずはおかゆを作ろう。そう思ったのだ。しかし…

「あー…おかゆって、どうすりゃいいんだ？」

「生米から煮てくもんじゃ…えー……？」

頭の上に大量の？が浮かぶ。

銀時は軽く首を鳴らし、台所に立ち考える。

「しかし、おかゆとプリンか…自分で言っというてなんだが、プリンなんざ食った事はあっても作ったことはねえなあ」

「奇遇ですな、旦那。俺もですぜい。ありゃデケーのをいかに崩さず、ぶっちんするもんでさア」

「…」

いつの間にか復活していた沖田に目もくれず、銀時はため息をついた。

どう足掻いても絶望。

某ゲームのキャッチフレーズが聞こえてきた。

料理に関しては、どう考えても新八しかない。

だが、こういうときに限って買い物に行っていて、今この万事屋にいない。

肝心な時に役に立たないダメガネめ…

恨み節のように、銀時はブツブツ言いながら、とりあえず鍋を手に取る。

プリンはおかゆの後だろ。まずはおかゆを作ろつ。そう思ったのだ。しかし…

「あー…おかゆって、どうすりゃいいんだ？」

「生米から煮てくもんじゃ…えー……？」

頭の上に大量の？が浮かぶ。
銀時は軽く首を鳴らし、台所に立ち考える。

「しかし、おかゆとプリンか…自分で言っというてなんだが、プリンなんざ食った事はあっても作ったことはねえなあ」

「奇遇ですな、旦那。俺もですぜい。ありゃデケーのをいかに崩さず、ぷっちんするもんでさア」

「…」

いつの間にか復活していた沖田に目もくれず、銀時はため息をついた。

どう足掻いても絶望。

某ゲームのキャッチフレーズが聞こえてきた。

料理に関しては、どう考えても新八しかない。

だが、こういうときに限って買い物に行っていて、今この万事屋にいない。

肝心な時に役に立たないダメガネめ…

恨み節のように、銀時はブツブツ言いながら、とりあえず鍋を手取る。

プリンはおかゆの後だろ。まずはおかゆを作ろう。そう思ったのだ。しかし…

「あー…おかゆって、どうすりゃいいんだ？」

「生米から煮てくもんじゃ…えー……？」

頭の上に大量の？が浮かぶ。

こうしてる間にも、風邪を引いていても腹ペコ大王、神楽はきつ

とひもじい思いをしている…

焦りと苛立ちが、二人をますます焦らせる。

あれ？おかゆとかプリンって、こんなに難しかったっけ？

とにかく鍋に水と米をぶち込み、火にかける。そうすればきっと
どうにかなる。

そうだ、出汁だ！昆布…がないから、酢昆布を代わりに入れてみる。

臭っ！暖められた酢酸が鼻と目に攻撃しかけてきた！痛！強烈な臭いが！

などと、お約束をしているそんな時だった。

「おい、万事屋ー総悟いるかー？」

チャイムもなく、ガラッと万事屋の玄関が開く。

そして、ふわりとタバコの臭いが充満する。

「あれ、土方さん。何しに来やがったんでさア？」

「んだよ、ニコ中か…帰れ。今ここは禁煙だ。テメーの居場所はねえ」

「なんでそんなに、あからさまに嫌な顔してんだテメエら！」

土方が、タバコを吹かしながらキレる。

しかしいつものことなので、すぐに落ち着き、ガサッと手に持っていた袋を銀時に差し出す。

中には熱冷 ートと、栄養剤が入っていた。

「ほらよ、風邪っ引きに差し入れた。近藤さんから聞いたぞ。総悟が嫁入り前の娘を、傷物にしたってな」

その言葉に銀時がキレ、沖田の胸倉を掴む。

「やっぱりかテメー！！寒いからって人肌同士で…をやりやがったのかー！？」

「土方コノヤロー！何さらっとウソついてやがる！」

「やられっぱなしだからな。たまにはめられる…？なんだ、焦げ臭えぞ」

土方は自分の手元を見たが、タバコを落としたというわけでもない。

しかも、漂ってくるなんとも言えない臭いに、思わず顔をしかめてしまう。

「！」

臭いの元に気付いたか、二人がエライ速さで台所に向かう。

それに土方もついていった。そして、そこで見たのは、無残にも鍋にこびりつき、黒こげとなった何か。

辛うじて、熱された酢昆布の臭いがするが、もう悪臭には変わりはない。

「何作ってたんだ？」

「神楽がおかゆとプリンが食べたと言って言っただよ。

しかもプリンは、マミーが作ったヤツって言ってるから後回しにして、まずおかゆから作るうと思っただらこのままだ」

「あー？おかゆだったらまかせろ」

「ああ？変なもんいれんじゃねえぞ」

「入れるか」

そう言つて、土方は朝食の残りの冷や飯を冷蔵庫から見つけ、それをどんぶりに盛り、水といた卵を入れ電子レンジに突っ込んだ。その工程に啞然としている銀時と沖田を尻目に、チンっという小気味よい音と共に、湯気立つ卵がゆが電子レンジから姿を現した。

「ほらよ。卵がゆ、一丁あがりだ」

「マジか?!」

そこには確かにおいしそうな卵がゆがあった。

あまりの手際と、思っていた以上の完成度に、二人は呆然とした。フウっと、タバコを一本口に咥え、得意げな顔で二人を見る。そして、ポケットからいつものあれを出す。

「さて、仕上げのスペシャルトッピングとして、このマ…」

「何、完成品を一瞬でゴミに変えようとしてんだ!」

いつものように、大量のマヨネーズをトッピングしようとする土方。

それをさせまいと、完成品の卵がゆを銀時が奪う。

「あー？んだよ。せっかくうめえトッピングしてやろうと思ったのに」

「吐いたらどうすんだ？アア？」

「チツ…」

舌打ちしながら土方は、不満そうにマヨネーズをポケットにしま
う。

「で、プリンはどうすんですかイ？」

「卵と牛乳と砂糖煮詰めりゃ出来んじゃねえのか？原材料見りゃ書
いてあつただろ。それ参照だ」

そう言つて土方は、また冷蔵庫を開け、適当にプリンの材料と思
われるものを出し始める。

卵、牛乳、砂糖…そしてマヨネーズ。

もう誰も突っ込むことなく、静かにそのマヨネーズだけゴミ箱に
捨てた。

「なんでそれだけ捨てんだよ！」

「うるせー。プリンにマヨネーズかけて食うのは、宇宙広しとも、
テメーだけだ」

「旦那、とりあえず味覚バカは放っておいて、これ全部一緒に煮ま
しょうや」

沖田が鍋にそれらをぶち込み、火にかける。

しかし、いがいと難しいのがお菓子作り。

むさ苦しい大の大人3人がかりでも、プリンはうまく作れない。

爆発と、失敗を繰り返している間に卵がなくなる。

「チツ…材料がねえ！買出しだ！」

「銀さーん。ただ今帰りましたよー」

聞き覚えのある声が玄関から聞こえた。

まさに天の声。買出しに行った新八が帰ってきたのだ。

卵と牛乳を砂糖にまみれ3人は、急いで玄関に向かう。

「なんだトシ！総悟！お前らやっぱりここにいたのか！」

玄関に立っていたのは新八と、どこかで見たことあるゴリラ…ではなく近藤だった。

「近藤さんと帰る途中で会ったんですよ。したら、なんかお見舞いにかけてくれて」

「チャイナさんが風邪を引いたとあらば、ぜひこれをとってな！風邪にはこれが一番だ！なぜか風邪を引くと無性に食べたくなるんだよなー」

そう言っつて、近藤が手にしていたのは、牛乳と混ぜて固めるアレだった。

「…プリン ル…だと…！」

「そうだ！簡単にプリンが作れるんだぞ！

ん？なんでお前らそんなに甘い臭いを発してるんだ？」

「「「いや…別に…」」」

そういや、そんなのもあったな。と、三人はそう思った。
おもむろに近藤が、ズカズカと台所に行き、手際よくプリンを作
っていく。

ついでに新八は、今まで三人が汚した台所の片づけをしている。
疎外された三人は、冷めたおかゆをレンジが温めなおしている様
子を見ているしかなかった。
そして…

「うお！このおかゆうまいアル！誰アル？ニコ中か？見直したアル
！」

眠って少し元気が出たのか、神楽がモグモグとおかゆを食べる。
作ったおかゆを褒められた土方は、少し嬉しそうに笑う。

「こんなん、いくらでも作ってやるから、とっとと元気になれよ？」

「ありがと銀ちゃん！」

横から銀時が、おかわりのおかゆを持ってくる。

それを受け取り、神楽は再びモグモグとおかゆを食べ続ける。

その食べっぷりを見て、安心する銀時と土方。

これだけ食べれば、大丈夫か？食欲もあるし、さっきよりも意
識ははっきりしているし。

「おーい、デザートでイ」

部屋の障子が開き、沖田が大きいボールを持ってきた。

そのボールに入っていたのは、近藤が愛情(?)こめて作ったプ

リンだった。

「…プリンアルか…？」

神楽が、恐る恐るスプーンをプリンにつけ、掬い、口に運ぶ。
動きが止まる。

やはりゴリラのお手製はダメだったか？まさか、何か変なもん入れたんじゃないだろうか？

三人の目が座った瞬間だった。

「なんでこれ…マミーが作ったのと同じ味アルか…すごく懐かしいアル…」

ポロつと、スプーンを持つ手に涙がこぼれる。

あれ、なんで泣いちちゃってるの？ヤバイ。これはヤバイ！

慌てる三人を見て、神楽は思わず泣いてたことに気づき、涙を拭い、笑顔を見せる。

「よく再現できたアルな！私嬉しいヨ！ほんと…嬉しいヨ…」

精一杯の笑顔だが、やはり涙がポロポロとこぼれている。
やれやれと、銀時が神楽の涙を拭う。

「こんななんいつでも作ってやるよ…泣くな。な？」

「銀ちゃん…」

優しく微笑み、神楽の頭をクシャクシャつとなでる銀時。

まるで二人だけの空間だった。

あたかも自分が全て作ったかのような銀時のセリフに、土方と沖

田が静かに怒りをあらわにする。

「テメー何もしてえねだろうが…」

「いいとこだけかつさらうなんざ、大人のやることじゃねえですぜ
イ…」

「総悟、テメーもなんもしてねえだろ…
さりげに自分が作りました的にプリン持ってきやがって…」

土方が刀を引き抜こうとしたときだった。

「お前達！病人がいる部屋で暴れてはいかんぞ！
チャイナさん、これをおでこに貼って！後体温計はどこだ？それと
これで汗を拭くといい！」

一触即発状態の部屋に乱入してきた近藤の手により、神楽の前で
の血みどろの争いは避けられた。

そして、近藤の手際のいい看病っぷりに、啞然としてその姿を見
ていた。

「すげえな…」

「まがりなりに、真選組のトップだ。

男所帯をまとめあげてんだから、子供一人どつてことないんだろう」

完全に居場所のない二人。沖田は沖田で、体ふくの手伝わせると
ちよつかいだして、神楽に噛み付かれている。

まったく、つい数時間前までは、静か過ぎたはずなのに、なんだ
この騒ぎようは。

銀時はため息をつきながらも、笑う神楽を見て少し安心した。

「あの調子なら、すぐよくなるだろうよ」

土方が、タバコを吹かしながら銀時に言う。

「そうなくてももらわなきゃ困るんだよ。うちの元気印。万事屋自慢の看板娘なんだからな」

銀時が穏やかな表情で、神楽を見る。

今日も万事屋は賑やかなのだった。

一方：

「なんでこの台所…姉上が作った玉子焼きに似たものがごびりついでんだよ…」

銀さんたちなに作ったんだよ…」

新八がブツブツ言いながら、いまだに台所の掃除をしていることに、誰も気付かれなかった。

end

季節外れにご用心 - 銀神 - (後書き)

ほんとはこんなアホな話にスルつもりなかったのに…
だんだんと登場人物増えて、こんなになりました。

寒いですね…

ちなみに、作中で土方が作っていたおかゆは、マジでこの作り方で
おかゆができます。

タマゴはいれたことないけどね。

そして、風邪を引くと無性にプリンが食べたくくなります。

やはり私のマミーもプリンエルで作ってくれました。

あれは、市販のプリンよかうまいです。大好きですね。

ハイどうでもいいですね。

あ、おまけがあります。

このまま終わるんじゃ、ちょっと悔しかったので、ムリクリ作りま
したw

季節外れにご用心…おまけ - 銀神 - (前書き)

おまけの銀神ラブラブですw

季節外れにご用心…おまけ - 銀神 -

「銀ちゃん…」

「なんだあ？」

「……」

よつやくつるさいのが帰り、銀時は神楽が寝ているため寝れない部屋から、応接室のソファで寝ようと布団を運ぼうとした時だった。

不意に名前を呼ばれ振り向けば、神楽が頬を染めて銀時を見ている。

まだ熱下がつてねえのか？と思い、神楽の額に触れる。少しだけ、熱を持っていた。

「銀ちゃんの手…冷たいネ…」

「心の暖かい人間は、手は冷てえんだぜ？」

「知ってるヨ……ねえ銀ちゃん……一緒に寝て欲しいヨ………」

「……しょうがねえなあ」

そう言って、寝ている神楽の布団に潜り込む。

なるべく端にと思っていたが、神楽が銀時の甚平をしっかりと掴んで、離してくれなかった。

「どーした？寂しいのか？」

仰向けになり、しがみつく神楽の頭を撫で、銀時はそう呟く。
とくに何も言わないが、しがみつくその手に少し力が込められた
ということは、そうなのだろう。

「風邪引いて、熱出た時や、誰だつてそうだ。まあ、今は俺がついて
ててやつから、安心して寝てろ」

なんとなく頷くような仕草を見せたらすぐに、神楽小さな寝息が
聞こえてきた。

とんだお子様だ。

銀時は軽いため息をつき、自分も静かに目を瞑った。

「まったく。あのハゲから一体どういう教育受けたんでしょうね！
こんな風に寂しさに感じて、男と一緒に寝るなんて！

銀さんだからいいものの、他の連中は狼よ？男なんて狼なんだから！
預かってる手前、もう少し大事なことを教えないとな…

まず、あのスリットの入ったチャイナドレス！

あれは俺らの前以外で着させないようにしないと！

でないと、土方や沖田のあのヤラシー目線で、神楽のキレイな足が
汚れる！

後…」

うつらうつらと考えながら眠る銀時。

やがて深い眠りにつく。

眠っていても、その手だけは決して、神楽の手を握って離さず
いた。

夜中、ふいに目が覚めた神楽。

目の前には、布団を剥ぎ、みつともない格好で眠る銀時の姿。

だが、手だけはしっかりと握られている。

神楽はため息をつき、布団をかけなおす。
そして銀時に抱きついて幸せそうに呟き、眠るのだった。

「銀ちゃん、大好きヨ」

そんなこんなで、次の日にはすっかり熱も引いた神楽。
モリモリと卵かけご飯を食べている様子を、銀時はややゲンナリした表情で見ている。

「ねえ、神楽ちゃん…銀さん…なんか熱っぽいんだけど…」

「あんだけ引っ付いて寝てたアル。
うつつても仕方ないアルね。」

大丈夫アル。今度は私が看病してあげるヨ！
ハイ！銀ちゃんの分の卵かけご飯！」

そう言つて、神楽は昨日土方が差し入れてくれたドリンク剤を混ぜた卵かけご飯を差し出した。

「せめておかゆにしてくんないかな…」

そうは言つても、病み上がりの少女に頼めるわけもなく、銀時は重い身体を引きずるようにレンジに水とご飯を入れたどんぶりを暖めた。

いいんだ、これで…と自分に言い聞かせて…
季節外れの雪と風邪にはご注意ください…

追記。

銀時も二日寝込んだら治りましたとさ。

季節外れにご用心…おまけ - 銀神 - (後書き)

ラブ…ラブ？

でも神楽ちゃんはけっこうお母さんだと思っんで…っん…

だっってお妙さんだっって言っってたし…

紅桜編の後の銀さんを看病する神楽ちゃんがかわいすぎて、こんな
の作ったのは、また別のお話wうえw

あの約束の海 - 沖神 - (前書き)

沖神です。

あの約束の海・沖神

季節は梅雨を向かえ、雨が降り続く日も多かった。

日差しが苦手な神楽は、この時期が好きだった。

もつとも、故郷もこのように雨ばかり降っているから、余計そう思えたのかもしれないが。

「でも、このゲリラ豪雨はないネ…」

銀時に新しい雨傘を買ってもらい、ウキウキしながら傘をさして歩いていると、突然バケツをひっくり返したような雨に見舞われた。さすがに歩けないと判断した神楽は、雨宿りのためある裏路地に非難した。

ふと見れば、神楽以外は人っ子一人いなかった。

「どうやら、飲み屋街に入り込んでいたようだ。」

夜は欲望うずめく歓楽街も、大雨の昼時は人もあまり通らない。

しかも、その裏路地ならばなおのこと。

人影なく、聞こえるのは雨の音。

神楽は、思わず肩を寄せてしまう。

寒いのもあったが、急にこの場所がひどく恐ろしく見えたのだ。

所々薄暗く、影が重なった場所は、黒く塗りつぶされているように、何も見えない。

そこから、まったく知らないところに引きずり込まれそうな、そんな感覚に陥る。

トタンの屋根にあたる雨音が、耳に響く。

その隙間から見える雨は、さつきよりも強くなっている。

これはひどい…とにかく雨宿りをしつつ、少しでも明るい方に行こう。

そう神楽は考え、裏路地を歩き出す。

裏路地は細く入り組み、ちょっとした道の奥から、変な声がしたり、ネズミがいたりで、神楽は気が気でなかった。

鼻を突くようなドブと、生ゴミのすえた臭い。ゴキブリがでたら、間違いなく泣きそうだ。

早くこんな場所から離れようと、少し足早に歩き始めた。その時だった。

「あーお嬢ちゃんかわいいねえ…どう？うちの店で働かない？」

下卑た笑いを浮かべた、汚らしいオヤジが細い路地から姿を現し、神楽の細い腕を掴む。

「な…何する力！離せヨ！汚えオッサンが！ドブに落ちて死ぬ！！」

「んだと?!」

腕を掴んだまま、オヤジが神楽に殴りかかる。

しまった！この腕を振り解くが早いか、それとも…

などと考える間もなく、振り上げた手は神楽に当たることはなかった。

「ハイイ、婦女暴行、及び未成年者略取と風営法取締法違反の容疑で逮捕しまあーす。

神山あ、ワツパ持って来い！」

「了解です、隊長！」

「ゲエ！真選組かつ！！」

男の後ろに立ち、腕を掴んでいたのは、間違いない。

この暗い場所に眩しい亜麻色の髪、その特徴的な言葉遣い。

「サド…」

「ようちヤイナ。こんな危ねえところで何してんでイ？」

飄々とした態度で、神楽に話しかける沖田。

そして、神山と呼ばれた瓶底メガネが、神楽に暴行を加えようとしたオヤジに手錠をかけて連行していく。

なんだ？張り込みかなんかをしていたのか？もう終わりなら、帰ってしまうのか？

また暗いこの道に、一人になるのか？

そう思うと、不安でな目で沖田を見てしまう神楽。

そんな視線に気付いたか、歩き出している神山に話をする。

神山が頷くと、そのままオヤジを連れて細い路地に消えていった。当の沖田は、小走りで神楽の元にやってくる。

「ほれ、帰るぞ。一人は危ねエでさア」

そつぶつきらぼうに言って、歩き出す。

置いてかれまいと、神楽は沖田の隣に並び、歩く。

「…さっきの…あれなにアルか？」

ちょっと沈黙に耐えられない神楽は、先ほどの件を沖田に振った。

沖田は一瞬目を泳がせたが、仕方ないと言わんばかりに話し出した。

「あいつア、非合法風俗店の店長やってる奴で、家出とかの未成年の女だまくらかして、シャブ漬けにして客と本番やらせて、用済み

嫌いなチャンゴキまで現れたのだ。
ぶっっちゃけ気が気でない。

「クルアア！サドオオオオ！テメエ私をどこまで怖がらせれば気が済むネエエエエエ！言ってみろやアアアアアア！」

ガクガクと沖田にしがみ付きながら、首を掴み揺らす神楽。
首絞め神楽が現れた。

「いや…ごめん…てかすみません…首…入ってますから…許して…」

「フン！」

まったく持つて色気のない叫びと、抱きつかれ方。
神楽の首絞めから解放された沖田は、修羅のごとき顔をした神楽を見て思う。

『ゴキブリが嫌いだったり、意外とかわいいところあるんじゃないかな？』

そう思うと、思わずニやついてしまう。

その顔が、また神楽の神経を逆なでする。

ヤバイと直感的に思い、沖田はすぐに手を差し出した。

「…？」

繋げってか？この微妙な空気で、手を繋げってか？

神楽は、怒りと憎しみで、その手を思いつきりへし折ってやるのかと思っただが、またカサカサというチャンゴキの足音を聞いて、思

わずその手を握ってしまった。

小さな悲鳴と、震える手。

やっぱり女の子ですねィと、満足そうに沖田はその手をギュッと握る。

神楽も、握られた安心感からか、少し照れながらも沖田と共に歩き出した。

暗い裏路地、たまにいる人間は神楽を見てその肌や髪を見て珍しそうに近寄ってくるが、沖田がいるおかげで、そのまま恨めしそうな顔をして去っていく。

さすがは真選組。チンピラ崩れも、本物のチンピラ警察には、自ら近寄ろうとしない。

下手すれば、そのまま逮捕…どころか、更に暴行を加えられる可能性もあるからだろう。最悪、死が待っているのだ。

まだ幼さが残る顔の癖に、堂々とした顔、担がれたバズーカ。余計に近寄りがたいのもあるだろう。

「そっぴや、なんでチャイナはこんなとこにいたんですかィ」

手を繋ぎながら歩いてるくせに、何一つ会話がない。

沈黙は苦手だが、こんなにもくっついていてるなんて初めてだから余計だった。

そんな沈黙を破ったのが、沖田だった。

神楽は、とりあえずいきさつを話す。

新しい雨傘を、銀時に買ってもらったこと。

嬉しくて、つい外に出て散歩していたこと。

急の大雨で、雨宿りをしようとうろついていたこと。

気がついたら、ここに迷い込んだこと。

そして…

「サドに、見たくもないチャンゴキ見せられたネ…最悪アル…」

いつもの傘じゃないから、撃ち殺せなかったヨ……」

「いつもは見つけ次第銃殺かイ……まあ季節柄仕方ねエってことでさア。

ウザイ雨に、ベタベタ貼りつく湿度、更に増える害虫とくらアな……こんな季節、とつとと過ぎちまえばいいんでさア。

そんで、カっとお天道様を仰ぎてエもんでイ……」

そう言つて、沖田は口を押さえた。

ちらりと横目で神楽を見る。

やはりちよつと俯き、唇を尖らせている。

しまった……彼女は……

「そんなこと言つなヨ……気持ちはわからないでもナイけど、私はこの季節が好きネ……」

夏は日差しが怖いネ……でも……」

「……」

「一度でいい……あの太陽の元、光一杯浴びて、水着を着たりして海で泳ぎたいアル。」

死ぬまでに一回……できるといいアルなあ……」

遠くを見る神楽の瞳。

きっと、まだ見ぬ真夏の太陽の下で肌を晒し、波打ち際で遊び、泳いでいるであろう自分の姿を。

暗き世界に生きる、悲しき夜兎の宿命に、叶わぬ思いを馳せる。

沖田は少し考えたような仕草を見せ、グイッと神楽の手を引いて走り出す。

突然走りだす沖田に、驚きながらも神楽は必死でついていく。

そして細い路地を抜け、大通りに出た。
やっとあの変な路地から抜けられた…

しかも雨は止んで、重くかさなる雲間から、薄日が差ししていた。
神楽は走ったことによつて上がった息を整えながら、沖田を見た。

「さつきはあんなこと言つて悪かった…

俺アどうもそういうのに気が回れねエ男でさア…
だからチャイナ。一つ約束してやらア。

今年の夏、海に行くぜイ。昼間じゃなくて、夜、月がきれいな日
イ。

夜桜然り、昼に見るよりもきれいなもんつて色々あんでさア。

俺が、お前に教えてやんでイ」

そう言つて、沖田は神楽の細い指を絡める。

指きり。

こんな子供だましの約束なんて、なんの価値もない。

それに、太陽のもとで遊びたいって言ったのに、夜の海じゃ意味
がない。

けれど、神楽は嬉しかった。

沖田がそうやって、言つてくれるということに。

「ありがとヨ…サド…期待しないで待つてるネ…」

不意に出してしまう憎まれ口も、照れ隠しにはもつてこい。

沖田も照れたような表情で、神楽の頭をクシヤリと撫でる。

「約束は、違わねエ男だぜイ。

酢昆布食べながら、楽しみに待つてな」

優しく微笑み、沖田は神楽に背をむけ、歩き出す。

薄日に照らされて、亜麻色の髪が光っているように見えた。

神楽はその背中を見つめて、どうしようもなく嬉しそうな顔をして、帰路に着く。

そして…

宵闇の月、太陽とはまた違う輝きに、静かに酔いしれる。

聞こえるのは、静かな波の音。見えるのは、月に照らされる二人の姿。

誰も居ない海。

見失わないようにその手を握り、そのたゆたう水の動きに、そっと身を委ねる。

瞳を閉じて、母なる海の雄大さに安らぎ、叶わぬ夢と思っていた時間を、記憶に刻む。

日の光の下で生きられなくても、月の明かりが照らしてくれる。

雨の日の空だけじゃない、星の美しい空もまた、仰ぐことが出来る。

太陽に嫌われていても、月に好かれていればいい。

改めてそう思う。

ふいに、沖田が神楽の指を絡める。

もう一度約束する。

神楽は優しく微笑み、指切りをした。

また、いつか来よう。

それは、ある夏の夜の思い出。

- e n d -

あの約束の海・沖神・（後書き）

沖神楽しー！

勝手に楽しんでいます。

こいつら素直じゃないのがイインダヨ。

楽しくて、つい余計な描写が増えてしまいますねw

なんて、超雨が降ってる時に思いついた話です。

とりあえず、夜の月明かりに照らされて、海にいる神楽ちゃん描きたいw

シンチアツシツンチア・土神・(前書き)

土神です。

ツンデレツレンデ・土神

「ありゃあ…」

土方が呟いた先に、見覚えのある少女が鉄棒の上を歩いていった。明るい桃色の髪、透けるような白い肌、その肌を包み込む赤いチャイナドレスに、紫の日傘。それを守るようにいる白いデカイ犬…間違いない。万事屋のこのチャイナ娘だ…

「ハ…」と、つい長いため息をついてしまう。

なぜならば、たいがい会うたびに、税金泥棒だのニコ中だのマヨラーなどとやかましいからだ。

一人で遊ぶその姿からは、想像もつかないほどの毒舌で、わがままで、むしろ悪魔に程近い。

あれが小悪魔系とまではやされるならば、どう考えても魔王のほうに優しいのではと思える。

姿は年齢相応なのだが、中身が…

「いつつも『銀ちゃんが言ったネ（裏声）』なんて言いながら、平気で暴言吐きやがる…」

「一体あの銀髪、何教えてんだか…」

あんな年端も行かないような少女に、なにを言い、教えているのか。

そういえば、沖田ともそんな感じに罵り合ってる。

どこで覚えたか、なんとも心を抉る言葉を、平気で投げかける。

おまけに、あのくらの女の子なら普通言わないような下品なことも言っている。

土方は、また深いため息をつく。

「仮に、そう仮にだぞ。

俺があの銀髪ヤローや沖田と同じ立場になったら…

もっとキレイな言葉を教えて…

おしとやかにしてえな。

出来れば習い事とかやらせて。

お茶か花…それに…もつとかわいい着物とか…

いやいや、チャイナドレスも捨てがたいが…

つて、俺！何？！何これ！！どんな妄想？！

オイこれ、実はタバコじゃなくて、大 じゃねえよな…セツタだよ
なあ？ん？

て言うか俺ポリゴンじゃねえし！普通の、健全な、大和男子だし！」

キレイな着物を着て、花を活ける姿や、おしとやかな言葉遣いで
話かけられる姿を思わず妄想してしまい、我に帰る。

でも、十四朗さん（はあと）とは呼ばれてみたい…と、心の奥底
で思ったのは秘密である。

そんな一人芝居をしていた矢先、神楽がバランスを崩し鉄棒から
落ちそうになる。

それを見た土方は、思わず走りだす。

なにも考えていなかった。

ただ、身体が動いたただけだった。

しかし。

「10点！」

見事に鉄棒を掴み、そのまま大車輪をしてからポーズを決めた神
楽。

そしてそのまま、ふわりと身体を持ち上げ、またしても鉄棒に立
ち上がる。

定春もワンワンと元気に鳴いて、一連の鮮やかな神楽の動きを褒

める。

土方はそのままズサーっと、鉄棒の下を顔面から滑る。まるでコントのような光景に、神楽はポカーンと口を開けて、そんな土方を見ていた。

「…何してるんだヨ、マヨラー…」

鉄棒の下にマヨネーズ王国の入り口でもあったのか？

「ガペペ…」

くおら、テメエ！紛らわしいことしてんじゃねえ！」

「え、この流れでなんで私が怒られてるネ！

意味わかんないアル！ふざけんなヨ、このクソマヨラー！！」

突然怒られたことに神楽は激怒し、土方に怒りの鉄拳を食らわそうと身体をひねった時、思わず鉄棒から足を滑らした。

あ、落ちる。

そう、神楽が眼を閉じた瞬間だった。

衝撃はなく、なにかにすっぽりと収まる感覚を覚えた。

恐る恐る眼を開ければ、土方がしっかりと神楽を抱えていた。

「ったく、あぶねーぞ」

「お…おっ…」

ゆっくりと下ろされ、神楽の足は地についた。

定春が心配そうに駆け寄り、鼻を神楽にこすりつける。

「大丈夫アルヨ、定春。マヨラーが助けてくれたヨ」

「助けてもらってマヨラー呼ばわりかよ！」

「じゃ、二〇中」

「変わんねーよ！」

一言ありがとつも言えねえのか。ほんと、一体どついう教育受けてんだ。

と、思いながら、土方は落ち着くためにタバコに火をつける。

フーッと紫煙を吐き出し、首を鳴らす。

タバコはいいな。やっぱり落ち着く。

そして、くしゃりと、神楽の頭をなでる。

「じゃあな。おてんばもホドホドにしとけよ」

そう言つて、踵を返す。

ふいに、制服の裾を掴まれた。

見れば自分よりも頭一つ分ちよつと小さいピンクの頭が、俯いて土方の制服の裾を掴んでいる。

「……？どうした？どつか怪我でもしたのか？」

「助けてくれて……ありがとナ……」

……土方……」

赤くなりながら神楽は土方にお礼を言い、そのまま定春と共に走つて行つてしまう。

突然お礼と名前を言われ、土方は走り去る神楽をボケーっと見てるしかなかった。

え、何？この展開…あれ？もしかしてあれツンデレ？とか言うの？中の人的に考えて、もの凄いいいしい思いした？

混乱する土方は、思わずさっき妄想していた着物姿でおしとやかに、十四朗さん（はあと）と呼ぶ神楽を思い出す。

妄想の産物とはいえ、あの照れ顔がダブリ、心なしか顔がにやけてしまう。

「土方さん。ついにアンタもポリゴンですかイ？」

沖田がニヤニヤと、それでいて殺気を纏いながら、草陰から現れた。

「だあ！ビックリした！何でお前いきなり出てくるの？！

別に！俺あそういうんじゃねえよ！ただ…

ていうか、何殺る気満々の笑み浮かべてバズーカ構えてんだコラ！」

「別にーアンタを抹殺するのが、俺の天命なんでさア…

というわけで、チャイナに手出す前に、死ね土方あ！！」

「明らかに嫉妬じゃねえか！男の嫉妬は見苦しいぜ、総悟ー！」

こうして、あるつららかな公園で、男共の醜い争いが始まったと
な。

おはり

ツンデレツレンデ・土神・（後書き）

土神：難しい！！

でも動乱編でトツシーが神楽ちゃんの写真撮ってたところに悶えてます。

柳生編とか、けっこうこの二人悶えるシーン多いよね！

お陰で土神熱が上がったくせに、うまく話がまとまらない…

うーん。ツンデレって難しいなあ…

後、これの神楽ちゃんバージョンの話もあります。

それもそのうちアップ予定です。

シンデレラシンデレラ…んぞ？・土神・（前書き）

土神。シンデレラシンデレラの続きというか、神楽視点というか…

ツンデレツレツンデレツレ…んで？・土神・

びっくりした！びっくりした！！びっくりした！！！！

早まる鼓動を抑えるように、神楽は足早に歩く。

鉄棒から落ちたとき、助けてくれた土方の姿が、その腕の感触が忘れられなかったからだ。

なんとも思っていない相手だっただけに、不意打ちにもほどがある。

『アイツ…あんなに優しかった力…？』

いつも瞳孔が開いていて、怖い目つきで、ニコ中で、マヨラーで大串君で…

自分の知っている姿とは違う、あの土方に神楽は不覚にもドキドキしてしまった。

あんなにも真剣で、優しい眼差しで見られては、さしもの神楽もときめいてしまう。

どうにも、ああいう面倒見がよくて、デカイ器を持つ男に惚れてしまうのは、女の性なのか。

神楽は頬を叩く。

「今更惚れたとか、それはないネ！！」

そう言って、神楽は走り出した。

ちらつくのは、土方の姿ばかりだった。

それを忘れるように走っているのに、纏わりついて離れない。好きになった？

惚れてしまった？

気付いてしまった？

違うと思いたい？
否定したい？
でもほんとうは？

「……」

抱えられた時に触れられた身体。
その力強い感覚が、身体に残っている。
走ったことよりも、土方を思うと余計に顔が赤くなる。
しばらくの間、土方のことばかり考えてしまいそう……
立ち止まり、神楽は、ポフッと定春に寄りかかった。

「困ったヨ……」

眩く神楽の視線の先に、赤く染まる夕日が沈む。
高鳴る鼓動と、熱くなる体。
初めて気付いたこの感情。

これからきつと、土方を見るたびに照れたりしまいそう。
そうしたら、気付かれてしまうかもしれない。
恥ずかしい。

今まで何も意識していなかっただけに、意識したら余計にギクシヤクしてしまうかもしれない。

そんなことを考えながら、神楽は万事屋に帰って行った。

次の日。

「よお、チャイナ娘。
今日も鉄棒の練習か？
また落ちんじゃねーぞ？」

ことも何気に、土方がタバコを吸いながら、話をしかけてきた。

神楽は一瞬だけビクつと身体を震わせ、土方の姿を恐る恐る見る。顔は赤くないだろうか。

声は震えずに話せるだろうか。

いろいろ考えた挙句、一番最初に出た言葉が…

「汚職警官に心配されるほど、落ちぶれてネーヨ。

昨日はたまたまアル。サルも木からたまには落ちるネ」

・・・

心配して声かけたのに、まさかの毒舌返しに、ピキッと、土方の血管が浮き出た。

本心を悟られまいとして言った言葉が、思った以上に毒づいてしまったことに、神楽は焦る。

違う。本当はそうじゃなくて！

「ああそうかい」

冷たい感じの土方の声に、神楽はますます焦る。

なんでこんな言葉しか出ないんだよーと、叫びたくなる。

「ニコ中は、自分の身体心配しろヨ。

まあ、お前が死んだところで、私には関係ないアルけど、せいぜい長生きできるといいアルな」

うん、憎まれ口だ。

神楽は、諦めたように鉄棒で大車輪をやり始める。

少し脳みそシェイクして、もっといい言葉を選べるようにしたい。手遅れかもしれないけれど、少しは…

なんて思いながら、ふと土方を見た。

怒ってるだろうな…と思えば、ポーっと神楽をみていた。

そんなだらしのない土方の顔に、神楽は一瞬ゲっという顔をしてしまっ。

「な…何アルカ！お前！だらしのない顔アル！」

ぴょいっと鉄棒から降りて、土方の顔を指差す。

覗きこむような上目遣い。腰に手を当てているその姿。

ステレオタイプだ。まさにツンデレのステレオタイプの姿だ。

土方は、え、マジ？なんて感じで顔に触るが、もう何とも言えないだらしのない顔になっている。

「トイレで面あ見て、洗ってくるヨ。そうすれば、少しは見れる顔になるネ。」

別に、お前のこと想って言ってんじゃないんだからナ。

ダメ警察に思われぬ様に言ってあげてるだけだからナ！」

土方に衝撃が走る。

初めての感覚に、戸惑い、惑う。

なんだかよくわからないけど、少し頬を染めて腕を組み仁王立ちしている神楽が、本気で愛しく感じた。

しかし、このままではいけない。

「…そうする……」

土方は、顔に手を当てながらトイレに向かう。

その後姿を見ながら、神楽は不安に思う。

あまりの暴言に、気分でも悪くしたのか？と。

しかし、本当は違ったのであった。

「ビックリしたー！何！あれがツンデレ？！よくわからんけど、な

んだこの気持ち！」

トイレの壁に、頭を打ちつけて、心を落ち着かせる。

ダラダラと血が流れ、痛みでなんとか平静さを保とうとしているのだが、なかなかうまくいかない。

チラつく神楽の姿が忘れられない。

初めて、でもないかもしれないが、神楽がかわいいと誤ってしまった。

走り出したら、多分止まらないだろう、この恋。

土方十四郎。20代にしてツンデレの恐ろしさを知る。

おはり

ツンデレツレツンデレツレ…んで？・土神・（後書き）

土神第二章…

ていうか、ほんとツンデレって難しい！！

まあきつと、神楽ちゃんは土方にはこんなステレオタイプなツンデレで接して欲しいなあ…

もちろん無自覚の子悪魔でもおk！

土神っていいなあ！（笑）

その男エロテロリストにつき・高神・（前書き）

高神。ちよつと短いかもしれない…

その男エロテロリストにつき・高神・

始めてみた時、その男の姿に軽く衝撃を受けた。

「何してんだあ？神楽」

高杉に突然名前を呼ばれ、神楽は驚く。

それもそのはず。気付いていないだろうと、物陰から姿を窺っていたら、眼が合い声をかけられたのだから。

誤魔化そうと、あわあわしているうちに、高杉が目の前に立ちはだかる。

いつものイっちゃった眼とは少し違う、ほんの少しだけ穏やかな眼で、高杉は神楽を見る。

しかし、当の神楽は高杉の胸元を見ていた。

その視線に気付いたか、高杉はため息混じりに神楽に問いかける。

「デメエ…どこ見てんだ…」

「いやあ、オメー男の癖になんでそんなに色気あんの力と思って…」

「はあ？」

予想だにしてなかった神楽の一言に、高杉は思わず眉をひそめてしまう。

「銀ちゃんが言ったヨ。」

オメーみたいなのを、エロテロリストって呼ぶんだって。

ツラは髪長いだけだし、銀ちゃん天パなだけだし。色気なんて皆無アル。

髪型に特徴あるわけでもないのに、なんで高杉はそんな色気アルカ？私よりもあつて、なんか悔しいアル」

唇を尖らせて、神楽は高杉から目線をそらす。

微妙に失礼な事を言われた気のある高杉は、またため息をついて、神楽の顔を引き寄せ頬に触れるだけのキスをする。

「バカ言つてんじゃねえぞ…」

テメエが色気出したら、他の男が釣れちまうだろうが」

そう、耳元で囁く。

最後に、フツッと息を吹きかけるおまけまでつけて。

突然のことに、思わず神楽は顔を赤くして、その場にへたり込んでしまう。

そんな神楽を見て、満足そうに高杉は笑いながら、煙管に火をつけ、歩いていってしまう。

その後姿も、どこか艶かしい。

仕草なのだろうか？

格好か？

というか、そうなるのは天然か？

神楽は、悔しそうな眼で高杉の後姿を見ていた。

「色気なんざなくても、健康的なおメーが好きなんだよ…」

女はちよいと手に余るじゃじゃ馬くれえが丁度いいんだよ、お姫様…」

ちらりと横目で神楽を見て、高杉は笑う。

そして次の日。

洗って干しておいた着物と、愛用の煙管が行方不明になり、探していた高杉。

ふと影が落ち、何かと思い見てみれば、神楽が仁王立ちで、高杉つばい感じに着物を着崩し、包帯を巻き、煙管を持ち、高杉のコスプレをしていた。

思いつきりチツパイが見えそうで見えないその姿に、高杉と高杉の慌てたような声に駆けつけた万斎が、それはダメだと怒って、着物を直したのは別の話。

その姿を武市が盗撮していて、また子に怒られ殴られ、カメラをブツ壊されてたのも別の話。

- e n d -

なんちゃって挿絵

> i 2 8 6 8 2 — 3 7 0 2 <

その男エロテロリストにつき・高神・（後書き）

高神です！一人盛り上がり祭りです！

高杉は色気ムンムンで大好きです。

あのいつちゃった目とか、ネジ全部外れるような感じが、私のドツボです。

ていうか、私鬼兵隊好きなんだよな…

今度鬼兵隊×神楽みたいなのも書きたいなあ。

ちなみに、今回短いし、なんか絵を描いちゃったので載せます。

反省はしてません。

食へてる時の君の姿は美しい - 銀神 - (前書き)

銀神…? 下品です。とてつもなくて下ネタ。BGオンリー形式W

食べてる時の君の姿は美しい - 銀神 -

「よく寝てんなあ…」

「ほんとですねー」

「おい、よく見てみる、コイツ地味に口動かしてんぞ」

「ほんとだ…かわいいですねー」

何か食べてる夢でも見てるんですかねー」

「よーし」

「って銀さん?!何してんですか!」

「何って…あれだよ。三日前にもらってきたパンの耳やってんだよ」

「なんつうもん食わしてんですか!

鳩に餌付けしてるんじゃないんだから!

ていうか神楽ちゃん、めっちゃ食べてるし!!

それ三日前のだよ?!

いつぞやの、腐った豆パン食べておなか壊した、銀さんみたいになつても知らないよ!」

「新八一寝てるんだから、あんまデケー声出すんじゃないねえよ…」

しかし、もぐもぐもぐもぐ、口動かしててかわいいなあ…」

俺思ったんだけどよ、コレよ、チ コをキノコと偽って口に突っ込んでも甘噛みしてくれると思つか?」

「うるせーよ、この変態が！
なんだよ、このグダグダ具合！
調子こいてB G オンリーとかやるから、訳わからなくなんだよ！
キュアチャイナってなんだよ！
ハトプリなんて声優目当てで見てたくせに、何はまってんだよ、この作者！！」

「んだよ、細かい描写あったほうがいいってーのか？
軽く18禁になんぞ。それでもいいのか？ん？

大体プリキュアなめんじゃねえぞ。銀さんブロッサム派だぞ」

「なんですか、それ。脅しですか？
屈しませんよ！僕はそんなテロリズムになんて屈しませんからね！
てか、アンタの好み聞いてねえよ。むしろブロッサムは作者が好き
なだけだろ」

「む。誰かに呼ばれた気がするんだが？
久しぶりだな銀時。

俺はムーンライトのお母さん派だ」

「呼んでねえよ、この人妻好きツラテロリストが！」

「ツラじゃない、かつ…」スイマセン。余計ややこしくなりますから、消えてください」

「おお、リーダー。今日もかわいらしい寝顔だな。
どれどれ、ナイ ス イツクと、スペ ャル ンドどちらが…」

「無視かよ…って、なんでアンタも下半身モゾモゾさせてんだよ！
銀さん！このテロリスト変態です！」

…あれ？銀さん…？なんで気まずそうな顔してるんですか？

……………

まさか！！！！！！！！

ナイ ス イツクと、ス ペ ャル ンドってテメーらのか？
テメーらの汚物なのかああああ！！！！！！」

「オメーらうつせーよ！人が寝てるの邪魔すんじゃないアル！！」

こうして、寝ぼけてる（？）神楽ちゃんに神楽インパクトでボコされた僕達は、全裸で朝まで正座で反省させられました。

男はみんな獣だ。

きつと、神楽ちゃんも心底、そう思ってしまっただろう…

そしてもう一つ。こんな慣れないBGオンリーなんて、やるもん
じゃないと。

更にもう一つ。どうせなら神楽お尻アタックのほうを喰らいたかったなと思いつながら、朝焼けの美しいかぶき町を見て、僕らは一筋の涙をこぼした。

- e n d -

食べてる時の君の姿は美しい - 銀神 - (後書き)

ご…ごめんなさい…

なんか思いついたままに書き上げたら、すごくくだらなく、そして
下品な話になりました…

下ネタがいいなんて言われたから、調子こきました。

本当にごめんなさい。

次こそ真面目にがんばります(予定)

最近ツラ神も気になるお年頃です…

猛暑日だからもうじょーがない日・沖神・（前書き）

沖神。夏のーコマ的な話です。

猛暑日だからもうしょーがない日・沖神・

「暑いアル…」

「熱いな…」

「漢字違うアル…」

「細けエこと気にすんなイ…」

大体こんなんじゃ、暑いよか熱いだよ。

なんだよ37度って。

俺の体温よか熱イってんだ。

酷暑日だよ。ていうか、アブダ日でイ」

「何アルカ…それ…」

そんな話をしながら、神楽と沖田は公園のベンチであまりの暑さに参りながら話していた。

夏は暑いもん。たしかにそうだが、今年は異常だった。

照りつける太陽は、ジリジリと皮膚を焼き、確実に水分を奪い、体温を上げてゆく。

ただでさえ陽射しに弱い夜兎族の神楽は、ここ最近外に出れなかったが、朝方少しだけ曇っていたのを見計らい、外に出た。

しかし、すぐに陽は容赦なく神楽に襲い掛かった。

日傘を差しているとはいえ、熱は防げるものではない。

すぐに汗が吹き出て、水分を持っていかれた。

へ口へ口と公園にたどり着くも、人っ子一人遊んでおらず、とりあえず木陰にあるベンチに腰掛けていたら沖田がやってきたのだった。

「こんなクソ暑いのにパトロールなんてやってられるかってんでイ」
そう言つて、どっかしと神楽の隣に座る。
泣く子も余計に泣き叫ぶ、真選組一番隊隊長の沖田も、この暑さには参つていた。

たまたま見つけた神楽に声をかけたが、暑さで朦朧としているため、なんだ、サドがきたヨ程度にししか思つていなかった。
不意に、神楽のおでこに冷たいものが当たつたのがつく。

「なんでイ。オメーバテバテじゃねエか。
これくれてやるから、とつとと元気だせイ」

そういつて渡されたのは、ア エリ スだった。
その自販機で、わざわざ買って来てくれたのだらうか？
ひんやり冷たいペットボトルが、朦朧としている意識を少しだけ現世に取り戻させる。

「冷たいアル…」

それを受け取り、頬に当てて神楽は至福の笑みを浮かべる。
そんな神楽を見て、沖田は手に持っていた同じア エリ スのペ
ットボトルを、神楽の首筋に当てる。

「ひゃっ！」

さすがに冷たいものが首筋に当たるとなれば、神楽もかわいらしい叫び声をあげて驚いてしまう。

ニヤニヤと沖田は笑いながら、払いのけようとする神楽の手を押さえ、更に首筋やらに当ててきた。

「ちよっ！サド！やめるアル！」

「なんでイ。暑いなら首の後ろ冷やした方がいいんだぜイ？」

「このSが！」

当てる当てないの攻防をするうちに、神楽は元気を取り戻したように見えたが、すぐに暑さにやられてしまう。

沖田もまた、暑さのせいで手を止めて、ペットボトルのキャップを開けて口をつける。

それをみて神楽も、危険はないかと判断し、ア エリ スを飲んで、一息ついた。

「で、戻らねエのかイ？」

「こんなに暑かったら、照り返してもダメージ食らうアル…」

お前も、こんな暑いのにそんな黒くてカッチリした服着てて大変アルナ…」

脇染み出来てるアルヨ…塩噴いてるアル…」

「暑い時は塩舐めるといいんでイ。」

侍たるもの、いつでも非常食をだな…」

つて、チャイナは今非常時か…舐めてエカイ？」

「死ねヨ。ドSバカ。」

夏は陽射しを反射する白い服がイイネ。

私の見る。涼しげダロ？」

自慢げに、おろしたての白いチャイナ服を、沖田に見せ付けるた

めに胸を張る神楽。

確かに白が眩しく、更に涼しげな青の刺繍が施してあって、なかなか夏にはいい感じの一品だった。

しかし、沖田の視線がある一箇所で止まっていることに気付いた。そんな沖田の様子に、神楽は眉をひそめる。

まさか今朝食べた卵かけご飯の醤油でも垂らしたのか？とか、なんか染みついてるのか？とか、いろいろ考えてしまう。

「そーかい。ならオレも言わせてもらおうがな…」

フーと溜め息をつきながら、そのある一箇所を指でつつきながらこう言った。

「その自慢のチャイナ服、汗で張り付いてビーチク透けて見えてんぞ。

ノーブラか？

チッパイ過ぎてサイズねエってんなら、お子様スポーツブラでも買って…」

ゴキヤアアア

神楽・怒りの鉄拳が、沖田の顔面にヒットした。

怒りと羞恥で、顔を真っ赤にして。

「ってーな！何しやがるこのクソアマ！！」

「お前いい加減にしろヨ！！ていうか、なんていうとこ触ってるネ！！！！」

乙女だぞ！！

私の乙女の純情になんてことするアルカ！！！！」

「しらねーよ！」

「てめーがそんなん着てるのが悪いんだろっが！
猥褻物陳列罪で逮捕っすぞ、オラァ！」

「わ…猥褻物?!」

「黒ずんだB級ホラービーチクなんざ、こっちから願ひ下げでィ！」

「B級ホラー?!」

「私のはピンクネ！かわいいピンクネ！」

「もう頭にきた！今ここでテメーの存在を亡き者としてくれるアル！」

「なんともしゃえない、不毛な言い争いの果てに、神楽がキレ、傘のガトリングを沖田の頭、0距離で撃ち込む。

しかし、寸でのところで避けられてしまっ。

「甘エゼ、チャイナ！」

「ハジキで物狙うときは、ドタマでなく凶体狙えってなァ！」

「簡単に避けられちまうってもんさァ！頭に血上り過ぎだぜィ！」

「ベンチから高くジャンプし、沖田はどこから出したか、いつものバズーカを構える。

「隙を突いて、バズーカを発射するものの、神楽はやすやすと避ける。」

「ブハハハ！テメーもアル！」

「連射性に優れてないもん撃つときは、的が小さい方が有利ネ！」

「みてエだな…となるとこれっきゃねーわな！」

沖田が神速で刀を抜き、神楽に向ける。もちろんそれを予測していた神楽は、傘を構え刀への盾をつくる。だが、僅かに神楽のスピードが遅くなる。怒りで頭に血が上り、忘れていた。

「ここが今、炎天下だと言っ事には…」

目の前が暗くなり、次第に意識が遠退いていくのがわかった。

沖田が、目を見開いていたのを最後に、神楽はその場に意識を失い倒れてしまう。

慌てて沖田は刀を納め、額に触れる。

少し熱っぽい体温が、沖田の手に伝わる。

急いで木陰に移動して、神楽を横たわらせた。

「めんどくせエ女…」

そう言いながら、また冷たい飲み物を買って、首の後ろにあてがった。

更に、もう一本買ったアクエリアスを口に含み、薄く開いた唇を合わせ口移しで飲ませる。

以前馴染みの鍛冶屋が、脱水症状をおこした場合、冷たいのを飲むと身体が拒否反応をおこすから、適度に温くしたものを飲むと言っていたのを思い出す。

「めんどくせエ…」

心の奥でそう思っているけど、やはり心配なものは心配だった。

スカーフを外し、水で濡らして神楽の身体に当てる。

大の男でもこの暑さに倒れそうなのに、神楽はただでさえ陽に弱い。

おまけに、最初具合悪そうにしていたのにも関わらずに、だ。

「どーして、俺アこうなんだかねィ…」

惚れた女に優しくしてやることも出来ない。

それどころか、憎まれ口を叩き合い、拳句にこうして具合悪いにも関わらず無理をさせてしまった。

ガリガリと頭をかき、木に寄りかかる。

「ほんと、ロクでもねェ」

自嘲気味に笑いながら、そつと神楽の額に触れる。

まだ少し熱を持っているが、先ほどに比べてれば、だいぶ引いている。

苦しそうだった息遣いも、落ち着きを見せているようだった。

心配かけさせやがって…なんて思いながら、もう一度スカーフに水を含ませて、身体にかけてやる。

「…う……」

小さい呻き声が聞こえた。

焦点ははつきりしていないが、神楽が目を覚ましたようだった。

沖田は安心したように、何か訴えようとしている神楽の頭を撫でた。

「日が落ちるまで、一緒にいてやらア。

だからまだ、寝てる…」

そう言うと、神楽は少し笑い、瞳を閉じた。

そして、気がつけば日も傾きかけた夕方。

沖田もつい転寝してしまい、目を開ければ、温いながらも風が吹き、ひぐらしが鳴いていた。

神楽もだいぶ落ち着いたらしく、小さな胸を上下させながら眠っ

ている。

焦点ははっきりしていないが、神楽が目を覚ましたようだった。

沖田は安心したように、何か訴えようとしている神楽の頭を撫でた。

「日が落ちるまで、一緒にいてやらア。

だからまだ、寝てる…」

そう言うと、神楽は少し笑い、瞳を閉じた。

そして、気がつけば日も傾きかけた夕方。

沖田もつい転寝してしまい、目を開ければ、温いながらも風が吹き、ひぐらしが鳴いていた。

神楽もだいぶ落ち着いたらしく、小さな胸を上下させながら眠っている。

やべー、仕事サボっちゃった。なんて、微塵にも思っことなく、沖田は大きく伸びをした。

「ずっとついててくれたの力？」

ふいに、眠っていた目を開け、神楽がそう呟いた。

沖田は何も言わず、頷く。

そうかと、神楽は言い、立ち上がった。

そして何も言わずに、沖田に上着を返す。

「上着とスカーフ…悪かったナ…わざわざ濡らしてくれて…」

「別に…透けて見えてんのにそのまま放置できるほど、Sじゃないんでねイ…」

まだ着ててもいいぜ？」

「よく言うアル…でも…
ありがとう…」

照れながら神楽は、その上着を羽織る。

それを見ながら沖田は、安心したように神楽の前でしゃがみ、背中を差し出す。

「まだ調子悪いだろイ？おんぶしてやらア」

一瞬神楽は戸惑ったが、おずおずと沖田の背中に身体を預ける。夕方の、少し温めの空気を吸いながら、神楽は再び目を閉じる。意外に大きい、沖田の雄雄しい背中に揺られ、伸びる宵闇の影を歩く。

のんびりとした、穏やかな夏の夕涼みの時間だった。

ほんとは、背中に神楽のビーチクが当たって、鼻息荒くなっていたのは、秘密である。

- e n d -

猛暑日だからもうしょーがない日・沖神・（後書き）

夏なので、やっぱり日差しに弱い神楽ちゃんは、熱中症とかヤバくね？なんて思いながら作りました。

熱中症で倒れる　口移し　ラブニヤンの王道パターンです。

なんだかんだ、きっと神楽ちゃんには優しいはずの沖田を妄想しましたw

まあ、ビーチクの下りは、汗かくとシャツ透けて、ブラ透けるけど、神楽ちゃんはチツパイなんで、ノーブラだと、言いたかっただけです。

ハイ、変態です。

いつか大人向けな神楽ちゃんのエロイ話作りたいですなあ（夢）

ちなみにアブダビは、アラブ首長国連邦を構成する首長国で、日中は45　を超える時がある、とてつもなく暑い場所らしいです。

ドライブとか行ってみたいけど、暑いのはイヤだなあ…

太陽の侵略・兄神・（前書き）

兄神。昔の話みたいな感じで…

太陽の侵略・兄神・

どこまでも暗い世界だった。

ジトジトと、雨ばかりが降る。日の光なんて仰いだことはない。

もとい、そんなことをしたら自分の命が危うくなるだけなのだから、やろうとも思わない。

太陽なんて、見たこともない生活。

そんな中に生きていて、気付いたことがあった。

こんな薄暗い中で輝く太陽が、すぐ近くにあったことに。

「兄ちゃん？」

ちよこちよここと、まるで小動物のように俺の傍にやってくる。

一族の中でも、特別白い肌に、桜色の髪。

かわいい、かわいい、お人形のような俺の太陽。

お前がいれば…本物の太陽なんていらぬよ…

お前だけがいればいい…

かわいい俺の妹、神楽

「どこ行つてた力？」

「ちよつと食糧を獲りにね」

にこやかに微笑みながら、神威は神楽の頭をクシャクシャと撫でる。

神楽は嬉しそうに、撫でられた頭に手を乗せる。

その手を掴み、神威は神楽の手を引いた。

異端な強さを持つ父親のせい、普通の居住区よりも少し離れた場所が、神威達の住処だった。

静かで薄暗い部屋。たまに聞こえるのは、苦しそうに呻く母親の声だけ。

神楽が心配そうに母親に声をかけるが、途切れ途切れの会話の中で、もう長くは無いだろうことを、神威は悟る。

不思議と、悲しいとかそういう感情はわかかなかった。

これで、神楽は自分だけを見てくれる。

ただそれだけしか、考えていなかった。

不安そうな神楽をなだめ、食事を食べ、寄り添い横になる。

小さな寝息をたてて眠るその姿は、天使のようだ。

そっと、白玉みたいな頬をプニプニする。

神楽が少し眉を寄せ、うにゅーと唸る。

その唇にそって指をなぞれば、魚のようにパクつと食いつく。

夜兔族はもともと食欲旺盛なのだが、神威と神楽は中でもダントツで食い意地が張っている。

寝ている間も、食べることに貪欲なのは、よく似ている。

神威はニヤニヤしながら、神楽の口の中に指を突っ込んではいじくりまわす。

指を口から引き出せば、薄暗い寝床で、テラテラと唾液が少ない光を浴びて、妖しく煌く。

その指を舐め、神楽に口付けする。

触れるだけの優しいもの。

そして、神楽をぐつと抱き寄せ、眠る。

これが毎日。

変わらない日々。

ある日父親、星海坊主が掃除屋の仕事を終えて、久々に帰ってきた。

長いこと留守にしていた父親が、帰ってきた。

神楽が嬉しそうに父親に走り寄る。

繋いでいた、その神威の手を離して。

温もりが離れた。

その瞬間だった。

神威の中で、何かが目覚め始める。

話には聞いていた、夜兔の悪習。

そして、目覚める戦闘本能。

血がざわめくのが聞こえた。

ゆっくりと、神威は星海坊主に近づき、その傘の銃口を向けた。

突然のことに、星海坊主が驚いたが、すぐに反撃する。

神楽を突き飛ばし、始めは守るように戦うが、神威の邪悪な笑みに、次第に星海坊主も止めることを忘れ、本能のままに戦い始めた。血で血を洗う激しい戦いに、神楽は震え、ただその様子を見ているしかなかった。

神威が戦う、その理由さえ知らずに。

だが、さしもの神威も、父親の強さにまだ敵うことが出来ないのか、徐々に追い詰められていく。

ダラリと血だらけの腕を下げ、一步も動かなくなる。

隙を窺い、互いに膠着する状況。

次に動いたときが分かれ目になるだろうことを、神威は本能的に感じ取っていた。

このままではどちらかが死んでしまう。

それだけはいけないと、神楽は震える身体を抑え、星海坊主にしがみついた。

一瞬の隙が出来た。

血だらけで笑いながら、神威は星海坊主の腕を千切り落とす。

その痛みで星海坊主は我に返り、神楽を守るように神威の前に立ちふさがる。

あまりのことに、神楽は呆然と星海坊主にしがみついているしかなかった。

初めて、神威が怖いと思ったのだった。

優しい笑顔で、いつも自分の傍で笑っていてくれた兄の、豹変したその表情に、ただ怯えていた。

ポタポタと、神楽の顔に星海坊主の腕から溢れる血が滴り落ちる。怯える神楽を見て、血だらけの神威は、フラフラとしながらも、いつもと変わらない笑顔で近づく。

ただ、いつもと違うのは、纏う空気。

神威の意図に気付いたのだが、星海坊主は神楽に近づく神威の間に割って入るしかできなかった。

己が息子ながら、未恐ろしい戦闘本能を目の当たりにして、たとえ今にも倒れそうな神威であっても、油断はできない。

しかし、神威はそんな星海坊主を退け、一言言い放った。

俺から神楽 - 太陽 - を奪うのは赦さない

恐怖に顔を引きつらせている神楽の白い肌に、俺の血を擦り付ける。

ああ、キレイだね。

知っているよ。太陽は、赤いんだ。

だから、俺の太陽も、赫く染めたい。

もちろん神楽と、俺の血で。

忘れないで、神楽。

今は、俺はそんなに強くないから、太陽は侵略できない。

太陽を邪魔する、厚い雲に覆われたままなんだ。

事実、今も邪魔された。

なんて厚くてうざったい雲なんだろう。

けれど、俺がもっともつと強くなったら、侵略しに行くからね。

邪魔する雲を払い、お前という名の、太陽を手に入れるから。

それまで待っててね…

太陽の侵略・兄神・（後書き）

兄神です。

吉原炎上編みて、こりやもうなんて、思ったが運の尽き。

ヤベー兄貴パネエー

まけに高杉とタッグまで組みましたよ、奥さん。

なんかもう、やばいです。

何がやばいのかわからんけど、萌えています。

高杉と兄貴…神楽ちゃん逃げて！超逃げ…ないで！やっぱり逃げないで！

それでそのまま…デュフツ！

スクデイ - 銀桂高神 - (前書き)

銀桂高神。全員壊れてます。

スクデイ - 銀桂高神 -

今日も今日とて、暑い夏の日。

うだるような暑さが続く毎日に、涼を求めんとするのも、また人間の性。

蝉が、ウザいくらいに鳴く変わらない万事屋の毎日に、神楽が石を投じたのが始まり。

「銀ちゃん、私水着欲しいネ」

「ハア？」

壊れかけの扇風機を、銀時と奪い合いながら、神楽は何気なく言った。

それは、年頃の女の子なら、普通の言葉だが、如何せん、神楽は普通の女の子ではない。

太陽に嫌われし、最強の傭兵部族、夜兎。

本来、陽の光に肌を晒す事すら自殺行為である。

当然のことながら、水着なんだのは着るところか、縁すらないはず。

そんな神楽だが、今銀時に水着が欲しいと、要求したのだ。

この暑さで頭がおかしくなったのか？銀時は、不安そうに神楽の額に手を当てる。

「熱は…ねえか…」

つて、うわっ！汗ベツタリつきやがった！汚っ！」

「何する力、失礼アルヨこのクソ天パ！」

半ギレで、銀時から扇風機を奪う神楽。

それを奪い返す銀時。

醜く、不毛な争いは続く。

「大体！テメツ！夜兔だろう！返せ！

水着なんか着て！痛っ！死ぬ気かっ！死ぬ！」

「ウルセー！扇風機！私だって！のっ！着てみたい！物アルヨ！」

「何言ってるかっ！寄越せ！わかんねーよ！壊れんだろ！」

パキンっと、小気味よい音がして、扇風機の首にヒビが入る。その音に反応して、二人は大人しく扇風機を下ろす。

壊れてはいないだろうが、如何せんこの灼熱の日々の生命線。とりあえず落ち着く。

「海なんざいけねえだろうが…

行ったところで水着なんか着て、肌なんか晒せるのか？

それに第一、金なんかねーぞ…」

あまりに切ないことを言いながら詰め寄る銀時に、神楽は唇を尖らせ、目線を反らす。

「違うネ…今は金がピーピーなのは承知アル…

ただ、一回でいいから着てみたいアル…」

それは、女の子なら誰もが思うことだろう。

例え叶わぬ夢であろうが、その足がかりになるならば、叶えてやるのも、惚れた側の弱みだろう。

「しよーがねえーな…」

銀時がそう呟いたのを、神楽は聞き逃さなかった。

水着狩りじゃー！と喜びハシヤぐ姿を見て、銀時はニヤリと笑う。そして、次の日。

「……？」

寝起きで、ボーっとしている神楽に、銀時は紙袋を渡す。

イマイチ覚醒しきれない脳みそだったが、それが水着であろうことに気付いた神楽は、キャツホウ！と嬉しそうに受け取った。

「適当に似合いそうな見繕ってきたぞ。着てみる」

銀時は、そうぶつきらぼうに言い、照れながらそつぽを向く。本当は自分で選びたかったが、銀時が選んでくれたものに間違いはないはず。

何より、自分のためにわざわざ買いに行ってくれたのだ。

贅沢は言わない。スキップしながら、神楽は風呂場の脱衣場に、着替えに行った。

そして、数分後…

「ぎ…銀ちゃん…？」

神楽が着替え終わったのか、震える声を上げながら応接室に現れる。

その姿を見て、銀時は満足そうに頷く。

「やっぱりスク水は旧式に限るな！」

舐めまわすような目線で、紺色のスク水に身を包む神楽を見る。
白く透けるような肌に、紺色のコントラスト、そしてこの野暮っ
たいデザインがなんとも言えない。

満足そうな銀時とは裏腹に、神楽は、何かが違う…普通の水着と
何かが違う…と、なんとも言えない表情で立ち尽くす。

確かにこれも水着だ。しかし、世間一般から見ればこれは…

「銀ちゃん…これ…」

まさか使用済み下着とか売ってるいかがわしい店で買った、使用済
みとかじゃねえだろうナ…」

「何言ってるんだよ。」

そんな危なっかしいもん着せられるかってんだ。

新品だよ。名前入ってるんだろ？

探すの苦労したんだからな」

「おいちょっと待て！」

名前ってこれ、白い布にマジックで書いただけダロ！

ていうか、なんで今時この水抜きがあるヤツネ！

どっから見つけてきた！

ていうか、危なっかしいってどういう意味アルカ！！」

神楽は銀時に飛びつき、馬乗りで首をガクガクと揺らす。

ほんの少し銀時の顔が綻んでるのは、多分気のせいだ…

「冗談じゃないアル！

もつと普通の水着がいいアル！」

「おまつ！バカ言え！

これ高かったんだからな！

諦める！」

「何を諦める力？」

今着る訳じゃないダロ！こんな来年には申し訳なくなるアルヨ！」

「いや、お前の発育不良ぶりなら、後3年はいけるね！

それに、銀さん別にそういうの気にしないから！

大人でスク水着ても、神楽なら怒らないから！」

「イメクラでも行くヨロシ…

このロリコンが…」

まるで汚物を見るような目で、銀時を見下ろす神楽。

しかし当の本人、相当スク水にご満悦なのか、いろいろいやらしい目で見ている。

もう嫌だ…地球は怖いよパピー…

泣きそうな神楽は、着替えようとヨロヨロと立ち上がった瞬間だった。

「旧式とはなかなかいい趣味をしているな、銀時。

その趣味を俺は全力で支持するぞ。

リーダー、よく似合っているな！さすがリーダーだ！」

どこからか入ってきたのか、突然桂が現れ、神楽の細い肩に手を置いて、一人でうんうんと納得している。

「ツラ、テメツ、コラツ！」

何してんだコノヤロー！！

うちの子に触るんじゃないやねえぞ！このポリゴンが！」

銀時の蹴りが炸裂し、桂は思わず神楽から手を離す。

「ツラじゃない、桂だ。」

それよりもリーダー、ここをもっとこうしたほうがいいんじゃないか？」

しかしすぐに復活し、神楽の下ろして髪を三つ編みにし始める。髪型変わるだけで、スク水の魔力が倍増した。

桂は、三つ編みを結っている最中、ずっと鼻血を出している。

「チツ…なかなかやるじゃねえか、ツラ…」

まさかテメエを見直す日が来るなんてな…」

「だろう、銀時…」

やはりこの野暮ったいデザインには、野暮ったい三つ編みが良いのだ…」

ダラダラと、鼻血を吹きながら、鼻息荒い二人を前に、神楽は拳に力を込めた。

その時だった。

「よお、銀時、ツラ。面白えことしてんじゃねえか」

どこからともなく、高杉がゆらりと現れた。

この状況を打破する救世主か！それともただの破壊の化身か！

ちよつとだけ期待した神楽は、高杉の手に握られた白いスク水を見て、愕然とした。

そして、銀時と桂の視線も、高杉の手に注がれた。

え、何？これ…アイツ何してんの？ギャグ？マジ？それマズくない？

ていうか、やっぱりコイツも3馬鹿か…
だがしかし、高杉は何一つ気にすることなく、神楽にそのスク水を合わせる。

「よく似合ってんじゃねえか、じゃじゃ馬姫」

至極まともに、高杉はマジマジと神楽を見ている。
突然の高杉の来訪に、銀時と桂は驚き、固まっていたが、すぐに高杉から神楽を離す。

「高杉… テメエ…」

「貴様…」

やはりこのままではいけないと思ったのかと、神楽は空気もぶち壊す高杉の魔の手から助けしてくれた二人に、笑顔を向けようとした時だった。

「だからテメエはダメなんだよ！
神楽の肌は白いから、白いスク水は反発してして、白スク本来の良さがいまいちかけるんだよ！
日焼けした肌に、白スク！白い肌に紺スク！！
これ世界の常識だろうが！！」

「やはりリーダーは紺色の方が似合う！
高杉：貴様になぜそれがわからぬ！
白いスク水は邪道なんだ！」

ああ…なんか論点のズレたところで怒ってる…
紺だの白だの、もうどっちでもいいよ。

ただ普通の水着着たかっただけなのに…なんでこんなことになっているんだろ…

ていうか、とつとこの三人、誰かブチ殺せよ…

神楽は、呆れ顔で銀時たちの動向を伺っていた。

「わかってねえのはテメエらだよ。

じゃじゃ馬姫だからこそ、この白いスク水が良いんだろっが。白い肌つたら、ピンクだろ。

それが白スク水から透けるんだ。最高じゃねえか。水で、そこを集中放火したくねえのか？」

「……

そうか！！」

力説する高杉に、銀時は思わず納得してしまう。

真顔で、白スクについて熱く語る高杉を見て、もうまともな連中ははいないと、神楽は生きるとことを諦めたような表情で、二人を見ていた。

だがしかし、桂はまだ納得してないのか、己の世界に入ってるのか、白スクについて語り合う高杉と銀時に目もくれずに、神楽に色々装備させ始める。

もうどうにでもなれ。と、投げやりになる神楽。

「ヅラ…俺やべーよ…

白スクなんて、AVだって興味なかったのに、高杉に諭されて白スク派になっちまいそうだよ…」

頭を抱え、ヨロヨロしている銀時。

高杉は、ドヤ顔で白スクを神楽に着せようと近寄っている。

だが、すぐにその歩みを止めてしまう。

何故なら…

「ツラじゃない、桂だ。

どうだ白スク派よ。」

やはりスク水には、通学帽、ランドセル、ニーハイだろうが！

この三種の神器を携えた旧式スクール水着に、チャラついた白スクなんぞ足下にも及ばんぞ！」

そこには、スク水に黄色い通学帽を被り、おさげでランドセルで
ニーハイソックス姿の神楽がいた。

そんな神楽の姿に、白スク派の二人に衝撃が走った。

そんな…バカな…

二人は、体の震えが止まらなかった。

今の神楽の姿は、例えるならば、まさに天使…。スクール水着の
天使だ。

よく見れば、後光がさしている。

銀時も高杉も、装備させた桂ですらも、その姿にフラフラと、光
に群がる蛾のごとく神楽に近寄り、五体投地をする。

大の大人三人が、一人のスク水少女に五体投地をしているこの光
景。

暑さでみんな頭おかしくなってるのにも、程があるんじゃないか？

というか、この人たち、やっぱり頭おかしいとかのレベルじゃな
いのか？

神楽は思った。

こんな世界、壊れてしまえ…と。

その後、マジギレした神楽によって、大の大人三人が、スクール
水着を着せられて、反省文を書かされたのは、また別の話。

なんちゃって挿絵

> i 2 8 7 5 3 | 3 7 0 2 <

スクデイ - 銀桂高神 - (後書き)

いろいろスイマッセン!!

なんか水着見てて、ああ。スク水なんて思って作り始めたら、こんな話に…

スク水は、ヨウジヨ最強装備ですからね!

私の頭も暑さでだいぶイカれてます。

ほんとに銀さんとか、ツラじゃなくて、鬼兵隊でやるのかと思っただんですが、例の如く、武市氏がアレなEDになるだけだと思い、自粛しました。

でも高杉とスク水は変わりません。

ヤツはネジはずれてるから、きつと大真面目にこういうことやらかしてくれんだろうと期待してます。

ハイ、高杉ファンの皆様ごめんなさい!

そのうち真面目な高神うpしますから!

スク水神楽ちゃん描いたら、スゴクエロゲー臭くなって吹いた。

もう恥ずかしがることもないので、載せときます。

青シャーだから薄い…

ファミリータイプ・鬼兵隊×神楽・（前書き）

鬼兵隊×神楽です。

ファミリータイプ・鬼兵隊×神楽・

「万斉はお兄ちゃんネ。また子はお母さんネ。武市は近所の変態ネ」

「ご飯を食べながら、神楽はいきなりそれぞれに役割を言い渡した。突然のことに、3人は眉間にしわを寄せる。

「拙者：お兄ちゃんでござるか？」

「なんでお母さんつか！先輩がお兄ちゃんなら、お姉ちゃんが妥当すよ！」

「変…態……」

少し涙目の武市を置いて、万斉とまた子が神楽に詰め寄る。

「仕方がないアル。イメージアル。

万斉はなんかミュージシャン気取りのお兄ちゃん

「拙者：一応音楽プロデューサーやってるでござるよ……」

また子は面倒見がいい、口うるさいおかん

「口うるさいは余計す！ていうかお姉ちゃんって呼ぶす！」

武市は子供好きのフェミニストって自分で言ってるあたり、完全にロリコン

アル。物陰に隠れて、カメラ持って、小学生をハアハア言いながら盗撮してるイメージ

アル。事実、私のこと前盗撮してたる……」

「武市先輩……」

「武市殿…」

二人の冷たい視線が、武市に降り注ぐ。
誤解だ！誤解なんだという武市だが、なんかイマイチうそ臭い。

「じゃあ、俺はなんだ？」

いつの間にか、高杉が神楽の後ろに立っていた。

そして座り、ポンポンと膝を叩き、神楽を座らせる。

お父さんか…お父さんの座を狙ってやがる…

全員が、神楽に視線を送る。

どうでる？

ここまでされたら、やはりお父さんか？

お父さんポジションを高杉に送るのか？！

が、そんなの神楽に関係ない。

少し考え、思いついたように手を叩く。

「近所にいる、ムシヨ帰りのヤク中！」

お勤めご苦労さまでーすと、付け加える。

空気が、凍りついた。

納得してしまう反面、誰しもが言えなかったことをあっさりといのける、その神楽の根性に全員脱帽する。

そこにしびれてしまいそうだし、憧れそうだ。

我ながら素晴らしい役当てだなと、言わんばかりに満足げな顔で、ご飯とたくあんをモリモリ食べる。

当の高杉は、怒ることも無くニヤッと笑い、モグモグしている神楽の頬についた米粒を舐め取る。

「ぬお！！なににする力！！」

「ん？俺あヤク中だからなあ…
何するかわかんねーぞ？」

突然の高杉の攻撃に、神楽はタジタジになる。

しかも、膝に座っていたはずの神楽は、いつの間にか高杉の足の間に座らせており、それでもご飯を食べようとする神楽を、後ろから抱きしめたりなんかしている。

なんだよ…

ただのバカツプルじゃねえか…

全員が溜め息をついて、イチャつくバカツプルの二人から、ちゃぶ台を少しずつ離していく。

神楽が気がついたときには、遙か遠くにご飯が移動していた。

まだ一杯しか食べてないアルー！と咽び泣く。

「ご飯時にイチャイチャしてんじゃねえっす！もう片付けるっすよ
！」

そう、また子が神楽に言ったのが聞こえたので、神楽は高杉を跳ね除けまた子の元に走っていく。

また子に怒られながら、神楽はひたすらご飯とたくあんを、とてもいい笑顔で食べている。

その笑顔を見て、高杉は、

「まだまだ、色恋よか食い気か…」

と呟きながら、食卓に混じり、神楽と一緒にご飯とたくあんを食す。

そんな鬼兵隊の、平和な朝のひと時。

ちなみに武市が盗撮した写真はすべて、また子と万斎が処分した

とぞ。

しかしそれは、高杉が神楽の成長アルバムに入れるためのもので、すでに焼き増しされてアルバムに入れられているのは秘密の話。

- e n d -

ファミリートイプ・鬼兵隊×神楽・（後書き）

鬼兵隊×神楽っていうか、鬼兵隊に愛されてる神楽で、高神ってか
んじです。

私の中では、鬼兵隊ってこんなイメージです。

うーん…武市さんは、やっぱりこういう役割になってしまふのは、
私の想像力が足りないせいですね…

また子と神楽ちゃんの百合ツプルとか、なんかやりたいけど、おか
んと娘みたいになるし…

まったり妄想していきますか…

あと、真面目な高神…

I d o n - t f o r g e t - 銀神 - (前書き)

銀神です。

他の誰のことも忘れても、私のことだけは忘れないで…

銀時の記憶が消え、万事屋からいなくなつて二日目。

神楽は未だぼーっと、穴の開いた場所から、外を見ていた。

『記憶なんて、そんな簡単に抜け落ちるものアルか？』

記憶喪失なんて、この方一度もなつたことのない神楽にとって、それが不思議でたまらなかつた。

大切な人のことも、全て忘れてしまう。

桂は銀時と共に、攘夷戦争を戦い、生き抜いた。

お登勢は傷ついた銀時を助けて、上に住まわせた。

新八は自分と、姉を助けてもらった。

そして、神楽も…

なんだかんだで世話になり、世話をしているような仲。

枝はいろいろなところに張り巡らされているけど、根無し草みたいな人。

それが坂田銀時なのだろう。

『そういえば、私…』

銀ちゃんのこと何も知らないネ…』

勢いとはいえ、そのまま住み着いてしまった手前、何故かそういう話をしたりしなかつた。

神楽自身も、聞かれなければ答えることはない。

互いにそういった考えだったからだろう。

いつも銀時の過去の話を耳にするのは、銀時の口からではない、

他人からだった。

どうして自分から話さないのだろう。

過去に辛いことがあり、本当は記憶喪失のままの方がいいのでは？
なんて、思ってしまう時もあった。

『でも私、最後の小さな枝になっても、枯れないヨ』

今までの、ほんの僅かの短い時間だったとして、共にいた記憶だけは、思い出して欲しい。

他の全てを忘れてしまって、空っぽになっても、自分という枝だけは残されたままであってほしい。

本当は全てを忘れてしまっても、自分だけを覚えていて欲しい。
そうすれば、きつと永遠に二人きりでいられるだろう。

まるで、御伽噺の王子と姫のように永遠に。

「他の誰のこと全て忘れても、私のことだけは忘れないで」

美しい月の輝く、満天の星空に向かい、神楽は呟く。

どんな姿になっても、銀時は銀時だから。

自分だけを見て、触れて、感じて。

銀時の傍にいるのは、自分だけがいい。

その器の中身が空っぽになったとしても、新しい水を注げばいい
のだから。

例えばその水が、澱んでいたとしても…

「私…銀ちゃん大好きネ…大好きだから…」

どんなになっても、私のことだけは忘れないで…

私だけを、見て…？

· d n e ·

I don't forget - 銀神 - (後書き)

よりぬきで、銀さんの記憶喪失の回を見て、そのまま即興で作り上げたもの。

若干神楽ちゃんがヤンデレっばいです。

ヤンデレ大好き。

まあ、なんだかんだで神楽ちゃんと銀さんは相思相愛なんです、っ
てことで。

相思相愛なのにヤンデレとは、コレいかに？

包帯の下にある素顔の答え・高神・(前書き)

高神です。かーなーリイチャついでます。

包帯の下にある素顔の答え - 高神 -

「高杉：包帯、解けてるヨ」

何気なく見た高杉の顔。

いつもはきつちりと巻いてある包帯が、少し解れていた。

こういうことは、意外とマメな高杉なのに、珍しいこともあるな
と思いつながら、神楽がそれを直そうと包帯に触れようとしたときだ
った。

パシんと、軽い音がした。

何かと一瞬理解できなかったが、それは包帯に触れようとした神
楽の手を、高杉が払っていからだった。

「あ……」

突然のことに、何とも言えない空気になり、神楽は思わずその手
を引っ込めてしまう。

なにかまずかったのだろうか？悪いことをしたと思い、申し訳な
さそうにゴメンアルと呟いて座り込む。

高杉も、反射的だったとはいえ、白く美しい、しなやかなかわい
らしい神楽の手を払ってしまったことに

罪悪感をいただいているのか、何も言わずに神楽から目を逸らしてし
う。

並んで座っているのに、互いに目を合わせられずに言葉もない空
間。

静かに、時を刻む音だけが耳に響く。

そんな重苦しい空気に、さすがの高杉もいたたまれなくなつたか、
落ち込んでる様子の神楽の肩を抱き寄せる。

「悪いな…そんなつもりじゃ…」

「いいネ…気にするなヨ…」

誰だつて触られたくないモノがアルネ…

私気にしてないヨ…」

ちよつと困つたように笑う神楽。

そんな神楽を見て、高杉はそのまま強く抱きしめる。

「ど…どうしたヨ…？」

いつも突拍子もない高杉の行動だが、さすがにこんな風に抱きしめられるとドキドキしてしまう。

おまけに肩に顔をうずめているのだから、なおさらである。とりあえず神楽は、よしよしと高杉の頭を撫でる。

「いつものお前らしくないネ…」

ふてぶてしいくらいに人のことギューしてくるくせに…」

「俺だつてな…」

悪かつたなつて思う時ぐらいあんだよ…」

「何か悪いことした力？」

「……………」

鈍いのか、忘れっぽいのか…

高杉は溜め息をついて、神楽の手を自分の左の頬に当てる。

その行為に、一瞬だけビクつく神楽。

払われた時の痛みが、そのしなやかな手に蘇る。

しかし、今回はまったく違った。

怯えるような神楽の様子に、高杉は少し笑い、囁く。

「解いてもいいぞ……」

そう言われ、神楽は恐る恐る、ゆっくりと包帯を解く。

心臓が、驚くほどに高鳴り、神楽の小さな胸を打ちつける。

次第に露わになっていく、滑らかな高杉の頬と左目、そして、その大きな傷跡。

濁った左目に光はなく、傷跡だけが生々しく残っている。

「……痛く……ないアルか……？」

「まあな……もう忘れちゃったよ……」

神楽は心配そうに、何度も高杉の傷跡に触れる。

痛みなど既にないが、何故か高杉の心が締め付けられるように痛む。

この傷は己の憎しみを、大切な人を失った世界に向けて、忘れぬよう刻み付けられているもの。

壊す世界に現れた、一人の少女に心を奪われ、次第に憎しみすら薄らいでいた。

初めて触れた神楽という、白く美しい存在に、自分の中にある澱みはあまりにも穢れすぎていた。

だから、この傷を見せたくなかった。

薄汚く澱んだ、汚泥の中に、神楽を引きずり込みたくはないから。不意に、神楽が高杉の傷に口づけする。

「また痛くなったりしないおまじないアル」

と、いたずらっぽく笑いながら。

突然のことに、高杉の頬は紅揚し、思わず笑ってしまふ。

「ほんと…お前といるといろいろ忘れそうだ…」

そう言って、高杉は神楽の頭を撫でる。

「どつという意味アル？」

「いや、そのまんまさ」

「？」

目の前にいる少女が、あどけない顔で自分の前にいる。

ようやく思い出す、穏やかだった頃の自分。

消えない傷は、憎しみしか込められてはいない。

そして、憎しみの果てにあるものは、きっと何も無い。

それでも、この穏やかな日々が続いていくのならば、新しいなにかがつかれるかもしれない。

ゆっくりと、高杉は神楽を抱きしめる。

暖かな体温を持つ、この少女と共に創る、美しい世界。

薄れ行く憎しみの記憶から、輝かしい未来の記憶を神楽と共に刻めるのなら。

新しい世界を、この傷に見せてあげよう、そう高杉は思った。

包帯の下にある素顔の答え - 高神 - (後書き)

甘…甘…甘ー！…！！…！！

いや、どうしよう！すごく恥ずかしい！

まあ高杉の包帯の傷に触れられるのは、神楽ちゃんだけだよなーなんて、思ってたらこのざまだよ！

気持ち悪いくらいに高杉が穏やかです。

キヤラ崩壊してます。

うう…もつと鬼畜な感じの話も作りたいのに、なんかイチヤイチヤしてくれません。

最近肌寒いせいですね。

鬼畜ものって、いいの？みなさんどうです？

引かれなければ、作…ろうかな…(ドキドキ)

e y e s o n n e m e . 土神 . (前書き)

土神です。ややシヨート。

「汚職警官とタッグを組むなんて、真つ平ごめんアル。
私と銀ちゃんがいれば世界は回るネ」

「そりゃ丁度いい。

お互い顔見るのも嫌になつてたところだ。
こつからは別行動な」

それは売り言葉に、買い言葉だつたんだらう。

隣に小さな女の子：神楽を連れて、土方はため息をつく。

二人きりで歩き始めて少し経つが、会話はまったく無かった。

イライラも頂点の土方は、吸うタバコの量も増えていく。

何が、私と銀ちゃんがいれば世界はまわるー（裏声）だ。バカじやねえの。

思い出しただけで、とんだ子守を受けてしまったと、ますます土方の機嫌は悪くなる。

神楽もそつぽを向いて、目もあわせようもしない。

なんだつつうんだ、このガキ！！

「どんだけあんなチャランポランに惚れてるつつうんだよ」

ぼそりと呟いた言葉に、神楽は反応する。

さらに、キツと土方を睨み付ける。

なんつう目えしやがるんだ、このクソガキヤ：

その目の鋭さに、さしもの土方も、怯んでしまう。

しかし、あくまでも表には出さない。

タバコに火をつけ、心を落ち着かせる。

「オメーに何がわかるヨ。
確かに銀ちゃんは、チャランポランだし、目の死んでるダメ人間だし、糖尿病だし、なってはいけない大人の見本アル」

「いや、俺そこまで言っただけよ…ていうかアイツ糖尿確定なの？
！」

「でも…銀ちゃんは…」

すう、と息を吸い、落ち着き払った目で、神楽は土方を見た。

命をかけて、私を助けてくれたアル

一文字一文字、確かに確認するように呟く。

先ほど土方を睨み付けた瞳とは違う、穏やかな深い蒼の瞳。

それは土方を見ていない。

きっと、神楽の記憶に焼き付けられた、銀時の姿を見ているのだらうか。

うつとり、恋をする乙女のような、初々しい穢れを知らない瞳。

その姿に、その瞳に、土方は一瞬心臓が止まりそうになった。

それと同時に高鳴る鼓動。

止まるんだか、高鳴るんだかどっちかにしてくれと、土方は思う。

そんな神楽の表情を初めて見たせい、先ほどの目と比べてしま
う。

あれが、自分を見る？目？で、これが銀時を見る？目？。

その歴然とした差に、思わず舌打ちしそうになる。

ふと、なんでこんなにも悔しい気持ちになっているのか、土方は疑問を感じた。

めんどくさい子守を押し付けられて、イライラして、物の弾みで発した言葉から、意外な展開になって…

神楽も女の子であることを知り、そして、信じられないくらいに距離を感じた。

今まさに隣を歩いているというのに、遠い。

改めて思う。自分は、その視界の隅にすら入っていないこと。いつもあの男だけしか見ていないこと。

それに対して、なぜ悔しいとか、ムカつくとか思ったのか。

あの男に負けたことに対してなのか、それとも…？

自分の感情なのに、何もわからない。

唯一つ理解：というより、本能的に感じたこと。

「おい…チャイナ娘…」

不意に名前を呼ばれ、神楽は振り向く。

真剣な目で、見つめる土方の目に、思わず囚われてしまいそうになる。

見つめ合う二人。

どうしようもないくらいに、抑えられない感情。

自分だけを見て欲しい。

初めて、土方が誰かを独占したいと思った瞬間だった。

- e n d -

e y e s o n m e - 土神 - (後書き)

土神、初めての恋のメロディー第二弾 W

なんて初々しい二人なんざましよ W

あれ、なんか恥ずかしい。すぎて恥ずかしいよ！

全然初々しくないし、むしろ土方病んでるよ。

こんな土神もスキです。

S p o o k y H a l l o w e e n - 銀新神 - (前書き)

ハロウィン小説第一弾。銀新神です。

Spooky Halloween - 銀新神 -

「ねえ銀ちゃん、お菓子寄越せヨ」

突然、名前を呼ばれたかと思つたら、神楽に胸倉をつかまれる銀時。

その神楽の目は、完全に座っている。

明らかにチンピラだ。

間違はなくチンピラが恐喝しているようにしか見えない。

言われなき暴力的な状況に、銀時から滝のように汗が出る。

「ちよ…ちよ、おま…神楽…ちゃん？」

いや、神楽サマ？神楽女王様？！

わかった、まず落ち着こう。

まず冷静に話し合おう。な？

俺たちは話せば通じる。

解り合えるんだよ。ね？」

命のかかっているような、この危機的状況に、銀時の普段は使っていない頭がフル回転する。

あの夜王・鳳仙と戦っている時並みに、いや、それ以上に頭をフル回転させた。

『ヤッバー！間違いない。これ間違いないよ！

給料を払っていないことへの鬱憤からか、ついに強盗じみた真似までするようになったんだよ、うん。

ごめんよ、銀さんがロクデナシなばかりに…

って、あれ？俺ってそんなにロクデナシ？俺そこまでダメ人間？

確かに給料なんて渡してないし、沖田には不法入国の少女をただ働

きでコキ使ってるって言ったって、寝食提供してるぜ？

金に不自由かもしれないが、三食昼寝つきだぞ？

バストイレ別の、2（3か？）LDKに、こんなイイ男と暮らしてんだぞ？

何が不満？何が不満なんだ、この娘！現物支給に、なんの不満があるんですか、コノヤロー。

まさか…やっぱり疲れた身体に優しくハートウォームな、アツチのケアが欲しいとか？

バツカ言えー！俺のほうが欲しいわ！

いやいや、待て。そうなるすると、やっぱりアレか。年頃の娘は難しいな…

まあ、こういう素直じゃないところもひっくるめて、全部受け入れるのが男つてもんよ。

お前の気持ち、しかと受け取ったぜ』

「銀ちゃん、何ニヤニヤしてる力…

気色悪いヨ…」

「わかったよ、神楽。

俺もいい大人だ。お前の望むようにしてやるよ」

「ほんとカ！じゃあ私酔昆布欲しいアル！」

「…酔昆布？」

嬉しそうに答える神楽とは裏腹に、銀時の頭に、大量のハテナが湧き出る。

再び銀時の頭がフル回転し始める。

もう二ト口積まれてフル回転どころか、摩擦で脳の皺すらもなくなりそうなほどに考える。

『え、あれ？なにこの展開？』

が、　　　　　して、ついに　　　　　する展開じゃないの？

何酢昆布つて。なんかの隠語？

まさか女のわかめ酒に対抗した男の…！！！！』

「ダメだ神楽！それだけは！

俺はそんなことできない！！

だって俺Sだから！

神楽にやつてもらえるならすすえるけど、神楽にすすわれるのは無理だ！」

全力で拒否する銀時。

男としての尊厳を保ちたいが、でもちよつとやつてもらいたいよ
うな、なんとというか…：な気分になっている。

しかし、当の神楽の反応は、何言っつてんだコイツと言った表情だった。

「なんだヨ、チクシヨウ…

お菓子くれないアルカ…このドケチ天パ…死ネヨ…

じゃなかった…えーつと…

あ、お菓子くれないなら悪戯するアル！」

その一言に、銀時の動きが止まった。

摩擦でツルツルになった脳みそに、その一言が強烈に刻まれたのだった。

「悪戯…だと…?!」

「そうアル！」

お菓子をくれないと悪戯していいって、新八が言ったヨ！
えーっと…たしか…とりつく…ほりつく…？

おあー…と…とりーとめんど？

あれ？なんだっけ？ねえ、なんだっけ？」

どうやら、新八からなにかを教わったらしいが、イマイチ要領を
得ていない神楽。

もう明らかに、お菓子をもらえるんだ、という部分だけに固執し
すぎて、大事な部分いろすつ飛ばしている。

なんのことだかさっぱりわからない銀時だが、ただ一つ理解した
ことはあった。

「新八あのヤロー！！」

神楽になんてこと教えてんだー！！

トリートメントってなんだ！ソープの新しい形か！？

まあいいさ…わかった神楽…

銀さんの胸に飛び込んで来い！

そして俺の全身を使って悪戯しろオオオ！」

何も理解していないというより、アツチの方向に理解した銀時は、
思いっきり服を剥ぎ、上半身を露出させる。

変態が あらわれた

「スイマセーン、なんか銀さん勘違いしてません？

ハロウィンですよ、ハロウィン。

トリック・オア・トリート。お菓子をくれなきゃ、悪戯するぞ。
です。

というわけで、お菓子をあげてください。

甘んじて悪戯を受け入れなくていいですから」

ガラッと、万事屋の扉が開き、新八が苦笑いを浮かべながら立っていた。

さらに、今までのやり取りの説明までしてくれたぞ！

「新八！テメ、神楽になに教……」

「あ、新八ー」

聞いてよ、銀ちゃんお菓子の一つもくれないアル！
悪戯って言うか、ブツ殺していいアルカ？」

「ああ……まあ銀さんだからね、しょうがないよ、神楽ちゃん。
よかつたらうちおいで？」

姉上が、一緒にハロウィンパーティーしよって言うてたから」

「うお！マジで力？お菓子一杯アルカ？」

「姉上が神楽ちゃんのためにつて、酢昆布一杯買ってくれたみたいだよ。」

まあ、作るのは僕だけど、カボチャや、カブの料理もあるからさ」

「……え、何？何なの？」

なんか俺今物凄く疎外されてるんだけど！

もしもーし？

新八くん？神楽ちゃん？」

「そうだ、ついでにお登勢さんところとか、西郷さんところに行つてお菓子もらおうか？」

それに吉原でも、なんかやってるって言うてたしさ！」

「了解アルー！」

キャツホーイ」

「オイ。コラ、テメエら！」

「そうだ！」

せつかくのハロウィンだし、仮装しないと！

神楽ちゃんは魔女っ子で、僕は…この狼男の耳でいいか…

これなら、ノリのいいお登勢さんや西郷さんならお菓子一杯くれる
だろうね。」

月詠さんも、きっと魔女っぽい格好してるんじゃないかな？

そしたら一緒に写真撮ろうね」

「ほんとアル！」

どっかの天パと違って、空気読むアル！

ツッキーきつとかかわいいアル！

ていうか、あのモンスターのとも魔女っ娘イベントとかやってた
らウケるアルな！」

キャツキヤウフフと準備し、ノリノリで出かける二人。

さらに定春までもが、ワンつと鳴いて、神楽の後を追う。

一人取り残された銀時は、なんとなく悲しそうな目でそれを見て
いた。

「…ハロウィンって、何？」

誰もいない万事屋で、銀時の呟きだけが空しくこだました。

ちなみに、狼男に扮した新八と、魔女に扮した神楽と、タイガー

マスクをつけた定春はこの後、お登勢と西郷と吉原でたくさんのお
菓子をもらえたそうな。

めでたしめでたし。

「めでたくねえよ！」

なに勝手にいい感じにメてんだよ！

なんだよハロウィンって！

ただのお菓子泥棒じゃねえか！！

俺だってカボチャのパフェ食てえよ！！」

「ウルセエンダヨ、クソガ！」

テメーハオバケカボチャノ煮付ケデモ食ッテロ！」

「銀時様、データさえいただければ、私が生成いたしますが、どうなさいます？」

「お前らなんか呼んでねエエエ！」

新ハイイイ！神楽アアア！

オレもパーティーに混ぜてくれエエエエエ！！」

- e n d -

Spooky Halloween - 銀新神 - (後書き)

ハロウィン…

ということ、なんとなくハロウィンっぽい話を…

…

なんか銀さんが勝手に暴走して、自爆しただけですね…ハイ…

とりあえず、こんな感じに、10月ハロウィン期間ということ、好き勝手に話を造っていいこうと思います。

ちなみに、新八の言っていたカボチャとカブの料理とは、元々ジャック・オ・ランタンはくりぬいたカブで作っていましたが、アメリカではカブが採れないため、カボチャが代用され、それが広がったものらしいです。

ついでに、そのランタンにつかうカボチャ（お化けカボチャ）は、水分が多くてとても食べられたものではありません（実食済み）
どうでもいい、ハロウィントリビアでした。

S p o o k y H a l l o w e e n 2 - 兄阿神 - (前書き)

兄阿神のハロウィン小説です。

Spooky Halloween 2 - 兄阿神 -

「なあバカ兄貴、お菓子寄越せヨ。
寄越さないと悪戯するアルヨ」

「何？悪戯するの？神楽から？
嬉しいなあ」

「いいよ。お菓子あげないから、悪戯しなよ」

ニコニコ笑顔で、神威が人差し指をクイクイと振り、神楽を挑発する。

それにイラつとした神楽が、静かに傘の銃口を神威に向ける。

「んー？悪戯じゃないの？話と違うじゃない。
ならこつちから悪戯するよ」

いやらしい手つきをワサワサさせて、神威が神楽ににじり寄る。
しかし、臆することもなく神楽は、躊躇いなく銃口を神威の眉間に当てた。

「ざけんな、バカ兄貴。
子供にお菓子をあげるのが、習わしの日アル。
そんなアダルトな悪戯、誰も望んでないネ。
いいからとつと酔昆布寄越せヨ」

「いやだね。俺は慈善事業に興味ないの。
なんの見返りもなくお菓子をくれてやるほど、出来てないからさ。
一酔昆布につき、一揉み、もしくは一チューでなら手を打とう」

「しよっぺえ代償アルな…」

私なら一酢昆布につき、一バカ兄貴の命にするアルヨ」

「じゃあ、譲歩して一発だ」

「交渉決裂アル」

ピリピリとした空気が漂い始める。

まさに臨戦態勢に入らんとする二人。

史上最悪の兄妹喧嘩の火花が、今切つて落されようとした時だった。

確実に今乗ってる船は、この二人のせいで宇宙の藻屑になるだろう。

スペースデブリとなつて、何億光年もの距離を延々と漂い続けるのだ。

それは冗談じゃないぞ、と、二人の様子を見ていた男が立ち上がる。

「ハイお二人さん、ちよいと落ち着かない？」

阿伏兔が、二人の間に割つて入る。

まだ戦闘が初まつてないだけ、割り込むリスクは低くて助かる。

双方を見れば、神威は相変わらず笑つてる。しかし神楽は…

「ねえ、せつかくのかわいい顔、台無しだよ…」

ものつつすぐくブスくれて、神楽は阿伏兔から顔を背ける。

相当機嫌が悪いみたいだ。

だが、すぐに何かを思いついたように、阿伏兔に向き直り、目を輝かせながら詰め寄る。

「阿伏兔でイイアル！お前も対象アルからネ！
お菓子寄越すネ！」

突然胸倉を掴まれ、顔をこれでもかと近づける神楽に、阿伏兔は固まる。

こんなにも近くで神楽を見るなんてことが、初めてだったからだ。
キラキラ光る深い蒼の瞳に、白く透明な肌。

普通にしていれば、かわいいのにねえ…なんて思ってしまった。
が、すぐに視線を逸らす。

上司が、とても静かな殺意込めた瞳で、阿伏兔を見ていたことに
気付いたからだ。

「なんで目エ逸らすアル…
お前もお菓子くれない気アルネ…
ハロウィンなのに…」

「だって、俺止めに入ったただけだから…」

「上司の尻拭いは部下の努めアルヨ！」

「この前と言ってる事違くない？
そういうのは妹の役目とか言ってた？」

「そんなんどーでもイイアル
くれないなら悪戯するアルヨ。
死にたくなかったら、酢昆布寄越せヨ」

「アンタ選択肢間違えてるよ。」

すっげー間違えてるよ。

何？なんでゼロ距離で傘の銃口こっちに向けちゃってるの？
それ悪戯ってレベルじゃないからね。殺人ってレベルだからね。
ていうか、何？ハロウィンって恐喝とか強盗を推奨するイベントなの？」

「なんだヨ、お前らハロウィン知らないアルカ？田舎者アルな。
都会派の私は、情報だけは知ってるアル。

かわいい子供達が、派手な衣装を着て、悪戯するからお菓子をくれ
って言いながら町を練り歩くイベントアル」

「悪戯するからお菓子くれって、文法間違ってるよ…」

「どっちでもいいアル！」

「じゃあさ、なんで神楽はその派手な衣装着ないの？」

フリッフリの魔女っ子衣装着て、おねだりするならお菓子あげるヨ」

神威の一言に、え？という顔をする神楽。

対する阿伏兎は、なんで魔女っ子指定してるんだ？てか、団長ハ
ロウィン知っててあの反応？という顔だった。

「というわけで、神楽。

どうせおねだりするなら、コレ着て、お膝を曲げて、

お菓子くれないと、悪戯しちゃうゾ（はーと）

って言ったらあげる」

普段はあんまり開かれない神威の目が、カツと開かれた。

本気だ。ヤツは本気で、妹にイメクラまがいのことをやらせよう
としてる。

若干ドン引きの阿伏兔だが、神楽はフラフラと釣られそうになっていた。

「何釣られてんの!？」

「はっ…！」

これ着れば酢昆布が大量に食べれると思うとつい…」

「いやいや、酢昆布のために身体売らないですよ…」

「阿伏兔、何余計なことやってんのさ。」

ほら、神楽？ここに見えるのなーんだ？」

「酢…酢昆布…！」

三太のジジイが持つてるみたいなでっかい袋に入った酢昆布アルウウウウ！」

喜び勇んで、その袋に飛びつこうとする神楽を、阿伏兔は羽交い絞めで止める。

「ダメだって!どう考えたって団長の罠じゃん!

団長も!イメクラじゃねーんだから!

こういうところでそういうプレイはやめて!」

「ハロウィンなんて、公認コスプレ日じゃん。

それにイメクラじゃないから。コスプレだから。

ほーら、神楽?酢昆布が食べたければ、この服着てよ」

「ぐぬぬ…!」

「あのー…お取り込み中スイマセン、お三方…
他の団員も見てるので、艦内でそういうのはあまり…」

ふと周りを見れば、同じ第四師団のメンバーがことのやり取りを
ジーンと見ていた。

そう、とても白い目で。明らかに引いている。

阿伏兔の背中に冷たいものが走る。

これ、団長の威厳とか関係ないよね…

神楽も、我に返り少し恥ずかしげに頬を染めて、神威と阿伏兔か
ら一歩ずれる。

気まずい空気が流れる中、それでも神威は笑顔を崩さず、師団の
面々に向かって、こう言い放つ。

「何？文句あるの？」

文句あるなら、殺しちゃうぞ」

その後、第四師団メンバー全員がお詫びという名の献上品である
酢昆布を、魔女のコスプレをした神楽に捧げるといふ光景が見られ
た。

魔女…そう、某う ねこ 頃に出てくるベア リー エのよ
うな、煌びやかなドレスを着た神楽に。

その光景、まさにウィッチ・クイーンに貢物を捧げるかのようだ
った。

ハロウィンに相応しい、その様子を見ながら神威は、いい笑顔で
酢昆布を受け取る神楽を見て呟く。

「計画通り…っ！」

つまり、あの袋に入った酢昆布は全て空箱。

それを見て飛びつく神楽。

条件に不服の阿伏兔。

それを見ている師団員。

そして、自分の一声…

労せず神楽にコスプレをさせ、トリックオアトリート。ハッピーハロウィーン。のコンボが見れる。

ああ、なんて自分は策士なんだろう…そして、なんて神楽はかわいいんだろう…

神威は、コスプレの神楽を見て、溢れ出そうな鼻血を必死で抑える。

ま、お世辞にもベア リー エには程遠い残念な胸だが、そのコンパクトさが逆にいじらしい。

そもそもドレスに、そんなものはいらんのだ。
がさつな妹は、絶対にあんなドレスは着ない。

だからこそ、コスプレが公に許されるこの日を待っていた。

ベア リー エのコスプレしても、師団の連中から何一つ疑問をもたれないこの日を！

恥ずかしそうなあの姿を、視姦したって何も言われない。

まあ、なんか言われたら殺しちゃうけどね。

とりあえず言いたいことは、よくわからんけど、ビバハロウィーン！
そんなことをニヤニヤ考えていると、神楽が神威の前にやってきた。

見れば、師団員全員から酢昆布を受け取ったらしい。

こんなにも嬉しそうな顔の神楽は、久々だ。

兄として、素晴らしいことをしたなあなんて思っていると、おもむろに神楽が神威に手を差し出した。

なんだ？子供のころのみたいに手を握って欲しいのか。かわいいやつめと解釈し、普通に手を握ったら、物凄い力で手が握りつぶされた。

見れば、座った目で神楽は神威を見ている。

「そうじゃねえヨ、バカ兄貴。

全員から酢昆布巻き上げたけど、お前の分はまだまだアル。寄越せよ、酢昆布。あんだろ？そこに。山のように…」

「…あり？」

さしもの神威も、こういう神楽の目は怖い。

背中に冷たい物が走った。

獲物を狙うその目で、神楽はさっきの袋に向かう。

手を握りつぶされたことで、神威の反応が遅れ、その袋の秘密を知られてしまった。

わなわなと震えながら、空箱の酢昆布が入ったその袋を床に叩きつけ、ゆらりと、あの阿伏兔と戦った時の顔で、神威を見る神楽。そして、怒った神楽が神威に襲い掛かったのは言うまでもない。

「ハロウィンって、怖ーいお祭りだね…」

阿伏兔が物陰で呟いて、師団員全員と合掌した。

- e n d -

Spooky Halloween 2 - 兄阿神 - (後書き)

神威とか、多分ハロウィンとかよく知らないぶりすんだろっなあと
思いながら作りました。

例によって、なんか変態になるんだよなあ…

不思議…

まあ阿伏っさんと神楽ちゃんの絡みがかけたから満足です。

てか、ベアトリーチエのコスプレした神楽ちゃん…

すごい似合うと思うんですよ。

すごい胸のあたり残念ですが…

S p o o k y H a l l o w e e n 3 - 土 沖 神 - (前 書 き)

土沖神のハロウィン小説です。

「ニコ中一、お菓子寄越せヨ」

「あー？なんだよ、万事屋んこのチャイナ娘か。

つたく、警察官に向かって恐喝たあ、いい度胸してんじゃねえか」

「なんだヨ、税金泥棒くせに。

ケチ臭いこと言っでないで、お菓子寄越すアル。

酔昆布で手エ打ってやるからヨ」

「：お前さあ、人の話聞いてた？」

あるつららかな午後の陽射しが眩しい時間。

公園で一服していた土方に、神楽がやってきていきなりこう告げられたのだ。

面倒くさいから、無視しようと思神楽に背を向けてタバコを吸ったが、気がつけば覗き込むようにいる神楽が、土方の視界に入る。

視界にいれないようにそっぽを向くが、シャツと、神楽は土方の視界に入ろうとする。

土方を見上げるその上目遣いや、その姿や仕草の全てが、なんとも言えずかわいらしい。

思わず顔がにやけてしまいそうになるが、なんとか堪える。

「大体：なんでお前にお菓子なんぞあげなければならなんだよ」

「ハロウィンだからアル！」

もっともらしく言う土方に、神楽は即答した。

しかし、その単語自体を知らない土方は、少し考えたが、やっぱりわからない。

「なんだ？ハロウィンって」

「んー確か出銭威星のお祭りアル」

「でぜにいせい？」

「星全体がテーマパークになっていて、夢を魔法の星がキャッチコピール。

けど、一度行くと、湯水のようにお金を使ってしまい、中毒のように何度も通い詰めるうちに破産したら、その星の住人として死ぬまで働かされるといふ、夢は毛ほどにないけど、金を使えといふ魔法はかかっている恐怖の星アル」

そう、神楽が説明していると、気のせいか？後ろから

「ハハっ。心が隙間だらけだね（甲高い声）」

という声が聞こえた気がした。

振り向くが、当然誰もいない。

土方は、顔から血が引いていくのがわかった。

「おい今のそれ、大丈夫か？なんか消されたりしないよな？
どう考えても、某テーマパークのことだよな？！」

「大丈夫ヨ。作者は出銭威の信者アル。

信者がこう言ってたから、問題ないアル」

「関係あんのか、それ！」

まあ…信者という字を合わせると、儲けって言う字になるからな…
すっかり洗脳されてるっつうか、なんっつうか…」

「洗脳されてるから、ハロウィンハロウィン浮かれてるアル。

できやこんなむちゃぶり小説企画なんてやんないアルネ。

自己満足もいいところアル。

というわけで、お菓子寄越せヨ」

「見も蓋もねえこと言ってるじゃねえ！」

あいにくそんなもんは持ち合わせてないが…

あ、マヨネーズなら…」

「死ねヨ、クソマヨラー」

「あんだと、コラア!？」

話を元に戻され、やれお菓子寄越せ、冗談じゃないの応酬に戻る。

口喧嘩をしても、なんて平和なんだろう…

土方はなんとなく幸せを感じる。

しかし、そんな土方の小さな小さな幸せは、あっさりとおある男の
せいで崩される。

「ずいぶん仲良さげで、楽しそーですねィ」

「「!!」」

沖田が突然、神楽の後ろから現れた。

そして、いつのまにか神楽を羽交い絞めに行っている。

「何する力、このサド！
離すアル！セクハラで訴えるアルヨ！」

「やめろ、総悟：
婦女暴行罪で、同心をしょっ引くのだから御免だぞ…」

「じゃ、土方さんは未成年者略取で俺がしょっ引きますア」

「なんでそうなんだよ！」

「釣れないと知りながら、マヨネーズでチャイナ釣ろうとしてっか
ら」

「釣られるわけナイだろ！あんなもんで！
やっぱりバカだろ！お前バカだろ！」

「……」

「わかつちやいるが、マヨネーズをバカにされると、ちょっと悲しい。」

「土方は何も言えなかった。」

「しかし、それでも沖田と神楽の攻防は続いている。」

「羽交い絞めにされながらも、離れようとする神楽。」

「なんとしても離そうとしない沖田。」

「あれ、これ強制猥褻じゃね？むしろ、婦女暴行か？」

「と、土方が思った瞬間だった。」

「なんなら、俺がお菓子よりもいいもんくれてやろうかい？」

「スっと、沖田があるものを取り出す。」

しかしそれは、残念ながらモザイクをかけなければ見せられないようなものだった。

見た目はカボチャが連なっているが…どうみても ナーだ
った。

「お前なんてもの持ち歩いてるアルカ！」

「人の趣味にケチつける気はねえが、さすがにそれは猥褻物陳列に
なんぞ！」

あまりのものに、神楽も土方もドン引く。

しかし当の本人は、気にすることなく神楽ににじり寄る。

「何言ってるんですかイ、お二方。」

ハロウィンていうのはもともと、死者や化け物が蘇る日でしょう？
俺が実は死者だったらどーしやす？

今日ぐらいは、仲良くしてくれてもいいんじゃないんですかイ？

なあ、チャイナ？

朝まで二人で、ミステリアスなマスカレードだぜイ」

「オメー一人でハロウィンの夜をすごして、朝靄と共に消えるとい
いネ。

ていうか、今すぐ失せるアル」

冷たい反応だが、沖田はまったく気にしない。

未だに神楽を離そうとしないからだ。

だめだこりゃ…土方が手錠を出そうと、目を逸らした時だった。

ゴスツ…

鈍い音が聞こえた。

何事かと思えば、神楽がそのまま沖田にバックドロップをかまし

ていたのだった。

脳天を地面に打ちつけ、ようやく手を離す沖田。

その様子を、呆然と見ているだけの土方。

地面にツバを吐きつける神楽。

異様な空気が、漂っていた。

死んだ…かと、土方が、心の中でちよつとガッツポーズを取り
そうになった瞬間だった。

「つてーな。何しやがんでイ」

ムクつと起き上がり、頭を摩る沖田。

不死身だ！と叫びそうになる二人。

そんなのを意に介さず、沖田は普通にカボチャのアールを
神楽に突き出す。

こんなもんいらんわ！と、神楽はつき返そうとしたが、よく見れば蓋がついている。

こつからローションでも出るのかと思えば、違った。

沖田がその蓋を開けると、飴が入っていた。

「…何？」

「だから、ハロウィンだろイ？」

飴ちゃんだよ。くれてやるから、アレ、言ってみ？」

そう言われ、神楽は悩んだが、すぐにひらめいた。

「トリック・オア・トリートアル！」

「ん。ほらよ」

「ありがとうアルヨ！」

ほくほく顔の神楽を見て、沖田が満足げに笑う。

その様子から、完全に外された土方は、マッハで近くのコンビニに走った。

そして、大量のお菓子を抱え、神楽にあげる土方。

「おーこんなにお菓子がいっぱい！」

マヨラーもありがとうナ！」

ニコニコとそのお菓子を受け取り、もりもり食べる神楽。

そしてその姿をニヤニヤしながら見ている警察官二人の姿。

もう餌付けしているようにしか見えないが、幸せそうなのでよしとしよう。

ていうか、お前ら仕事しろ。

と、未成年者略取の通報を受け、やってきた近藤がその様子を見て悲しそうに呟いた。

- e n d -

S p o o k y H a l l o w e e n 3 - 土 沖 神 - (後 書 き)

なんか…いろいろごめんなさい…

ほんとはちゃんと土方にトリック・オア・トリートして、お菓子もらうまでやろうと思ったんですが、長くなって收拾つかなかったので断念しました…

とりあえず、私、デイ ニー大好きです。

誕生日おめでとう・銀神・(前書き)

銀神？誕生日話です。

誕生日おめでとう・銀神・

たった一言でいいヨ。
その一言がほしいのヨ。

「誕生日おめでとう」

朝、目覚めて応接間に顔を出す神楽。

相変わらずソファの上でジャンプを顔に、グーグーと乗せ寝こけている。

一番最初にそれを言ってほしいから、様子を伺っていたのに…

乙女心一つ理解してのか、この糖尿病め…

仕方ないネ…と呟いて、神楽は着替えに戻る。

そして、銀時が目覚める前に、そつと表に出る。

秋晴れというのだろうか。

澄んだ空に、雲が少し浮いている。

朝の空気は冷たいが、晴れない気分を払拭するにはもってこいだ
った。

清々しい。

この時期の天候は嫌いじゃない。

傘を開いて、神楽はのんびり散歩に出る。

誰もいない公園。人通りの少ない通り。

少し寂しいが、新鮮な気持ちだった。

どこまで歩いたのだろうか。

気がつけば太陽が高い位置にあり、時間はもうじきお昼を告げる。

戻ったら、銀時は目を覚ましているだろうか？

それともまだ寝こけているだろうか。

そもそも、今日は誕生日だというのに、誰も何も言ってくれない。歩いていても知り合いにすれ違うこともなかったのもあるが…

いや、屯所に行けば、沖田や土方がいるかもしれない。

今の時間なら、どこかで桂がバイトしているかもしれない。

道場なら、新八やお妙がいるかもしれない。

会おうと思えば、必ず誰かに会う。

なのに、なんとなく避けるようにしていたのは…

「あのチャランポランに、一番初めに言ってもらいたいなんて、とんだ乙女心ネ」

自嘲気味にため息をついて、自分の想いを笑う。

わかっている。

こんなにも、自分が銀時を好きであることに。

だから、生まれてきたことを、一番に祝ってほしいのだ。

こうして、幾千万もの星の中で出会えた奇跡を、共にすごしている時間を、実感したいのだから。

なのに、あのクソツタレ…

唇を尖らしたまま、神楽は万事屋に戻る。

淡い期待を抱いて…

だが、中に入れば誰もいない。

ますます神楽の機嫌は悪くなり、ほとんど不貞腐れるように押入れに入り込む。

期待した自分がバカだった。

そんなことわかっているし、そういう部分を含め、自分は銀時が好きなのに。

複雑怪奇な心を、どうしていいかもわからず、とにかく朝早かっただけに昼寝を決め込もうと思う。

寝れば、こんなムシャクシャは忘れるだろうと…
どれだけ経ったろうか。

漂ういい匂いに、神楽の意識は覚醒していく。

そして、ガラッと押入れの扉が開かれる。

寝ぼけ眼だったが、確かにそこに立っているのは…

「…銀ちゃん？」

目を逸らし、なんとなく照れくさそうに頬を掻いている銀時が、そこにいた。

あ、今何時だろう？そう思って聴こうとした瞬間、手を掴まれて抱えられてしまう。

俗に言う、突然のお姫様抱っこに、神楽は完全に覚醒し、だんだんと顔が赤くなっていくのがわかった。

「え、ちょ…何アルか?!」

慌てる神楽なんて気にしないで、銀時はそのまま応接室の扉を開ける。

電気はついていないが、暗さから見て、もう夜なのだろうか。

何も見えないが、不意に小さな明かりがテーブルに宿る。

目を凝らせば、それが大きいケーキをに灯された14本のキャンドル。

キャンドルの幻想的な明かりに目を奪われていると、不意に耳元で、銀時が囁く。

「誕生日おめでとう」

その言葉に嬉しくて、神楽は銀時に抱きつく。

それと同時に、部屋に明かりが付き、クラッカーと共に誕生日お

めでとうという声が聞こえる。

そこには新八が、お妙が、桂が、エリザベスが、長谷川が、定春が、お登盛が、キャサリンが、たまがいた。

皆が笑顔で、神楽の誕生日を祝ってくれている。

神楽はその様子に、嬉しくて泣いてしまう。

「主役が泣いてんじゃねえぞ…」

朝は悪かったな…準備で夜遅くてよ…

本当は、昼間にやりたかったんだけどよ…」

「ううん…いいヨ…」

ありがとう銀ちゃん…みんな…」

泣いてる神楽を座らせ、みんなで食べるケーキ。

最高に嬉しい誕生日だった。

しかし、後にやってきた沖田達により、桂の捕物劇に変わってしまっただのは別の話…

- e n d -

誕生日おめでとう・銀神・（後書き）

神楽ちゃん誕生日おめでとうー！！

ってことで、神楽ちゃんバースデー小説いかがでしたか？

なんかもうむりくりな感じですが、すみません…

最近やらなきゃいけないことたまりすぎて、なんかgodgodな生活ですが、頑張って生きてます。

かく言う私も、11月生まれなんでね。

なんか、神楽ちゃんと運命感じます。

うん。あとがきだというのに、なんかグズグズですね。

だめだこりゃ、次行ってみよー。

足りないものを補うのが愛だといふのなら・沖神・（前書き）

沖神…シリアス？

足りないものを補うのが愛だというのがなら - 沖神 -

「どうしても…ダメなんだな…」

沖田が溜め息混じりに呟いた。

申し訳なさそうな表情だが、神楽は沖田から目線を逸らしている。これから、一緒に生きてほしい。

そう告げたのだが、神楽は唇を噛み締め、頷くことはなかった。ただ一言、震える声で“ごめん”と言うのが精一杯だった。

「…やっぱり…旦那と行くのかイ？」

その問いに、神楽は静かに頷く。

またしても沖田は、溜め息をつく。

それだけ…それだけあの男に魅力があるということか。

同じ穴の貉だというのに、どうしても…

「旦那にや、敵いやせんか…」

自嘲気味笑いながら、沖田は神楽を見る。

何を言っても、神楽は眼を逸らしたままだった。

せめてその温もりだけでも忘れまいと、身体を引き寄せせる。

堅く、冷たい感触だけが、そこにあった。

どうしようもない絶望感。

ゆっくりと積もる、残酷な現実。

色褪せ、無色になった希望。

神楽もまた、声にならない声を抑え、泣きそつなのを堪える。

仕方がない。仕方がないのだ。

自分達は今…

「マイナスドライバー同士で、何がいけないんでイ！」

「仕方ないアル！マイナス同士だと余計マイナスアル！ただでさえ沈んでるのに、陰鬱になりたくないヨ！マイナスってイメージ悪すぎアル！」

おまけにマイナスドライバーは、ピッキング防止法のせいで意味無く所持していると捕まるアル！」

「掛けりゃプラスになるだろイ！沖田（-）×神楽（-）＝愛（+）でイ！」

大体俺ア警察だ！掴まえるなら、手錠と鎖で繋がませア！！！」

「そんな計算式聞いてないアル！！というより、お前と私はアル！というか、なにさり気にサドっ気発揮してるネ！」

マイナスドライバーのお前に、今何が出来るアルカ！」

「チャイナの堅く閉じられた心の扉をあけ」：「開かねーヨ」

ゲーマー星人の手によって、マイナスドライバー同士になってしまった沖田と神楽。

これから、ドライバーとして生きて行くしか道のない二人。

しかし、ドライバー同士では抱きしめようにも、身体が当たってうまく抱けない。

どうしたってドライバーじゃ無理だった。

「なんてことだ！」

チン がボックスドライバーになった旦那が、チャイナの普段は隠れてる股のナットを早回しして、下の穴こじ開けちまうってのかア！」

「オメー何ドサクサに紛れて下品なこと言ってる力！
銀ちゃんにそんなことできるわけないネ！

なめんなよ！あのヘタレ具合なめんじゃねーゾ！」

「わかんねーだろイ！そんなこと！」

チクシヨー！なんだって俺まで全身ドライバーになっちまったって
んでイ！

それさえなければ俺だって、チャイナの股の…」

「シリアスな演技に飽きたアルナ。もういいアル。

せいぜいゴルフボールかつ飛ばしてるとイイアルヨ、ドライバーと
してナ」

冷たい、まるでゴミを見るような眼で、神楽は沖田を一瞥し、手
を振りながら歩いていく。

しかし沖田は、後ろを向いた神楽の隙を突いて、その手を握った。

「うおー！」

後ろに引っ張られ、神楽は沖田に支えられた状態になる。

「待っててくれよ…いつか…本当の身体に戻るまで…」

その時は…チャイナ…おめーの股のナ…「マジでいい加減にしるヨ
！…！」

一瞬、甘いセリフにときめきかけたが、そこは流石の沖田。

顔面に、神楽の蹴りが炸裂し、沖田の身体は地に沈む。

まあ結局こうなるわけで…

その後、無事にゲーマー星人をボコしたおかげで元の身体に戻れ

たが、神楽の股のナットを沖田がこじ開けたかの真相は不明である。

- e n d -

足りないものを補うのが愛だというのがなら - 沖神 - (後書き)

久々にギャグっぽいというか、ちよいと下品な話を。

なんか私ゲーマー星人っていうか、モンハンの話大好きです。

さりげなく沖田と神楽ちゃんマイナスドライバー同士だし、焼肉の
時も向かい合わせだったし…

結構しょうもない理由ですが好きです。

またモンハンの話やらないかな…

秘湯混浴刑事・土神・(前書き)

土神。 銭湯の話です。

銭湯の一番風呂は、誰が何と言おうと最高である。

誰も浸かっていないきれいなお湯に、誰もいない広い空間。

のんびりと体を伸ばし、土方は銭湯の一番風呂を堪能する。

がしかし、水の流れとは明らかに違う、何かを削る音が耳に入る
せいで、リラックスマードにはとてもじゃないが入れなかった。

原因は、そう…

「近藤さん。さすがにそりやまずいって…」

「いや、トシ。大丈夫だ！」

なぜなら脱衣所からお妙さんの匂いがした！間違いない！お妙さん
は今壁一枚を隔てた先にいる！

ならばこんな壁、とっとと取っ払ってくれよう！」

上司・近藤が、ストークするお妙と風呂に入ろうとしてんだかよ
くわからないが、壁にドリルを当てて、突貫工事をしている。

風呂であってはいけない音が響く。

「トシ、大丈夫だ。じゃねえーよ！」

「アンタ何？どつからドリル持ってきてんの？！」

「この壁ぶち破る気？！」

猥褻物陳列で、真選組局長逮捕とか、マジシャレンなんねえーから
「！」

「チンなだけに陳列か！うまいこと言うなトシ！」

「すげーや。そんなサブイボが出るようなこと言えるなんて、さす

「がは土方さんですわ」

「おめーは少し黙ってる。

つたく、こんな醜態誰かに見られてみる…真選組の威厳に…」

「アネゴオオオオ！」

「あら、神楽ちゃん」

冷静に、この状況を打破しようと考えてはいたが、突然聞こえてきたかわいらしい声に、土方の動きが止まる。

間違いない、確実にいる。

「相変わらずでけー声だな、万事屋のチャイナは…」

「元気が一番だなあ！」

「ん？どうしたトシ。前屈みになって…」

「いや…なんでも…」

『オイオイちよつと待て。

なんだこの状況。

なんで万事屋のチャイナ娘がここにいるんだ？

アイツんとこ風呂あんだろ。まあ、たまには銭湯も…なんてのはわかる。俺らだってそうだ。

「ただ、なんで俺らと同じ時間に?!」

「ありえねえ！マジありえねえから!!!」

脱衣所から聞こえてくる声に、土方はなんとか冷静になろうと必死になる。

『落ち着け…クールだ。クールになるんだ土方十四郎!』

「…っていう理由で風呂壊しちゃったアル。取り押さえられて、銀ちゃんに怒られたヨ…」

『なん…だと…』

今なんだった?!風呂壊して、取り押さえられたって、裸か?!裸で取り押さえ…

押さえ…』

クールになるうにも慣れなかった土方。

破壊された理性は、どっか遠くに行ってしまった。

「俺もあなたに手錠かけていいですか?全裸で」

「え…土方さん、今なんて…」

ザバッと土方が湯船から上がる。

しかし、その顔はうつむいたままで、表情が読めない。

そんな土方が呟いた言葉が聞き取れなくて、沖田は怪訝な顔をす
る。

今、確実になにかおかしなことを言った。

しかし、土方はそのまま突貫工事をしている近藤の元に行く。

「近藤さん、ドリルの角度こうしたほうが早いですよ」

「トシ…お前………」

さっきまでの態度と打って変わった土方に戸惑いながらも、近藤

は言われたとおりドリルの位置を合わせる。

するとどうだろう。

不思議と先ほどよりも、掘削がうまくいくようになった。

ガリガリと壁を削り、穴が開いたその先にいたのは、白い肌を蒸気でほんの少しピンク色にし、少しうっとりとした感じの目で湯船に浸かる神楽の姿だった。

突然の土方の訪問に驚くこともなく、神楽はゆっくり近づく土方に手を伸ばし、そのしなやかな腕を首にかける。

近づく唇同士が触れ合うそうになる。

小さな吐息や、息遣いを肌で感じる…

至福…

そう、背中を削がれ、薄れゆく意識の中で、土方は夢（妄想）を見た。

すぐ後ろにいた悪鬼ではなく、脳内で裸でいる神楽を焼き付けて、その眼を閉じた。

.....

「いやー銭湯でひどい目見たわ。戦闘部族の茶吉尼って、おっかねえー」

「見た目まんま鬼アル。」

ていうか、なんでお前は背中ずる剥けにされなかったヨ。一人逃げてきたナ？

おのれ銀ちゃんの敵ー！」

「オイ、そりゃねーだろイ。俺ア身の危険を察知しただけでイ。つか、土方さんがやたら安らかな目だったから、案外垢も老廃物も全部こそげ落とされてよかったんじゃないんですかい？」

「何をおおお?!ニコ中はいいけど、銀ちゃんと新八返せえええ!」

「ハイハイ、二人とも。落ち着いて?」

そういう理由なら仕方ないわね。待ってる義理はないわ…

寒いし、早く帰って、こたつの中でバーゲンダツシユ食べましょ?」

「マジでかアネゴ!私すとりべりー味がいいね!」

「俺抹茶で」

「なんでサドまで来るカ!

さっさと死体をお風呂から引き出してやれヨ!ニコ中もゴリラも浮かばれないネ!

ていうか、お前もズル剥けにされて来いヨ!」

「いや、あの鬼どもに命を捧げた人柱の命は無駄にできねエ

それに俺アもうズルズルンに剥けてらア。見るか?」

「汚物見てもうれしくねーヨ。死ね」

『フフツ。二人とも仲いいんだから』

なんて、ほほえましく見守るお妙と、口喧嘩している沖田と神楽に完全に忘れられた土方達は、今まさに命の火が消えようとしていたというのに気づかれないのであった。

人は死ぬ前に、走馬灯のように思い出が蘇るのは、きっと死の恐怖から逃れるためなのだろう。

それが思い出ではない、甘い妄想だとしても、死を甘受するには十分な逃避手段なのだから。

· d n e ·

秘湯混浴刑事・土神・（後書き）

すみません、なんかうまくまとまってないです…

土方はけっこう妄想癖あるから、こんなもんでちょうどいいですよ
ね。

いつになったら神楽ちゃんのチツパイみれんだと、期待してた銭湯
の話…結局でないまま終わって悲しいです。

きっとアニメではやらかしてくれと期待してます。

Christmas Wish - 兄神 - (前書き)

兄神。クリスマスの話。

Christmas Wish - 兄神 -

拝啓 神楽ちゃんへ

お元気ですか？お父さんの毛根は元気です。

早いもので、もうクリスマスですね。

お父さんがサンタの格好をして、神楽ちゃんとクリスマスを通じたのが、もう一年も前になるなんて。

時間が経つ早さに驚いています。

残念なことに今年は、お父さん忙しくて、地球にいけそうもありません。

と、ある星の内戦真っ只中に取り残されしいまい、どうしようなんかもう面倒くさいから全員皆殺しにしようかな、なんて悩んでいる最中です。

寂しい思いをさせてしまつてごめんなさい。

けれど、神楽ちゃんは一人じゃありません。

お父さんは、遠い星の彼方から、神楽ちゃんを見守っています。

神楽ちゃんにとって、今年のクリスマスも素晴らしいものになることを祈っています。

また、手紙書きます。

PS

風邪引かないように。

あと、お正月にお餅食べ過ぎないように。

気をつけてください。

お父さんより。

「って言う手紙預かってきたヨ。やつほー神楽！メリークリスマス
！」

無駄に元気よく、万事屋の扉が開かれる。

誰もいないものだから、居留守を決め込もうと思っていた矢先にこれだ。

ソファでゴロゴロしていた神楽の前に、派手な赤い衣装を着た何者かが立つ。

シカト決め込もうと思っていたが、そのいきなりの訪問者に、神楽は啞然とした。

「バ…バカ兄貴?! 何勝手に入って来てるネ! 不法進入で奉行所に突き出すヨ!

何アルか! そんな真つ赤な服着て! どうせその誰かの返り血だろ! この犯罪者!!」

「実の兄を犯罪者に仕立てるなんて、お兄ちゃん悲しいなあ…
ていうか、言われ無き罪状を勝手に擦り付けないでよね」

赤いサンタ服を着た神威は、オーバーアクション気味にヤレヤレと溜め息をつく。

それでも神楽は、無表情のまま神威を見ている。

「黙れヨ、海賊の分際で。言いたいことはそれだけか?
ならとつと奉行所に自首ってくるヨロシ」

ペツとツバを吐きかけ、再びソファに横になり、女性エイトく恐怖の鬼嫁特集くを読み始める。

空気。まさに空気だった。

わざわざこんな格好(東 ハズで購入したサンタ服)をしているのに、このスルーっぷり。

せっかく地球に遊びに来て、さもないクリスマスを送っているであろうかわいい妹に、少しでもメリーなクリスマスをとったのに

この仕打ち。

久々にあつたんだから、もう少し優しくハートウォームに迎えてくれてもいいんじゃないか？

「ねえ、神楽？冒頭の話ちゃん聞いてた？

親父からの手紙、わざわざ音読してやったのに、その態度はないんじゃない？」

その態度に半分キレ気味になりながらも、星海坊主からの手紙をヒラヒラと神楽に向けて振る。

捨てるぞ。いいのか？さあかかれ！釣られる！と言わんばかりの神威の行動。

しかし、神楽は少し悲しそうな目で、ため息をついただけだった。

「あり？」

予想していた行動パターンと違う神楽の反応に、思わず神威は声を上げてしまう。

こうなるとダメだ。

とりあえず、ゴロゴロと横になってるソファに近づき、しゃがんで神楽の視線を合わせる。

そんな神威に視線を合わせたくないのか、神楽はソファの背もたれに顔を向ける。

こっち向きなさい、と、神威は神楽の頭を掴んで、無理矢理視線を合わせる。

顔は向いても目を合わさない。しかし、その大きな瞳に少し涙を湛えてるように見える。

マズイ…地雷踏んだかも…

神威はそつと手を放し、神楽の髪をなでる。

「なんか…悪かったヨ…」

そう言って、星海坊主からの手紙を神楽に渡す。
神楽は無言で受け取って、その手紙を眺める。
神威が音読した内容は本物で、確かにクリスマスにこれないとい
う星海坊主の言葉が並べられていた。

仕方ない。仕事なんだから。

そう言い聞かせても、寂しさでいっぱいになる。
それが涙となって頬を伝うには、時間はかからなかった。

「泣くなつて…兄ちゃんが遊びに来てやったんだぞ…」

「家族不幸の兄ちゃんが来ても嬉しくないアル…
なんでそんな恰好してるネ…パピーや銀ちゃんのマネされても嬉し
くないヨ」

「どうせさもしいだろうと思つてさ。

ていうか、大体、クリスマスだつてのに誰もいないじゃんか。親父
も、その銀ちゃんもさ」

「そ…それは…」

「大切ならさあ、一日中いてやれよつて思つね。

まあ、居てくれなかったおかげで、俺がこうして神楽と遊びに行け
るんだけどさ。

これで、俺の神楽への愛が上つて証明されたネ。
どこ行こうか？あ、せつかくだからこのコート着て？おしゃれしよ
う！」

「え、あの、ちょ…」

反論もできないままに、神楽は神威の持ってきた赤のAラインのニットコート（デイズーシュー2010年ミーちゃん仕様）を着せさせられ、外に連れ出された。

ピユウと、冷たい風が吹き抜ける。

思わず身を固めてしまおうが、赤いニットコートと、一緒に用意された手袋は暖かい。

しかも、左手は筒みたいに繋がっていて、神威が手を握っているのだ。

なんとなく温かな気持ちになって、二人は歩き出す。

クリスマスということで、煌びやかなイルミネーションが輝くかぶき町。

歩いているのは、カップルばかり。

一瞬これでいいのか？めっちゃ場違いでないかい？なんて思ったが、神威は気にしないで、そのまま神楽の手を繋いだまま歩く。

「何遠慮してんだよ？大丈夫。兄弟だっていいじゃないか」

「なっ…何がいいネ！意味わかんないアル！」

「かつこいいお兄ちゃんと一緒にだからって、照れるこたあないからね。」

恋人同士で行こう！」

「ハア？何言ってる力…恋人って…」

「あ、神楽、あれおいしそうだね！」

「…！ホントアル…！」

おいしそうな料理を涎垂らして見ていれば、そのまま入って食べ歩く。

マロニーだけだった去年とは雲泥の差だ…と、思ってしまった。

もちろんみんなと居れたクリスマスも楽しい。

けれど、こうして兄と過ごすのも、実に何年ぶりだろう。

どれだけ泣いて喚いても、笑って去って行った神威。

今更、なんでこんな…

あれこれ食べ歩いているうちに、ふとそう考えてしまい、立ち止まる神楽。

それに気づいた神威。

なんとなく、言いたいことがわかるのは、やはり血の繋がりがあ
るからなのだろうか。

そつと、繋いでいた神楽の手を離す。

不安な目で、神威を見る神楽だが、何も言わない。

神威は、そんな神楽の頭をポンポンと叩き、ギュっと抱きしめる。

「なんでヨ…なんでいきなり…こんな風に接するネ…

昔思い出しちゃったじゃないか…忘れようとしたのに…」

「昔ね…うん、忘れてくれていいよ。

だってさ、昔とは違う、今、お前に贈りたいクリスマスがあったか
らだよ」

神威がそう言った瞬間、神楽の唇を塞ぐ。

ゆっくりと神楽の唇を堪能し唇を離れた神威は、その笑みを浮か
べたまま神楽を見つめる。

突然のことで、しかも光が輝くツリーの下で、キスされた神楽は、
目を大きく開き、ワナワナと恥ずかしさで震える。

そんな神楽の頭を、ヨシヨシと撫でて、神威は呟いた。

「また来年も、お前だけのクリスマス届けにくるよ。邪魔さえいらなければね…」

そう、ニヤリと笑って、神威は神楽の前から飛び退いた。

直後に、神威が居た場所に、バズーカの弾が被弾する。

おまけに木刀やら、日本刀やら、揚句爆弾まで飛来して来た。

突然のことにポカーンとしていたら、見覚えのある顔が何人かやっできて、舌を出して逃げる神威を追いかける。

それを見て神楽は、深いため息をついた。

「…確かに、バカ兄貴の言うとおりネ…」

そんな血相変えて追いかけるくらいなら、最初から一緒にいてくれヨ…バカヤロー…」

疲れたアル…と呟きながら神楽は、万事屋に向かって歩き出す。

不意に、冷たい風が吹く。

無意識に手に息を当てて気づいた。

神威の、手の暖かさに。

繋がっているのは、血だけじゃない。

血よりも濃いモノで繋がっている。

手に残る温もりを握りしめ、神楽は雲一つない、満点の星空に向かって呟く。

「また…来年アルか…期待しないで待ってるヨ…
バカ兄貴……………」

夜空に向かった言葉は、願いかそれともただの呟きか。

本心は、冬の道を歩いた温もりだけが知っている。

Christmas Wish - 兄神 - (後書き)

クリスマス過ぎてます。ですが気にしないでいきます。

先週のジャンフェスで、神威コスの方と、神楽ちゃんのコスの方が仲良く写真撮ってるの見て、よし、クリスマス小説は兄神だと決心して一週間。

いかがでしたか？

とりあえず、イチャイチャしてないように見える兄神は好物です。ちなみに神威は神楽ちゃんとデートしてるときは、サンタ服じゃなくて、今年のシーのミッシーの格好で…

絶対似合うと思うんだな！

トライアングル - また神 - (前書き)

また子 神楽 高杉なお正月前の小話です。

トライアングル - また神 -

「さーて、お正月っすからね！
腕によりをかけて、お節つくるっす！
晋介様も喜んでくれるいいっすなあ……」

そう言っつて、ちょっと乙女モード全開なまた子は台所に立ち、手際よくお節を作っつていく。

お煮しめ、祝い肴三種、海老のつや煮、八幡巻、伊達巻……

どれもおいしそうに出来上がっつていく。

しかし、煮豆の汁を作ろうとしたときに、はたと動きが止まった。

「しまった…黒豆戻すの忘れて…あれ？」

ふと、テーブルを見ると、さっきまであつた伊達巻が行方不明になつていた。

一瞬悩んだが、テーブルの陰に隠れてこそそと動く影を見つけて、また子はため息とともに、その影を捕まえた。

「こるあ！何つまみ食いしてるっすか！この頭のピンクいネズミは
！…」

「ネズミじゃないアル！夜兎アル！」

首根っこを掴まれた神楽は、なんだかよくわからないこと言いな
がら、伊達巻一本を押し込んで飲み込む。

そして食べ終わったと同時に、また子の手を首から外し、逃れる。

「どつでもいいっすよ、んなこたあ！！」

あーもう！なんで伊達巻全部食っちゃうんすかー！作り直さなきゃなんない…
って言ってる傍から、お煮しめまで食ってんじゃねえよ！ほんとすばしっこいっすね！！」

ガインつと、また子の投げたお玉が、神楽の頭に直撃する。
それでも神楽は気にせずお煮しめを食べ続ける。

どれだけ飢えてるんだ…
まるでこれじゃ、私たちが神楽にご飯をあげてないみたいじゃないか…

そんなことを思いながら、また子は数の子を餌におびき寄せ、再び神楽を羽交い絞めにして捕まえることに成功した。

「離すアル！お腹空いたアル！」

「落ち着くっすよ！大体、神楽は少し食べ過ぎっす！
ただでさえうちのエンゲル係数ダダ上がりで、上から睨まれてんすからね！」

「そんなん知らないアル。育ち盛りの女の子一人の食費すら捻出出来ないなんて、宇宙海賊が聞いて呆れるネ。
ねぐれすつとで、児童相談所に訴えるアルヨ」

「どこでそんな言葉覚えてくるっすか！！しかもあんたもう育児つて歳じゃ！…あるか……」

地味に対象年齢だつてことをすっかり忘れていた。
それにしても、羽交い絞めにしても、力では夜兎に敵わない。
当たり前のように、そこいらにあるお節料理を食べつくす神楽。
また子はがつくしと膝を床につく。

「結局食い尽くされた…どうすんすか！お正月迎えられないっス！」

「気にすんなヨ。私餅と砂糖醤油だけでも気にしないネ」

「おめーはちつたあ気にしろよ！！」

慰めてるのか？また子に肩をポンポンと神楽が叩く。

そんなこんなで、やんややんやと言いつつ合っていると、嗅ぎ慣れた煙の匂いが漂ってくる。

気付けば、すぐそこに高杉が立っていた。

「随分騒がしいじゃねえか…」

「高杉！」

「晋介様！聞いて下さいよ！神楽がお節のほとんど…
ていつか、現在進行形で全部食い尽くしてます…」

高杉が現れたことで、また子に隙が出来た。

するりと腕を抜け、モリモリとお煮しめを食べている。

いい笑顔なので、高杉は特に咎めない。それどころか見守っている。

また子は、ダメだこりゃ…と思った。

ほんと、高杉は神楽に甘い。甘すぎる。

このままじゃ、春雨の中でも鬼兵隊の肩身が狭くなってしまっ…

まあ、確かに神楽はかわいいけどね…

なんて感じで、項垂れてるまた子のもとに、お煮しめを食べている神楽がやってきた。

また子を覗き込むようにして、こう言った。

「また子の煮物はおかんの味ネ。マミーの味とは程遠いけど、八郎の母ちゃんの味ネ」

「それ…褒められた気がしねーんスけど…
てか八郎って誰だよ…」

じと目で、そんなことを言っている神楽を見る。
通じねえと悟った神楽は、少し照れたように呟く。

「うまいってことだヨ。
言わせるなヨ、恥ずかしい」

そう言って、照れながら、プイとまた子から視線をそらす。
その仕草があまりにかわいくて、思わず神楽を抱きしめるまた子。
ヤバイ！やっぱかわいいっス！！
改めて、そう思うまた子なのだった。

その様子を、せっかく出たのに空気だった高杉が、何かを思いついたように紫煙を吐き出しながら呟いた。

「さっきの会合で元老院共によお…
うちにはエンゲル係数の高え、夜兔がいんだからもつと食費よこせ
って言ってきたぜ…」

これでうまいものすべて食い放題だ、よかったなあ、神楽」

甘い。どこまでも神楽に甘いぞ高杉！

というか、今は明らかにまた子と神楽を離すために言ったような言葉である。

案の定、すげーアルー！と高杉に抱き着く神楽。
急に温もりの消えたまた子。

敵う筈のない相手だし、仕方ないとはいえ、やっぱりちょっとさびしい。

だから聞こえるような独り言を言う。

「さーて、誰かさんが食べ尽くしてくれたお節作り直っスかねーあー誰か味見係いてくれると助かるっスけどー」

「ハイハイ！私ネ！私やるアル！」

「全部平らげたらダメっスよ！」

「了解アルー！」

キヤツホオオオと喜ぶ神楽。

まったくどれだけ食べ物に釣られるんだ…いった感じで、高杉は神楽の頭を撫でた。

「出来たら、俺に食わせるよ？」

ニヤリと笑いながら、神楽に言う。

イマイチその言葉の意味を理解しているのかわからないが、神楽は仕方ないアルナ〜とか言っている。

その様子に満足したのか、高杉は踵を返し、去っていく。

残されたまた子は、さっそく神楽にエプロンを装着させていく。

『女同士なら、ちったあ私にも歩があるものもあるってもんスよね？』

神楽には、ちょっと大きめのエプロンの紐を結びながら、また子はふと思う。

敵わないだろうとしても、少しでも愛しいこの子に自分なりの愛情を。

例えば母親だ、八郎の母ちゃんだ言われても、ほんの少しでもその愛が伝わればいい。

高杉とは違う、この愛を…

神楽を取り囲む、奇妙なトライアングル。

気づいていないのは、当の神楽だけ……

おまけ

「うむ、さすがまた子殿。わかってるでござるな」

「イノシシ女にしては、いいセンスですなえ」

「でしょ？万斉先輩！武市先輩、ブチ殺しますよ。

まあ、このまた子のセンスで神楽も輝きを増すってもんスよ！」

と、また子が手に持った写真を見せびらかす。

神楽のエプロン姿の写真なのだが、そのエプロンは白いフリフリで、なんともかわいらしい。

例えるなら幼妻というところだろうか。

「やっぱりロリエプロンはいいでござるな…」

「幼い顔と、家庭的の象徴エプロン…ギャップ萌というやつですねえ。

あ、私はロリコンではありません。フェミニストです。子供好きの」

「それロリコ、フェミニストです」

「どつちでもいいでござる。」

「してまた子殿、これ一枚いくらでござ」売らねーっスよ」

「じゃせめて借し「借さねーっスよ」

「「んだよ、ケチ臭えな、このイノシシ女」

「ブチ殺すっス？」

「まーお二人がどーんだけあがいたって、この姿を生で見れたのは、また子だけっスからー？」

「残念だったっスねーお節作り、楽しかったっスよー
また神楽と料理するっスかねー」

「ひらりと写真を奪い返し、また子はニコニコしながら二人の前から去っていく。」

「二人は少し遠い目をしながら、宇宙の彼方を見つめた。」

「作った側から全部食べられてたら、意味ないんじゃ…」

「今年の正月は、宇宙の果てで餅と砂糖醤油でござったな…」

「「かわいいんだけどねえ…」

「誰に向かっていったわけでもない。」

「誰が悪いわけでもない。」

「ただ今年の正月は…」

「「来年は…せめてお雑煮食べたいな…」

遠くに輝く星に、切実な願いを。

どこかで鬼が笑っているが、気にしないでおこうか。

一方高杉は、神楽がこっそり詰めたお節を食べたらしい。

まあ、量とか見た目が某バー カフのお節並みの切なさだったのは、秘密だが…

「食えりゃいいんだよ」

「ごもつともで。」

来年のお正月は、どうなることやら…

- e n d -

トライアングル・また神・（後書き）

また子×神楽を予定してたけど、高杉が出てきてる、可愛いそうなのまた神です。

百合も好きなんで、もっといろんなまた神書きたいけど、なんかおかと子供みたいになるんだよなあ…

今年は鬼兵隊×神楽をいろいろやりたいです。

ほんと今更正月話とか、なめてんのかってかんじですが、旧正月はまだのはずなんで、まあ、そういうことで…

S w e e t H e a r t - 土神 - (前書き)

土神バレンタイン小説…

男も女もソワソワするバレンタイン。

イケメンだろうが、ブサメンだろうが、関係ない。

気になるアノ子からのチョコ、もらえるもらえないで、一喜一憂してしまうのは悲しい性なのだ。

もちろん、彼らとて男児として生まれた以上、例外ではない。

そう、今日はバレンタインの朝、洗面所にただずむ一人の男。

制服やスカーフはピッと整え、皺一つない。

鏡を見て、髪を整え、ひげの剃り残しや歯垢のチェックをする。

こうやっていい男に磨きをかけるのだ。

意中の人からもらえるチョコと、その想いのために：

冷たい朝の空気を吸い込んで、両頬叩き気合を入れる。

今年こそ！今年こそは！！

「ヨシ、準備万端！ちよつとお妙さん所に行ってくる！」

「ちよつと待てや近藤さん！あんた今日、仕事休みじゃねーか！！何制服着てんの？！何その『今日も仕事頑張るか！』的なノリ！！」

「トシか。大丈夫。案ずることはない。」

今日一日パトロールという偶然を装ってお妙さんに会い、愛という名のチョコレートをゲットしてくるだけだ」

「だからそれストーカー！！全然大丈夫じゃねえし！！

つつか、休んでまですることなのかソレ……」

「お前にはまだわからないのか？バレンタインとは、いわば戦争！憧れの人からチョコをもらうだけではない、多くの義理の中から本命

という愛を探し出し、奪い合い蹴落とす！

それがバレンタインなのだ！「いや、違うだろ」

そして、この世にたった一つの真実（愛）を手に入れる、いわば今日の俺は愛の戦士、ラブウォーリアー勲！！

お妙さんに限るがな！！」

「なんだそりゃ…」

頼むから、あんま犯罪臭のすることだけは勘弁してくれよ…俺も今日パトロール担当なんだからよ…」

「大丈夫だ！チョコレートをもらってくるだけだからな！じゃあ、ちよつと外行ってくる！

もしかしたら、今晚は帰らないかもな！あーははははは！」

「既にストーカーという犯罪臭がしてるつつつの…」

土方が諦め気味にタバコをふかし、近藤を見送る。

そして、なんともなしに鏡を見た。

相変わらず、瞳孔の開いた自身の姿がそこに在る。

バレンタインね…

思い起こせば20数年生きてきた中で、そういったものをもらったことも多々ある。

だが、渡した女性は、必ず嫌な顔をして、なぜか謝られて二度と姿を見せない女性ばかりだった。

「目の前で食べつつーから、マヨネーズかけたら露骨に嫌な顔しやがって…何が間違ってたんだってんだよ。

っーか、チョコレートよか、マヨネーズほしいわ」

タバコの火を消して、大きな欠伸をしながら土方は仕事の準備を

する。

外に出れば、冬らしいカラッと晴れた天気で、子供たちが元気に走り回っている。

風の子だなあと思いつながら見れば、チョコを片手に持っている。

思わず二度見する土方。

何？最近の子供って…と思いつながらもとりあえず歩く。

商店街を行けば、カップルがイチャイチャしていたり、客に渡すのだろうか？大量のチョコレートを持った女性とすれ違ったり、それをストーカーしているゴリラにも会った。

ちよつとため息が増えだしたとこで、公園に向かい、一服する。

なーにがバレンタインだ。浮かれやがって。アホくさっ。

別にもらえないからじゃねえし。マヨネーズのほうがほしいし。

なんて、よくわからない言い訳をしながらベンチに座り、タバコを吸う。

見渡せば、チョコを渡して告白してるヤツや、無駄にベタベタしてるヤツ…それに大人も子供も関係なかった。

おおよそ土方の半分も生きてなさそうな子供までもが、さも当たり前のように隣に女の子を連れ「コイツ、俺のコレね」みたいな顔でいる。

バレンタインに一人っすか？寂しいっすね？なんて目で見られたような、そんな錯覚さえ覚える。

「ケツ…ガキの分際で、色気ついてんじゃねえよ…」

「悪かったナ。ガキの分際で…」

「…！」

誰に言うわけでもなく、一人自然と毒づいていたら返答された、いきなり聞こえた、聞き覚えのある声に、土方は驚きのあまり手

に持っていたタバコを落としそうになる。

何かと思い、声のするほうに目をやれば、座っているベンチの後ろに、神楽が仁王立ちで土方をジト目で見ていた。

「な…なんで?!」

「バレンタインだからだよ」

「なんで?!」

「同じこと言わせんなヨ!」

「……」

ポカーンとしている土方に、神楽は少しいらだちながらも手に持っていた包みを乱暴に押し付ける。

そこで買ってきたものなのだろうか?かわいらしい包みに包まれたそれは…

「…マヨネーズ?と、チルチョコ…」

「そうだよ、クソマヨラー。どうせこっちのほうがいいだろと思っただけアル。」

「チョコなんておまけネ」

「あ…ありがとう……」

「勘違いするなヨ!

せつかくのバレンタインに、一人寂しく悪態ついてる大人の姿があまりに哀れすぎたお前を見かけたからちよっとそのコンビニで買っただけアル!

だから……」

感謝するアル!!

そう照れながら言っ、神楽はものすごい速さで駆け出して行った。

残された土方は、そのマヨネーズをマジマジとみる。

「そこで買ってきた…ねえ…」

そのわりに丁寧に包まれているし、神楽が書いたと思しきメッセージまで添えられていた。

「何々？」

マヨラーはバレンタインの時も寂しくマヨネーズ啜ってるというアール？

余計なお世話だったの………たく……あー面倒臭エ……

………何返せばいいんだよ……」

一人晴天に向けて呟く土方の声は、どこか嬉しそうだった。

このマヨネーズ、大事に使おう。なんて思いながら…

そんなニヤつく顔を抑えられず、挙動不審な警察官がいると、一般市民から通報されたのは言うまでもなかった。

おまけ

「トシ、いいことあったのはわかるが、気をつけるよ！公園にいた子供たちに示しがつかんからな！」

「…すまねえ、近藤さん……
で、鼻血は止まったかい？」

「大丈夫だ。チョコを渡す勢い余って殴られただけだからな。お妙さんの愛は、しっかり伝わった。」

ラヴウォーリアー・勲。何一つ驚いていない」

「……………」

やはり普通にもらえただけ、自分は幸せだと、土方は近藤の頬にくつきり刻まれた拳の痕と、鼻に詰めているティッシュを見て思った。

こうしてバレンタインという男の熱き戦争は幕を閉じたのだった。

- e n d -

S w e e t H e a r t - 土神 - (後書き)

今更…今更です…

つうか、バレンタインネタは、本編だとすでに銀神と新神がやらしてくれただから、とりあえず誰にしようかなと思ってたら、土方！という、友達の言葉でこんな話に…

お粗末です…

お返し100万倍・土神・(前書き)

今更バレンタインのお返しホワイトデー土神

お返し100万倍・土神・

こんにちわ。先月チャイナ娘…こと神楽…ああ、なんか名前呼び
恥ずかしいな、オイ。

まあ、えー…彼女からマヨネーズとチロルチョコをもらった俺、
土方十四郎です。

そんなバレンタインのお返しをする日、もうすぐホワイトデーだ
ということ、地味にまた町が浮ついてる気がします。

誰だ…お返し100倍とかほざいてるヤツは…

大体テメーで勝手にやっついて、お返し100倍とか割に合わね
ーもいいところだろうが。

元値いくらのチョコに、いくら見返り求めやがるんだ。おー怖え
怖え。

まったく、バレンタインデーもホワイトデーも糞くらえってんだ。
なんて思いながら…どうして俺は…

「こちらの、指輪なんていかがですか？1カラットのダイヤがちり
ばめられていて、とってもゴージャスなんですよ」

あ、サイズわかります？」

「え、いや、ちょっと…」

「そうですか？でしたら、こちらのネックレスは如何です？
トップに0.2カラットのダイヤが光る…」

「あ、そういうんじゃないかと…」

なんで俺はこんな宝飾品売り場にきているんだろうか…

そう、それはついさっき…

「おいザキ。女にプレゼントやるとしたら何やる？」

「なんすか、副長…いきなり…」

えー…女の人にプレゼントですか？やっぱり宝石ついたアクセサリ
ーとか…」

「宝石か、よしわかった」

「やっぱり貴金属類は結構好きな子いると思うけど、俺あんまりお
金持ってないし…」

だからお菓子とかもいいかなー……って？副長？あれ？もういない
…」

たまにはザキ山役に立つじゃねえかと思いつながらデパートに来た
が…

おい、なんで宝石ってこんなに高いんだ？

しかも、男一人で買い物してるの俺だけじゃねえか？

おかしいだろ。

プレゼントは一人で買いに来るものだろう、サプライズ的に考え
て。

なのになんでウザったいくらいにイチヤイチャしてる連中が買い
にきてるんだってーの。

テメーらはポテコでもはめとけ、ボケエ。

しかも店員、やたら高いの進めてきやがる…

待て、手持ちはそんなに持ってきてないんだよ…クソ…

「ありがとうございます…またお越しく下さいませ」

デパートを後にして、近くの喫煙所で一服する。

ザキ山…アイツやっぱり役に立たねえ…

ったく、どうしたもんか…

とりあえず町をぶらつく。

こうして改めてみると、ほんといろんなものであふれてる。

これだけ沢山あるってのに、なんで俺は、あのチャイナ娘の好き
そんなもの一つ見つけらんないんだ。

宝石とかが特別似合うわけでもねえ。

かんざしをつけてる姿はみたことねえ。

まして、ネックレスだのアクセサリーの類なんて…

いつも似たような服に、紫の傘をさして、泥だらけになりながら
遊んでいる。

おまけに、貧乏そうな風貌をしているわけではないのに、漂う貧
乏臭さに拍車をかけるように酢昆布ばかり食している。

これはあれだ。間違いない。

あの糖尿野郎と一緒にいるから、貧乏臭くみえるんだ。
いっそのこと俺が引き取って…

いやいや待て待て、だがそれもいい。じゃなくて！
ますますどうしていいかわからない。

酢昆布をあげれば、まあ喜ばれるだろう。

少なくとも、酢昆布が好物なのは知ってのとおりだから。
だけどそれだけでいいのか？

「チツ…しょうがねえ…」

タバコの火を消して、俺はそこに向かった。

時間はもうじき夕刻を告げる。

早くしないと、今日に間に合わなくなる。
だから…

「なんだヨ、お前。ストーカーか？」

不本意ながら、万事屋の前で待っていた俺に、相変わらずチャイナ娘は辛辣な言葉を投げかける。

呼んでもいねーから待ってたんだよ…と伝える気もなく、俺はその小さな手を引く。

「ちげーよ。あれだ、ちょっと付き合え」

「現職警官が誘拐なんて、よもまつアル」

確かに、夜に差し掛かるうとする時間に、13、4の女の子の手を引いて歩く俺の姿は、一歩間違えれば誘拐しているように見えるだろう。

なんともぐうのねも出ないが、こればかりは仕方ない。

「任意聴取だ」

「??私、何もしてないアルヨ」

「そうじゃなくて、えー…と…」

どんだけ鈍いんだよ…

ため息交じりに、次の言葉を考える。

ホワイトデーだから？

お返しだから？

じゃなくて、もっといい言葉…

「お前に渡したいものがあんだよ」

飾り気のない言葉に、チャイナ娘は気付いたか、ちょっと頬を染

めて俯いてやがる。

ああちくしょう、なんてかわいいんだ！
そうしてる間に目的の場所に着いた。

「…何アルか、ここ…」

「知らん」

「連れてきておいてそれはな…」

「お前が好きなものがよくわかんねーから、適当に見繕ってこい。
いつも似たような服ばっか着てんじゃねーよ。年頃なんだから、も
つとかわいいの着やがれ」

入ったのは、小さな一軒の店。

今人気があるという、若者向けにアレンジされた着物が多く、あ
の寺門通もお気に入りという呉服屋らしい。

チャイナ娘は、モノ珍しそうな顔で、着物を見ている。

「つたく、好みがわからねえならサプライズもしようがねえよ。
不本意だが、仕方ない。」

「どーだ、決まったか？」

「え…いや…ちょっと待つアル…どれがいいかわかんないヨ…」

「めんどくせーな…ほれ、この赤いのとかどうよ」

「いつも着てる色アル…」

「じゃあこっちの…」

あれこれ手に取って、あーでもないこーでもないと話す。
長え…女の買い物超長え…

ていうかめんどくせー!!!

しかし、なんかこう、悩んだ顔もなかなかかわいい。

ふと、チャイナ娘の目線は、チラチラとカウンターの上に飾られてる、鮮やかな赤の着物に目が行っていることに気付いた。

金系の刺繍が美しく、柄も華やかな桜…だけじゃなく、牡丹や桔梗など、季節の華が刺繍されている。

「なんだよ、あれが欲しいのか？おい、それ欲しいんだが」

「ちよ…っ！まだ欲しいなんて言っていないネ！気になってただけヨ
！」

なんか喚いているが気にしねえ。

欲しいなら素直になれよ。

カウンターにいた親父が気づき、のっそりと動く。

「ん？ああ、これかい？」

これね、結婚式用の打掛なんだよね〜これに目をつけるため、お兄さんのお嫁さんなかなかやるじゃない。

綺麗でしょ。四季折々の花が艶やかでね〜でもお嫁さんさんにはまだちょっと早く見えるけど？

まあ、お二人が結婚するまでのご予約なら可能ですよ。最近こういうの着る人、なかなかいないからね〜

で、いつ？」

ペラペラと意外としゃべる親父だな…

ていうか、それ打掛？打掛なのか？！通りで派手だと思った…

ていうか、嫁？チャイナ娘が俺の嫁？！わかってんじゃないか。
オヤジg。」

チャイナ娘も、打掛がなんなのかわかんねーみたいだが、結婚式
という単語に思いつきり反応してやがる。
こうなりゃヤケだ。

「日取りは決まってねーから、とりあえずそれよこせ」

「！！」

「お兄さん気前イイね！
じゃあこのくらいまけちゃおう！」

「！！」

なにがなんやらという前に、話が進んでしまっていて、アワアワ
しているチャイナ娘を尻目に、俺はその打掛を購入した。

…あのデパートで売ってた宝石二・三個が余裕で買えるぞ…
持ってたよかったジャ・クード・バンムカード、略して」
Bカード。

このプラチナの輝きが（ry
なんてアホなこと言ってる場合じゃねえ。

いや、マジでもっててよかった…

店を出て、打掛をチャイナ娘に渡す。

戸惑い気味だったが、それを受け取る。

「…なんで…こんなの…」

高いアル！わざわざカード使うなんて、お前成金か？！市民の税金
なんだと思ってるアル！」

「バカ言つな。俺はいつもニコニコ現金払い派だ。
今日は…あれだ、たまたまだ」

何をとんでもないことやってやる…

ていうか、早々に買ったものを忘れそうなんだが、これって結婚
式用（強調）の打掛だよな…

つまり…あれ？なんか勢いとはいえ、俺なにしちゃってんの？

ていうか、何この子も普通に受け取っちゃってんの？

え、あれ着てくれるの？

まあ、派手だから結婚式でなくとも…いやいややっぱり…

「……………」

「……………」

重いだろつが、この沈黙！！

何？何話していいかわかんねーし！

どうすんだよ！！これ！

タバコ吸うにも、なんか吸えねーよ！

空気悪くなるよ！

混乱する俺よりも、先に口を開いたのはチャイナ娘だった。

「…ありがとな…こんな高いの…」

「…別に…」

「……………わらしべ長者の気分アル」

「ブッ！」

その一言に、俺はつい吹き出してしまっ。

「確かに！確かにすげーな！

マヨとチロルチョコが、この打掛になるんだから！何百倍だよ？やりやるじゃねえか！」

納得しながら、笑いが収まらない。

そんな俺を見たチャイナ娘は、ちよつと照れたように笑っている。ちよつと駆けて、俺の前に立ち打掛を抱き締めて、俺を見る。

「ホントアル。こんなきれいな着物に、マヨラーまでゲットできたんだからナ！」

一瞬だけ、その言葉の意味を悩んだ。

しかし、すぐに理解した。

え、あれ、もしかして、それって…

「お前との未来プライスレス…ってことか？」

チャイナ娘が、月明かりに照らされて、妖艶に笑う。

その艶っぽさに、クラクラしてきやがった。

くそっ！

だけど目が離せない。

目の前にいる少女が、あまりにかわいらしく、美しいから。

不意に動き、俺に思いつきり抱き着いてくる。

突然のことでバランスを崩しそうになるが、普段から鍛錬はかかしてねえ。余裕じゃ、ボケ。

ていうか、コイツ軽っ！

ついでに…なんかいろいろ柔らけえ……

「知ってるか？未成年に手え出したら、同意の上でも手が後ろに回るアル。」

税金泥棒が、豚箱でも税金の世話にならないように、16まで全部お預けアル。

でも…」

「ご忠告ありがとう。」

ちょっと抱き着かれただけでも、かなりやばかったから。

耳打ちだけでも、アナログスティック暴発しそうんだけど、どうしてくれるの？この小悪魔！

そしたらひょいと降りて、俺の手を握るチャイナ娘。

「時々なら、手繋いでくれたって、訴えないからナ」

なんだそりゃ。

でも、まあ…

「ご忠告ありがとさん。」

生憎、貧相な体に興味はないんでね。16までに、いろいろでっかくなってくれよ？

大体おめー軽すぎんだよ。あんだけ食って、なんでこんな軽いんだ
「よ

「うるせー。待ってる、すぐに羨むようなパンパンになってやるからナ！

16まで手出せないこと後悔させてやるんだからナ！」

「楽しみにしてる」

「おうー！」

そんなことを話しながら、月の綺麗な道を歩いた。

この時は、手を握ってくれた。

まさかのお返しに、これは夢幻なのかと思ったが、目に痛いくらい眩しい月明かりと、握る手の温もりが、これが現実と教えてくれる。

後からめんどくせーことになりそうな予感がプンプンだが、今はひとまずこの時間に酔いしれていようと思う。

- e n d -

お返し100万倍・土神・(後書き)

なんか、ホワイトデーの話が飛躍して結婚話になってしまった…
土方さん、ちよつと生き急ぎすぎです。

カードのくだりは、ボーっと見てたら、なんかプラチナカードの
CMやっつての見て、

土方、一応公務員だし、父つつあんも確か持ってたから、一枚や二
枚、プラチナくらい持つてるよね？なんて妄想したところです。

打掛けに関しては、神楽ちゃんが、超かわいいど派手な着物着てた
らもだえると思つてです。

なんか、変にグダグダ長くなってしまい猛省。

そして、季節ネタをことごとくはずす自分、明日から死んだように
生きていきます。

The end of the world - 沖神 - (前書き)

2年後の沖神？

The end of the world - 冲神 -

お前がいない世界で生きるのが、辛かった。
だから自分を偽った。

その悲しみから、逃れるように。
全てがどうしても良くなっていたんだ。

何故ならあの日、俺の全てだと思っていたモノが消えたから。
その瞬間だった。

世界は終わった。

- The end of the world -

まだ夜明け前。

一番暗いといわれる時間に、目が覚めた。

冬の寒さが一段と厳しい時間。

沖田は思わず舌打ちしてしまふ。

眠れない

ここ最近、どうも浅い眠りが続いている。

夜布団に入っても、眠ることなく朝になる。

夢を…見ているからだろうか。

浅い眠りの時に見る、モノクロな季節に終わりを告げ、優しく暖かな季節を迎える色の夢。

その色は、まさに桜の色。

ふんわりとした笑顔、優しい声。

そう、それは彼女の夢。

触れようと必死に手を伸ばしても触れられない。
彼女はただそこに、たおやかに微笑みながら、立っているだけ。
継り付くような目で見ても、ただ、笑っているだけ。
記憶に残る最後の姿のままで、彼女はそこにいる。
そして、気がつけば目を開けているのだった。

「いつからこんなセンチメンタルになったかねイ……」

自嘲気味に呟いて、窓を開ける。

凍てつくような風。

震えたが、脳を覚醒させるには丁度いい。

いつから……

こんな夢に、苛まされるようになった？

どのくらい……

彼女と別れてから、月日が経過した？

なんで……

あの時、無理矢理にでもいいから、止めなかった？
傍にいと、どうして言えなかった。

その手を掴んで、檻にでもぶち込んで、いつそ監禁でもしてしま
えばよかった。

恨まれてもいい。憎まれてもいい。

ただ、自分の傍にだけいてさえくれれば。

そんなことばかり考えて、もう二年の月日が流れた。

記憶の中にいる少女は、まだあどけない。

沖田は頭を振り、洗面所に向かう。

冷たい水で顔を引き締め、表情を作る。

真選組の皇帝として、部下をまとめあげよう。

江戸城を落とし、そこに巢食う天人共を配下につける。

そうすれば、星々を飛び回る彼女の情報も入りやすいだろうから。

二年で帰ってくるとは言いが、また旅立たれてしまったら困る。

手は常に先に打たなければ、今回のようなことになりかねない。

彼女の居場所を突き止め、行方を常に掌握していきたい。

ただ、それだけのため。それだけのために、沖田はここまで真選

組を大きくした。

理由を知れば、バカだろうと思うだろう。

彼女に、会いたい。

それだけで、ここまでやってのけたのだ。

後は、そう…

「邪魔立てするなら、排除もやもなし…か…」

いつも彼女の隣にいた。

いつも彼女と共にいた。

うざいくらいに輝く、銀色の髪の子。

「坂田…銀時………」

名前を言うだけでも悍ましい。

遠く恋い焦がれる少女は、今でもあの男を想っているのだろうか。

複雑に絡み合った糸は、もう解けることはない。

解けることがあるとしたら、それはきっと彼女の体も心も、全てを手中に収めたとき。

彼女の脳内も視界も全て、沖田総悟という男で埋め尽くされたとき。

さあ、二年経った。

もうすぐ帰ってくる。

その時に、全てを終わらせてみせる。

そして、終わった世界の再生を、君と…

目の前が暗くなっていく。

当たり前か、あれだけの攻撃を受ければ、当然だ。

遠のく意識の中で聞こえたのは、まるで絹を切り裂くような声。

沖田が待ち望んでいた彼女との再開。

こんな形になるなんて夢にも思わなかった。

有らんばかりの声で叫ぶ神楽の声は、ぼんやりとして聞き取れない。

姿もよく見えない。

きつときれいになったのだろう。

ふいに、沖田の頬に冷たいものが零れ落ちてきたのに気付いた。

それが神楽の涙だとわかるのに、時間はかからなかった。

「何…泣いてん……でイ……」

それは、自分でも驚くほどに掠れた声だった。

もう永くない…沖田は悟った。

ただ、それでも神楽の姿が見たかった。

こんな形になるうとも。

いや、きつとこれは己の私欲に走ったことへの罰であろうか。

もっと、もっと違う形で、この未来に居たなら、こんなことにな

らずにいたのだろうか？

崩壊した世界を、神楽とまた作り直そうと思っていたのに。

あの時、ぼんやりと想像していた世界と、違うこの世界の幕切れは、呆気なさ過ぎた。

あんなにも恋い焦がれ、神楽のために生きた2年が、静かに消えていく。

柔らかな感触が、沖田の後頭部に当たる。

「…柔らけえ……」

なんだよ……いろいろと成長しやがって……どんだけきれいになって……ん……でイ……

…もっ……目が霞んで……オメーの姿よく……見えねえのに……」

きつと、美しくなっているだろう神楽の姿はよく見えないが、きれいな桃色だけは目に焼き付いた。

それは神楽の髪が靡いて、まるで桜が舞うかのように沖田の目に映る。

春を告げるこの色が、ずっと冬のように薄暗かった世界に終わりを告げるかのようにだった。

世界は、こんなにも明るい

2年前に失った世界が、沖田の脳裏によぎる。

なんでもない、他愛もない話をしたり、時に喧嘩したり、あの日々が鮮やかに蘇る。

そつと、沖田はその思い出を刻むように、神楽の頬に触れる。

暖かく柔らかい頬に触れる、冷たい手を包むように、神楽もその手を重ねる。

「死ぬな……死……っ……死んじゃ……死んじゃダメアル……総悟……!!!」

やっと…やっと会えたのに……！」

神楽の悲痛な声もむなしく、沖田は静かに目を閉じる。

今まで張り詰めていたもの全てが、緩んだからだろうか、それとも己の死期を悟ったからだろうか、その顔は少し穏やかだった。

一番初めに会ったら、何を話そうか？

どこに行った？

どんなものを食べた？

広い宇宙の感想は？

この星よりもきれいな星はあったか？

聞きたいこと山ほどあったのに、愚かな考えのせいで忘れていた。ただ、神楽と、今までどおりに、他愛のない話をして、喧嘩をして、また話して…

そんな当たり前を、どうしてできなかったのだろうか、後悔しても、全ては手遅れだった。

微かに唇を動かし、沖田は息も絶え絶えに神楽にある言葉を言う。ずっと、ずっと言えなかった言葉を。

「愛して…る……」

神楽……」

「総悟！

総悟おー！」

身勝手だと知っている。

最期に名前を呼び、愛を告げるなんて、どれだけ卑怯なのかも知っている。

それでも、名前を呼ばずにいられない。

それでも、愛を告げずにはいられない。

沖田はただ、純粹に神楽を愛していたから。

お前の膝の上で死ねるなら…本望だから…
だから…
泣くな…？

「いや、何シリアスぶってんだよ。
お前らイボだからな、イボ。
イボの悲劇ってなんだよ、これ。
まったくもって意味わかんねーよ」

後ろから新八が、地味にイラついた顔で悲劇のスポットライトが
点灯している沖田と神楽を見ている。

そして、ハリセンを構え、いい感じに振りかぶった。
晴れ渡るお江戸かぶき町の空に、パシーンと、いいハリセンの音
がこだましたのだった。

- e n d -

The end of the world - 沖神 - (後書き)

アニメ再開おめでとう&2年後篇の神楽さんのパイオツ揺れすぎ記念のバカイザー×神楽さん話…

公式でも膝枕だし、なんかカオスな感じになってるけど、私の中ではもっとカオスになりました。

最初バカイザーが出たとき、ああ、神楽ちゃんに会えなくて沖田病なんだな…なんて、思ったからさ！テへしたらこのざまだよ。

ただのイボオチだしw

もういろいろ詰め込んでわかんなくなっただわ…

守るべきもの・定神・(前書き)

定春×神楽？？

守るべきもの - 定神 -

白くフワフワの毛が、神楽の身体を包む。

定春、と名づけられた巨躯の狛犬は、大好きな主である神楽と共に木陰で眠る。

太陽の陽射しに弱い神楽のために選んだ、取って置き場所。

柔らかな風が吹き、カサカサと草木が揺れる。

不意に、定春の鼻がムズムズとした。

風に飛ばされた葉が、定春の鼻に当たっていたのだ。

クシュンっとくしゃみをして、眼を覚ます。

しまった。

神楽は寝ているというのに、巨体を思わず揺らしてしまった。

起きてしまったか？と恐る恐る神楽を見たが、スヤスヤとよく眠っている。

神楽の神経の図太さに、定春はホっとしたが、よく見れば、神楽はほんの少しだけ眉間に皺を寄せている。

起こしたわけではない。

では、安眠を妨害されたことへの、ささやかな抵抗か？

…違う……

どうしたのだろうか？

怖い夢でも見ているのだろうか？

ふと、最近吉原とか言うところで、兄に会ったと言っていたのを思い出す。

その時の神楽の表情が忘れられない。

とても辛そうで、苦しそうな表情だったのだから。

自分はいやべれないし、優しく抱きしめてあげること、どうすることも出来ないのが悔しかった。

傷を負って帰ってくる日も、震える手で抱きついて、泣いている日も。

何もできないなんて…

ただ傍にいて、傷が癒えるのを、泣き疲れて眠るのを、見ていることだけしかできなかった。

なぜ自分はこのなにも傍に居るのに、何もできないのだろう。泣いているとき、辛いとき、苦しいとき、いつだって傍にいるのに。

温もりを伝えるには、あまりにも遠い…
- けれど…

神楽のお腹からずれてしまっているしっぽを少し動かす。フワフワのしっぽが、神楽を包み込む。

その感触と、温度に安心したのか、神楽は顰めていた眉を緩ませる。

それを見て定春は、何よりも愛おしそうに神楽を見る。

これでいい。これでいいんだ…

多くは望まない。

出来ることなんて、たかが知れている。

だからこそ、自分にしかできないことをやる。

目に見えるものだけに、惑わされないように、優しくて、強くて、儂い。

そんな彼女が苦しまないように、悲しまないように、全てから守ろう。

次の朝も夜も、その次の日も、ずっとずっと永遠に。

僕はキミだけを守るために、生きていく。

· d n e ·

守るべきもの - 定神 - (後書き)

短い、定春と神楽ちゃんの話。

時系列は、兄貴と出会ったあの辺かな？

定春はなんだかんだ神楽ちゃんのこと大好きだと思っ。

あの巨大化した時だって、定春を身を挺して守ったのは、他でもない神楽ちゃんだし。

そのことももりこみたかったけど、なんか消化不良気味。

まあ、それはそれで、別に話を作ろうかな〜なんてw

うーん…しかし定春、めっちゃ一途w

セクハラを笑って許せる社会を目指して - 兄神 - (前書き)

兄神？かなり言ってること際どいですw

セクハラを笑って許せる社会を目指して - 兄神 -

「というわけで、俺にも友達出来たんだヨ。
やったね神威ちゃん、友達増えたよってかんじ？」

「へー」

「あー…そう…」

それはよかったですね…

えーと…お兄さん？」

万事屋、いつものダラダラデイズにやってきた招かざる客。

そう、あの笑顔がなんだか妙に胡散臭い男。

アイツが万事屋のソファに座って、何やら勝手に一人で話し始めていたのだった。

「あ、俺アンタにお兄さんって呼ばれる筋合いないから。

俺さあ神楽以外に、お兄さんとか兄ちゃんとかにいとかが兄上とかお兄様とか言われると、虫唾が走るんだよね。

お前の兄になつた覚えはねえよ。俺の妹は神楽ただ一人なんだよ。とりあえずその舌噛んで死ねって言いたくなるよまったく。

まあ神楽を嫁に出す気なんてさらさらにないから、今ところ心配ないけどさ。

って、何？まさか神楽狙つてんの？殺すよ。違う？ならいいや。というわけで、神威でいいよ。えーっと…天パ？」

ワンピースでよくもまあペラペラと、ここまで出るもんだな…

話している内容は犬の糞以下の単語しか並んでいないんだけど、迫力で押してやがるよ。

と、その饒舌ぶりを見て神楽は呆れてしまう。
しかし、天パ呼ばわりされた銀時は、顔に青筋立て、地味にキレる。

「うるせーんだよ、下手に出りゃ調子こきやがって、このシスコン野郎。」

サラツサラヘアのテメーに、天パの苦しみがわかるか？
縮れたキューティクルの虚しさがわかるか？

三つ編みにして解いたらウェーブがかかるなんてレベルじゃねえんだよ。

こちらら、ダ ソンだって吸引力変わるレベルで毛根が捻じれてんだよ。

オメーにはわかるめえ、今まで使ったトリートメントの量を！
わかってたまるかってんだ、コノヤロー！」

「へー。じゃあ、いつそ坊主にしちゃえばいいじゃん。」

洗うの楽だし、トリートメント（笑）をこれ以上無駄にしなくて済むんじゃないの？

将来ハゲてからも坊主ですって言い張ればいいんだから」

「上等だ。表出るコラ。」

作られたウェーブと天パに違いをその身に叩き込んでや……」

「お前らいい加減にしるヨ。」

くだらない頭髪戦争してるなら、とっとと帰れヨ、クソ兄貴。

ちなみにお前はあのパピーの遺伝子持ってんだから、お前自身がハゲる心配しろヨ。

他人事じゃネーゾ、バーカ」

言い争いに飽きた神楽が、ソファの上で胡坐をかき、鼻をほじり

ながら突っ込む。

「俺は親父みたいに髪を痛めつけてないから、まだ平気。ていうか、神楽？女の子なんだから人前で鼻ほじらない。あ、終わったらその指しゃぶっていい？」

「死ネヨ、汚物」

「スイマセン、身内じゃないんで言うの躊躇われますが、とりあえず死んでください。」

そして二度と現世に戻ってこないでもらえませんか？」

「辛辣だね〜お前ら〜」

何言われても特に気にしてないのか、神威は笑いながら神楽の指を掴もうとする。

舐められてたまるかと、神楽は必死に避ける。

銀時も、神楽に近づかせまいと、素早く後ろに回り、羽交い絞めにするが、さすがに夜兎の力にはかなわない。

あっけなく神楽の指は神威の口の中に。

しかも丁寧に、かなりいやらしく舐めている。

指先から、レロ〜とペロペロしている。

いやらしい。これは大層いやらしい。

「ギイヤアアアアア！〜」

神楽は、あまりのことに鳥肌が立ち、断末魔の叫びをあげる。

そんなことを気にしない神威。

ていうか、その叫び声すらもきくと心地いいんだろう。

とても満足そうに微笑んでいらっしやる。

その横で「神楽が穢された…」とさめざめ泣いている銀時。
なんとも阿鼻叫喚の図である。

「あのー…何してんですか…」

その地獄絵図に現れた一筋の光明。
突っ込みの新八が現れた！

「ちょっと、何人任せにしてんの、この作者！
ていうか、なんでこんなに散らかってんの！」

「見てわかるだろ？神楽のお兄さんが遊びに来てんだよ…」

銀時がやれやれといった感じで、今までのやり取りを新八に話す。
当の神楽と神威は、万事屋を破壊するような勢いで喧嘩している。
しかし、やはり春雨の雷槍と言われし神威。この若さで師団長は
伊達じゃない。

神楽、いつの間にか押し倒されて、拳句服の下に手を突っ込んで
いる。

なんとという18禁タイム。

「ちょっとアンタ！何してんの！」

このままではマズイと判断した新八が、素早く突っ込む。

「うるさいなー…あんまり邪魔すると、コカンコーラの瓶突っ込む
よ」

だが神威も突っ込み返す。

まあ、突っ込む意味が違うが…

「お前童貞だろ？どうせ風呂入った時とか、神楽の陰毛見つけてレロレロしたり、シーハーしたりしてんじゃないの？」

「するわけねえだろおお！」

「じゃああれか、入った後の風呂の水とか飲むんだ」

「飲むわけねーだろおお！」

「隠すなヨ。大丈夫大丈夫。俺がもう既に通った道だから」

「アンタ実の妹になにしちやってんの?!」

怒涛の神威のセクハラ攻撃に、神楽はもちろんのこと、新八まで体力が削られていく。

ていうか、そんなことやってたのかよ…

もう、タジタジな（童貞）新八の「童貞って言うんじゃないよ！」「、目に余る突っ込みに、このままではいかんと銀時が再び立ち上がる。

「バカなことやってんじゃないやねえ。神楽はなあ、まだツルツルのペツタペタなんだよ。」

そんな茂みなんて存在しねーんだよ、残念だったな、お兄さん」

神楽を守るため、立ち上がった俺、かっこいい…
そんな感じのキラキラを巻く銀時。

「」「」……「」「」

神楽にセクハラするのが大好きな神威は、満面の笑みで、呟いた。
その後の万事屋一行、友達出来た報告にやってきた高杉に全部ぶ
っ壊されたのは、また別のお話。

- e n d -

セクハラを笑って許せる社会を目指して - 兄神 - (後書き)

神威の下ネタ見たい！という素敵ナリクエストを頂き、幾日：

下ネタっていうか、セクハラネタっていうか、アザゼルさんネタ多くてごめんなさい。

ああいう下品なもの大好物です。

私も、神楽ちゃんの入った後のお風呂の水を飲みたいです。

ていうか、最近高杉才子要因になってるなあ…

僂倅の果てに・高神・(前書き)

高神で、なんか甘い？

僥倖の果てに・高神・

お前を愛してる。

なあ、お前はどんなんだ？

どうしてそんな目でみている？

決して触れさせないように、どうして身構える？

それでも、お前がほしい。

たとえどんな形になろうとも、傍に居てほしい。

どんな手段を使っても、手に入りたい。

ただ、それだけを願った。

「よく寝こけてやがるな……」

高杉の目の前には、ソファで眠る神楽がいた。

よく見れば、お腹にバスタオルがかかっている。

また子か、他の誰かがかけていったのだろうか。

その前に気付けなかったことに、高杉は小さく舌打つ。

とりあえず高杉は、神楽の隣に座る。

クウクウと小さな寝息を立て眠る少女の姿は、とてもかわいらしい。

呼吸をする度に上下する小さな胸も、寝返りを打つ時に揺れる髪も、その愛らしい寝顔も、全てが愛しい。

「神楽……」

高杉が思わず、名前を呼ぶ。

眠っている神楽に、どんな反応を求めたわけではない。

ただ、神楽が、傍に居るといふことを実感したくて。もご…と口元が動き、何やら言っている。起こしてしまったか？

それとも、ただの寝言だろうか？

高杉が、耳を口元に近づける。

「へ…へい…お茶菓子らっしゅい」

『どんな夢見てるんだ……』

寝ているときまで食べ物や物の夢なんて、神楽らしいな。

高杉は笑って、神楽の寝顔を眺める。

あまりのかわいさに勢い余って、触れるだけの優しい口づけをする。

ただ、そこは慎重に、寝ている神楽を起こさないように。

手に入れた

目の前に、どれほどまでに焦がれただろうか、神楽がいる。

この広い宇宙で、幾千、幾万もの生物の中で出会えた偶然。

僅かな誤差さえも許されない、奇跡。

眠る神楽の頬に触れ、高杉は思う。

決して、離さない。と。

「…ちゃん…」

不意に、神楽の口から、聞こえてはいけない言葉が聞こえた。

眉を顰め、誰かの名前を呼んでいる。

それがに気付いた高杉は、懐から小さな香炉を取り出し、手早く中に香を詰め焚く。

何とも言えない、甘ったるい香りが充満していく。そして高杉は、更に煙管を咥え、煙を燻らせる。

まだ、完全ではないのか…
今確かに、あの男の名前を呼んだ。

噎せ返りそうな甘い香りの香を少し煙管に撒き、燻らした煙を口移しで神楽に吸わせる。

焦燥感を抑え、勤めて高杉は冷静にことを進めていく。
羨望が、憎悪が、独占欲が蠢き出す。

本当ならば、今すぐにでも、今名前を呼んだ連中を皆殺しにした
い。

神楽自身の瞳に、高杉以外を映らせなくするために…
そんなことを思いながら、唇を離し、神楽の柔らかな髪に触れて
いた時だった。

「…たか…すぎ……？」

目をこすりながら、神楽は目を覚ます。

香を焚いている最中に目を覚ますなんて…恐らく、この甘い香りが、神楽の琴線に触れたのだろう。

それでも高杉は動揺することなく、神楽の頭を撫でる。

「なんだあ？腹でも空かして目え覚ましたのか？」

「れでいーに向かつて何てこと言うネ！

そんなことあるから、なんか食べたいアル」

「正直なお姫様だな。行くぞ」

そう言って、高杉は神楽の小さな手を引いた。

あくまでも普通に、さも当然のように振る舞う。

今まで、ずっと傍に居たかのように。

ほんの僅かな違和感さえも、決して許されない。

さすれば、勘のいい神楽のことだ。たちまち気づいてしまうだろう。

だから、細かな癖も見逃さない。

すべてを知っていると演じる。

それを、騙し、欺きだとしても、こういう手段でしか手に入れない悔しさが募ろうとも。

願う。

ただ、傍に居てほしい、愛してほしいと。

自分以外の誰にも、触れさせたくない…

複雑に絡む感情の奥にある、ただ一つの狂った愛情。

傍に居てくれるのなら、演じ続けよう。

神楽の前では、優しい男を。

そして、いつか時が来たら遂行しよう。

神楽の目の前で、奴ら全員を惨殺しよう。

どれほど、高杉が神楽を愛しているかをわからせるために。

それは儀式。

この広く果てしない宇宙の果てで出会えた、僥倖を永遠のものとするために…

- e n d -

僥倖の果てに・高神・（後書き）

高杉誕生日おめでとうなノリの高杉と神楽ちゃんのアレな話…

そもそも手に入れたるために結構まどろっこしいことしてる高杉とかいいよね！なんてノリです。

まあ、なんか便利なものいろいろ想像してくださいw

まあ、最終的に惨殺してるあたりが高杉です！ポウ！

雁の啼く頃に・高神・(前書き)

イチャイチャ高神

雁の啼く頃に - 高神 -

それはそれは、見事な満月だった。

昼の温い空気と、宵闇の冷たくなり始めた空気が混じり合い、ちよつど良い風となり、桔梗の花と高杉の髪を揺らす。

夜の静寂を煌々と照らす月明かりは、昼の太陽のように眩しい。

しかし、太陽ほどきつ過ぎないその姿が、高杉の手に持つ盃に映される。

中秋の名月、とはよく言ったものである。

この、日本人の美的センスは嫌いじゃない。

だからこそ、わざわざこの時期に宇宙から地球に降り立ち、鬼兵隊が地球での根城にしているこの屋敷にやってきたのだ。

そう、ただこの美しい月を見るためだけに。

しばらく間を開けたせい、屋敷の中は少し埃っぽくはなっていたが、縁側で酒を飲むだけだから、大して気にはならない。

逆に古びた縁側と、僅かに鼻を搗く黴臭い臭いは、美しい月明かりと対比するような酒の肴となれば、味わい深いものだ。

高杉は、そんなことをぼんやりと考えながら、静かに酒を飲んでいた。

「今日はまた、一段ときれいな月の日だなあ。

そう思わねえか？じゃじゃ馬姫」

不意に話しかけられ、高杉の横に供えてある団子に、後ろからソロソと手を伸ばしていた神楽は、驚きのあまり手を引っ込める。

「気付いてたアルか!!」

「行動がわかりやすいんだよ、テメーは…」

「…むう」

真意を突かれ、ぐうの音も出ない神楽は、渋々と団子をじと目で見ながら高杉の隣に座る。

「どんだけ喰い地が張っているんだと、溜息をつきそうになるが、高杉は何も言わず団子を神楽の傍に移動させる。

すると、先ほどまでの団子を狙う意地汚い目とは違って変わって、キラキラとした目で高杉を見る。

「いいアルか！！ほんとに食べてイイアルか！！」

「俺あ、甘いのはあんまり食わねえんだ。

どうせ飾りに置いといたもんだからな」

「ありがとアルー！

わーい！！いっただきますヨー！！」

そう言って、神楽は月見団子に手を伸ばし、口に入れる。

高杉が、わざわざ買ってきたものだ。きつと、高級な店で買ったに違いない。

その証拠に、恐らく上等な上新粉とあんこを使っているのだろう。モチモチとした団子の弾力と、あんこの甘みが口に広がり、なんとも満足そうな顔になる。

甘いものは、人を幸せにするというが、まさに今、神楽は至福の時を味わっている。

そんな神楽を見て、高杉は満足そうに笑い、煙管を啜える。

静かに息を吸い、そして吐き出す。

美しい満月に、うまい酒とタバコ。そして…

「きれいだな」

月を見ながら、高杉は呟く。

その答えなんて期待はしていないが、チラリと横目で神楽を見る。

「そうアルな！」

私アンコはこしあんより、つぶあん派アルヨ！

でもお団子はこしあん派ネ！

このなめらかな舌触りが、あんこを包んでるおもちと調和して、より上品なものに仕上げてるネ！

つぶあんだったら、やっぱり草団子ネ！

ヨモギの野性味溢れるおもちに、小豆本来の食感を楽しめるつぶあんのほうが…」

モツチャモツチャ団子の食感を楽しみ、更に団子の美しい球体を凝視し、自身のおんこへのこだわりを話しながら、神楽は団子を食べ続けている。

もちろん、高杉の呟きなんて、聞いちゃいなかった。

「ああ、そうだな…」

『食べる時は、食べ物以外のことに眼中にないのか…』

というより、なんでこんなやたら饒舌？イン ル入ってる？』

ややげんなり気味になりながらも、高杉は酒を啜る。

しかし、これほどまでに、おいしそうに食べているんだ。

見ているこっちが幸せになる。

まあ、神楽のことは今に始まったわけでもないし、とりあえずかわいからいいか…と、高杉は考えるようになる。

次第に高杉は、月ではなく、神楽をじっと見つめるようになる。

その視線に気付いたか、神楽は少し考えた風な仕草を見せ、高杉に最後の一つだった団子を差し出した。

「食べたいなら、一つあげるアル」

イイネ…気にしなくて…もともと高杉が買ってきたんだから……」

ものすごく途切れ途切れで、かなり歯切れ悪くしゃべる。

もう、どんだけ団子食いたいんだよ…そこまでして食べたなら、なんか巻き上げたみたいじゃん、突っ込むかと考える高杉。

だがそこは大人の余裕をかまし、その団子をそのまま神楽の口に入れ、キスをする。

神楽は、団子を急に口に入れられたのと、キスをされたので驚き、喉の団子を詰まらせそうになるが、口内に侵入する高杉の舌がその団子を少しずつほぐしたりなんやりしていく。

なんつつ食べさせ方だ！と言いたかったが、いつの間にかガツチリ肩を掴まれ身動きできず、なすがままに、神楽は高杉のキスを受け入れる。

やがて喉奥に固形物が通過するのを感じた。

咽そうになるが、かなり滑りがよかったのか、少しえづいただけだった。

それにしても…

「最つつ低の食い方されたアル！！

せっかくのお団子が台無しネ！」

神楽が思いつきり怒り始める。

それはそうだ。

まさかの食べ方に、断腸の思いであげた団子が蹂躪されたのだ。

怒りをあらわにせずにはいられない。

しかし、当の高杉はいつもの顔で、静かに脇に置いていた煙管を
燻らせる。

「テメーが俺にくれたんだろ？
それを二人でわけただけだ」

「…むう」

なんとも言えなくなるような高杉の言葉に、神楽はまたしても黙
り込んでしまう。

というより、うまく丸め込んだだけなのかもしれないが。
唇を尖らせて、神楽は高杉の肩にもたれかかる。

いつもなら甘える仕草を見せるのだが、今日はそれをしない。
くつつくだけくつついという、顔は絶対向けてやらない。

先ほどのことへの、細やかなる仕返しのもりだが、高杉は気に
せずに神楽の肩を寄せる。

顔を見ないようにそっぽを向くが、髪を撫でたり頬に触れるだけ
で、高杉は無理に顔を向けさせようとしなかった。

しかし、触れているだけで愛しいと思う気持ちが伝わっているよ
うな気がして、結局神楽は根負けしてしまふ。

なんと高杉の気長なことか…
呆れるよりも、逆に感心してしまふ。

ちよつと腑に落ちない顔をして、高杉の膝の上に乗る、向かい合
わせになる神楽。

「バーカ…次やったら許さないE…」

「頭の片隅に覚えといてやるよ…」

そんな神楽を見て、高杉は満足そうな笑みを浮かべる。

月明かりに照らされ、覗く神楽の白い頬に触れ、高杉はその額に、耳に、頬に唇を落とす。

こんなにも愛されている。

まるで泡沫のようなこの時間が、永遠に続けばいいのになんて、有もしいことを願ってしまう。

神楽は静かに高杉の首に手を回し、その唇を合わす。

美しい月明かりの元で、言葉少なに誓い合う愛。

二人の行く末を誓い、確認する。

これほどまでに穏やかな世界を、二人で。ずっと。永遠に。

それは、満月だけが知る二人だけの世界。

- e n d -

雁の啼く頃に・高神・（後書き）

中秋の名月を見て、高杉ごっこしてたら思いついたネタです。

もう、なんか高神でこんなラブラブしてていいのかって思うわ…

もっとアレな話も作りたいのに、なんかイチャついてくれるこいつらが好きです。

ちなみに私、アンコはつぶあん派です。たまにこしあん派の友達と言い争ってます。

レッツゴーハロウィンスクリーム・鬼兵隊×神楽・（前書き）

鬼兵隊×神楽？のハロウィン小説

レッツゴーハロウィンスクリーム・鬼兵隊×神楽・

「また子ー、お菓子寄越せヨ」

後ろから神楽の声が近づいてくる。

しかも、ものを頼むにしては、ちょっと乱暴な物言い。いくらなんでも、強盗まがいのことは教えたことはない。

育て方間違ってんスカねー…なんて思いながら、また子は溜め息をつきつつ振り返る。

いい加減、神楽に教育的指導が必要か…と、思っていた矢先。

「何強盗めいたこと言ってんスカー…まったく…女の子がそんな…

…

って！何！何その格好！！」

振り返った先にいた神楽は、何とも鮮やかな赤の生地で作られた魔女っぽいワンピースを着ていた。

ところどころについている黒い装飾が、赤だけのワンピースに、落ち着いたシックな感じを醸し出している。

おまけに袖部分がヒラヒラと広がっており、これまたかわいらしさを演出している。

頭のでっぺんからつま先まで、あんぐりとした表情でまた子は神楽を見る。

髪はおだんごになって、ワンピースと同じ生地の魔女帽子を被り、靴は赤いハイヒールと黒のタイツがまたいい感じの色合いである。

まあ、簡単に言つと、2010年度ディニーハロウィンのミィちゃん衣装を着た神楽だった。

かわいい衣装。だが顔が…

「なんでそんな化け物メイクなんスか!!」

そう、今の神楽の顔は、某キャバクラの回で見た、ひどいメイクだった。

完全に衣装とメイクが浮いている。

ていうか、気持ち悪い…

「え、魔女だし…」

「え、魔女だし…じゃねえっス!化けモンになってるから!ちよっと待つっス!」

何が間違ってるんだ?と言わんばかりの神楽だったが、すばやくまた子が動き、どこからか出したメイク落しで神楽のメイクを落とし、メイク道具で再構築する。

白い肌にファンデはいらない。ラメパウダーを軽くはたく。おてもやんのようなチークは、ほんのり色づくピンクにした。

濃すぎるアイメイクは、魔女コスだということを考慮して少し色を落ち着かせた青のシャドー。

それに軽く紫のアイラインをまぶたに引き、さらに黒のペンシルで目の際までラインを引く。

「出来たっす!」

鏡を渡し、完成したメイクを見せる。

そこには先ほどの化け物とは違う、愛らしい魔女っ子ミ…:じやなく、神楽がいた。

当の本人、思わずほおお!と感嘆の声をあげている。

喜びの笑顔を浮かべ、くるくる回ったり、いろいろかわいいポーズを取る神楽を見て、また子の顔はだんだんと緩んでいく。

『やっぱりかわいいっス…
また子、よくやった！グツジョブっス！』

抱きつきそうになるのを必死で堪えて、いろいろポーズを取っている神楽を見て、ニヤニヤゴソゴソと着物の袖からカメラを探るまた子。

と、そこに…

「何してるでござるか…

……！」

後ろから万斉がやってきて、悶えているまた子を見てあきれたよ
うな声を上げる。

しかし、また子の陰になっていてわからなかったが、近づいてみ
れば、そこにかーわーいーいー魔女っ子の神楽がいることに気付
き、凝視してしまう。

サングラスで隠れているが、間違いなくガン見している。ものす
ごくかつ開いている。

そしてカメラ（一眼レフのバズーカ付）をどっから取り出し、
神楽の写真を撮り始めた。

「神楽殿、目線こっちに。

バストアップと、全身いくでござる」

「ちょ！先輩！！ズルイっス！

あ、見つかった！よし！

また子にも目線欲しいっス！

神楽、こっち向いて、ああ、そうそう。で、ポーズは……」

コンデジを取り出したまた子も、わいのわいの言いながら、写真を撮りまくる二人。

「魔女っ子萌っでござる!!」

「おばけのポーズ萌っス!!」

この二人の異様なテンションに、だんだんと神楽の顔も引きつってくる。

こいつら、こんなキャラだっけか…?

そして、そんな様子を物陰に隠れながら眺める人物がいた。

「計画通り…ッ」

武市が、某マンガの主人公のような顔で呟く。

まさにメロメロ。まさにデレデレの二人。

これでもう自分を変態だの、ロリコンだのとは言わせない。

なぜならっ…!

変態は自分だけではなく、あの二人も変態…!

つまり…っ!

「同じ穴の貉…!」

効果音にざわ…ざわ…が聞こえてきそうな、したり顔の武市。

そんな武市の横を、通り過ぎる影があった。

「おや…高杉ど…の?!」

武市の普段からパッサパサに見開かれてる目が、さらに開眼した。通り過ぎた高杉の格好。まさにハロウィンの姿。

確かに高杉は、普段の着物は女物の派手な柄なのだが、いかんせん、派手さの次元が違う。

ど派手なオレンジのコートに、紫のズボン。薄い青のカッター。濃い紫のシルクハット。

同じ紫のド派手なマントを翻し、無表情で神楽の方にまっすぐ向かう姿は、まさに2010年度ディニーハロウインのミキの衣装を着た高杉だった。

あ…確か神楽に着せる衣装を薦めたのは高杉だったっけ…それを思い出した瞬間、武市は全て納得がいった。

ただのあの連中の性癖露出のために、こんな手の込んだ衣装を着させるか？

いや、やりかねないが。

そもそも、自分にこんな助け舟を出すわけがない。そう思えば合点に行く。

どこで覚えてきたか、ハロウインというイベントに、こういう恰好させたいからだ。

これから同じようなミキちゃんの格好をした神楽と一緒に、おばけのハロウインパーティーに参加するのか？

ていうか、なんでアンタまでそんなの着てんの？！

唖然としている武市を他所に、高杉は撮影会状態万斉とまた子を退け、神楽をとっ掴まえた。

「神楽、おばけのハロウインパーティーに呼ばれてるから、もういくぞ」

、そう言って、神楽を抱え走り去る。

その速さにその場にいた全員、呆然とするしかなかった。

まあ、どう考えたって叶わないのは目に見えているから…

なんか釈然としないが。

というより…

「パーティーって…誰とどこで？」

疑問符しか浮かばない三人なんて気にすることもなく、高杉は神楽と共に消えていった。

そう、何故なら高杉は、おばけからハロウィンストリートで、おばけのハロウィンパーティーの招待状をもらったから。

この後二人がどうなったかは、おばけのみぞ知る。

- e n d -

レッツゴーハロウィンスクリーム・鬼兵隊×神楽・（後書き）

ハロウィン話：

先日デイズニーハロウィン行ってきたんで、まあ、着てる服はトックでも飾ったあれです。

やっぱり鬼兵隊連中と神楽ちゃんを書くと、大体高杉がおいしいところかさらっていきますね。

とりあえずおばけのストリートでパーティってる二人を妄想していただければ幸いです。

ほんと、私は鬼兵隊の連中を変態ロリペドの性癖三重苦にするのが好きみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4254v/>

桜兔と愛の歌

2011年10月31日23時04分発行